岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第496集

千足南遺跡発掘調査報告書

せんぞくみなみ

農用地総合整備事業関連遺跡発掘調査

2007

緑資源機構東北北海道整備局
下閉伊北建設事業所

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

千足南遺跡発掘調査報告書

農用地総合整備事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包含地があり、10,000ヵ所に及ぶ遺跡が確認されております。先人の残した文化遺産を保護し保存していくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、快適な生活を送るための地域開発と社会資本の充実もまた県民の切実な願いであります。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって消滅する遺跡について、歴史資料・史料としての遺跡情報の記録保存を目的とした調査・研究を行ってまいりました。

本報告書は、農用地総合整備事業に伴って平成17年度に行われた田野畑村千足南遺跡の発掘調査の結果をまとめたものであります。調査によって縄文時代早期～前期を主体とする遺構・遺物や古代の竪穴住居跡が発見され、本県沿岸北部においては貴重な資料を多数得ることができました。この報告書が広く活用されることで、東北地方における地方史研究の発展や、埋蔵文化財に対する県民の理解を深めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご理解とご協力を賜りました緑資源機構東北北海道整備局下閉伊北建設事業所、田野畑村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成19年２月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長　武田　牧雄

例　言

1　本報告書は、岩手県下閉伊郡田野畑村字千足59－16に所在する千足南遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2　本遺跡の発掘調査は「農用地総合整備事業」に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と緑資源機構東北北海道整備局下閉伊北建設事業所との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　本遺跡の調査成果の概略は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第490集『平成17年度発掘調査報告書』に公表しているが、本書の内容を優先するものとする。

4　本遺跡の岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡コード番号並びに遺跡略号は以下の通りである。

遺跡コード番号　：　ＫＧ11－1013

遺　跡　略　号　：　ＳＺＭ－05

5　発掘調査期間・調査面積（調査対象面積）・調査担当者は、以下のとおりである。

調　査　期　間　：　平成17年６月１日～７月29日

調　査　面　積　：　2,297㎡

担　　当　　者　：　米田　寛・林　　勲

6　室内整理期間及び整理担当者は、以下のとおりである。

整　理　期　間　：　平成17年12月１日～平成18年３月31日

担　　当　　者　：　米田　寛・林　　勲

7　野外調査での遺構写真撮影は調査員、遺物写真撮影は当センター写真撮影を専門とする期限付き職員が担当した。

8　本報告書の執筆はⅠを緑資源機構東北北海道整備局下閉伊北建設事業所、Ⅱ～Ⅳ・Ⅵを米田が担当し、編集・校正は米田が行った。

9　出土遺物の鑑定・分析及び業務委託は次の機関に委託した（敬称略）。

種子同定……吉川純子（古代の森研究舎）　　火山灰同定……柴　正敏（弘前大学）

年代測定……株式会社 加速器分析研究所

10　発掘調査・整理作業・報告書作成にあたって以下の方々に御教示・御協力をいただいた。

安達尊伸（田野畑村教育委員会）、神原雄一郎（盛岡市教育委員会）、

坂川　進（八戸市博物館）

11　本報告書に掲載した地図は以下の通りである。

国土交通省国土地理院１：25,000地形図「沼袋」（ＮＪ－54－13－１－３）

12　本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　次

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡の立地と環境……1

1　地形と気候……1

2　周辺の遺跡……4

3　基本土層……4

Ⅲ　調査の方法……6

1　発掘調査……6

2　室内整理……7

3　掲載図版・観察表解説……7

Ⅳ　遺構・遺物……10

1　概要……10

2　遺構……10

3　遺物……32

Ⅴ　分析・鑑定……46

1　千足南遺跡２号竪穴住居跡より出土した炭化種実……46

2　年代測定分析結果……48

3　千足南遺跡出土の火山灰について……50

4　分析結果の所見……51

Ⅵ　まとめ……52

1　遺構……52

2　遺物……53

引用・参考文献……54

報告書抄録……74

図版目次

第１図　千足南遺跡の位置と周辺の遺跡……３
第２図　基本土層……５
第３図　調査区設定図及び遺構配置図……６
第４図　凡例……９
第５図　１号竪穴住居跡……11
第６図　１号竪穴住居跡カマド……12
第７図　２号竪穴住居跡……14
第８図　２号竪穴住居跡カマド１・２……15
第９図　２号竪穴住居跡検出……16
第10図　２号竪穴住居跡床面での焼土、
　　炭化物拡散状況……16
第11図　２号竪穴住居跡遺物分布……16
第12図　２号竪穴住居跡掘り方……17
第13図　３号竪穴住居跡……19
第14図　３号竪穴住居跡掘り方……19
第15図　３号竪穴住居跡カマド……20
第16図　１～４号土坑……22
第17図　１～３号焼土遺構……23
第18図　遺物集中部１……24
第19図　遺物集中部２……25
第20図　遺物集中部３……27
第21図　遺物集中部４・５……29
第22図　遺物集中部６……30
第23図　遺物集中部７……31
第24図　縄文土器１（Ⅰ・Ⅱａ群）……34
第25図　縄文土器２（Ⅱａ・Ⅱｂ群）……35
第26図　縄文土器３（Ⅲ群）……36
第27図　縄文土器４（Ⅳ群）……37
第28図　石器１……38
第29図　石器２……39
第30図　石器３……40
第31図　石器４……41
第32図　土師器……42
第33図　千足南遺跡２号竪穴住居跡
　　より出土した炭化種実……47

表目次

第１表　周辺の遺跡……２
第２表　遺物集中部１組成表……24
第３表　遺物集中部２組成表……25
第４表　遺物集中部３組成表……26
第５表　遺物集中部４組成表……28
第６表　遺物集中部５組成表……28
第７表　遺物集中部６組成表……28
第８表　遺物集中部７組成表……31
第９表　縄文時代遺物組成表……32
第10表　石器・石材組成表……33
第11表　縄文土器観察表①……43
第12表　縄文土器観察表②……44
第13表　石器観察表……45
第14表　土師器観察表……45
第15表　千足南遺跡２号竪穴住居跡より
　　出土した炭化種実……46
第16表　年代測定結果……49
第17表　千足南遺跡出土火山灰……50
第18表　千足南遺跡火山ガラスＥＰＭＡデータ……51

写真図版

写真図版１　千足南遺跡……56
写真図版２　基本土層、調査区完堀、
１号竪穴住居跡……57
写真図版３　２号竪穴住居跡①……58
写真図版４　２号竪穴住居跡②……59
写真図版５　３号竪穴住居跡①……60
写真図版６　３号竪穴住居跡②、１・２号土坑……61
写真図版７　３・４号土坑、１・２号焼土遺構……62
写真図版８　３号焼土遺構、調査区壁完掘、
現地説明会……63
写真図版９　縄文土器①……64
写真図版10　縄文土器②……65
写真図版11　縄文土器③……66
写真図版12　縄文土器④……67
写真図版13　縄文土器⑤……68
写真図版14　石器①……69
写真図版15　石器②……70
写真図版16　石器③……71
写真図版17　石器④……72
写真図版18　土師器……73

Ⅰ　調査に至る経緯

千足南遺跡は、農用地総合整備事業下閉伊北区域の農業用道路田野畑工区内に位置しているため、当該事業の施行に伴い発掘調査を実施することとなったものである。

農用地総合整備事業下閉伊北区域は、岩手県の北東部太平洋沿岸に位置する下閉伊郡岩泉町、田野畑村及び普代村を対象として、地域特性である夏期冷涼な気候を活用し、需要動向に即した野菜等の生産性の高い農業及び畜産農家と連携して堆肥を活用した有機農業の展開を図るため、既耕地の区画整理等、並びに附帯する用排水改良等の土地基盤整備に合わせて、農畜産物流通の迅速化を目指し農業用道路を一体的に整備し、本区域の農業の活性化に資することを目的に現在事業を進めている。

農業用道路田野畑工区の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、田野畑村教育委員会による分布調査を経て、平成16年７月７日付「16緑機閉事第243号」により緑資源機構東北北海道整備局下閉伊北建設事業所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長に試掘調査についての依頼を行い、岩手県教育委員会による試掘調査が平成16年８月10日に実施された。その結果、平成16年９月９日付「教生第829号」により千足南遺跡の発掘調査が必要となったことから、岩手県教育委員会と緑資源機構東北北海道整備局が協議を行い、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに発掘調査を委託することとなったものである。

（緑資源機構東北北海道整備局下閉伊北建設事業所）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　地形と気候

（１）遺跡周辺の地形

リアス式海岸が発達する三陸海岸中・南部とは対照的に、宮古市よりも北の海岸線は比較的平滑で、固結した岩石からなる高い海食崖が連なっている。宮古以南のリアス式海岸が第三紀末～第四紀初頭ころの大沈降によって生じたのに対し、沿岸北部の段丘は第四紀における海食と隆起によって形成されたものである。この地域の河川は侵食力が弱く、海岸崖に小規模な沢や滝を形成して海に流入しているものが多い。標高100～300mには、最終間氷期よりも古い段階の海進によって形成された広い海成段丘面（高位段丘面）が分布している。最終間氷期に形成された中位段丘面は標高30～50mに分布しているものの幅がきわめて狭く、遺跡が多く分布する高位段丘面とくらべると完新世における人類生活の舞台となった痕跡は少ない。

遺跡の密集する海成段丘面よりも西側は、田野畑村内の大部分を占める山地、丘陵地が広がっている。千足南遺跡の所在する田野畑村北西部では、高位段丘面の背部に位置する小起伏山地に四方を囲まれ、山地を縫うように流れる小河川流域に人類の居住活動の痕跡がみられる。千足南遺跡は海岸との距離約11km、標高は約320～340mにある（写真図版１）。村内のほぼ中央に位置する田野畑村役場からは北西約7.5kmの距離に所在する。遺跡の西側を流れる千足沢によって形成された氾濫平野上に

位置し、遺跡内には洪水砂と考えられる堆積層が確認できる。千足沢は南流し、やがて沼袋地区で普代川と合流するが、その流れは普代村を通って太平洋に至る。
現在の土地利用は、普代川流域の沼袋地区が標高240～260m前後に位置し、集落の形成が進んでいるのに対し、千足南遺跡の所在する田代地区では標高300m台で、牧草地・畑地・山林となっている。

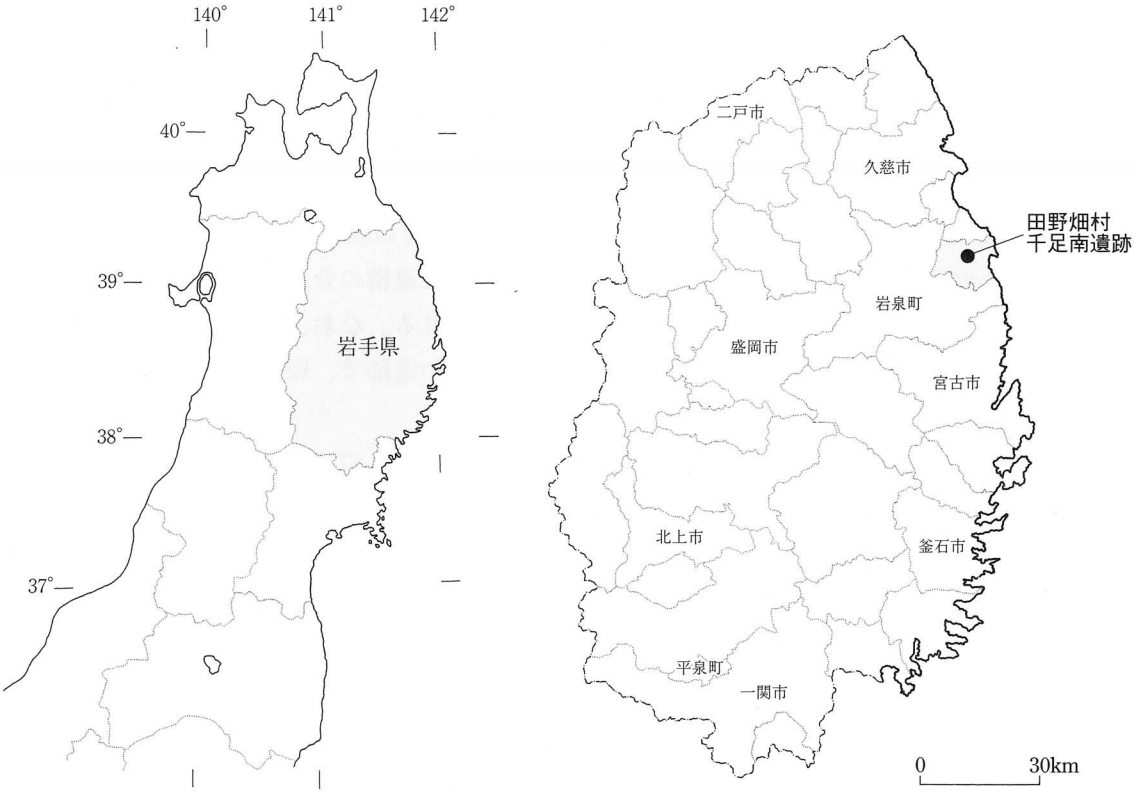
（2）気候

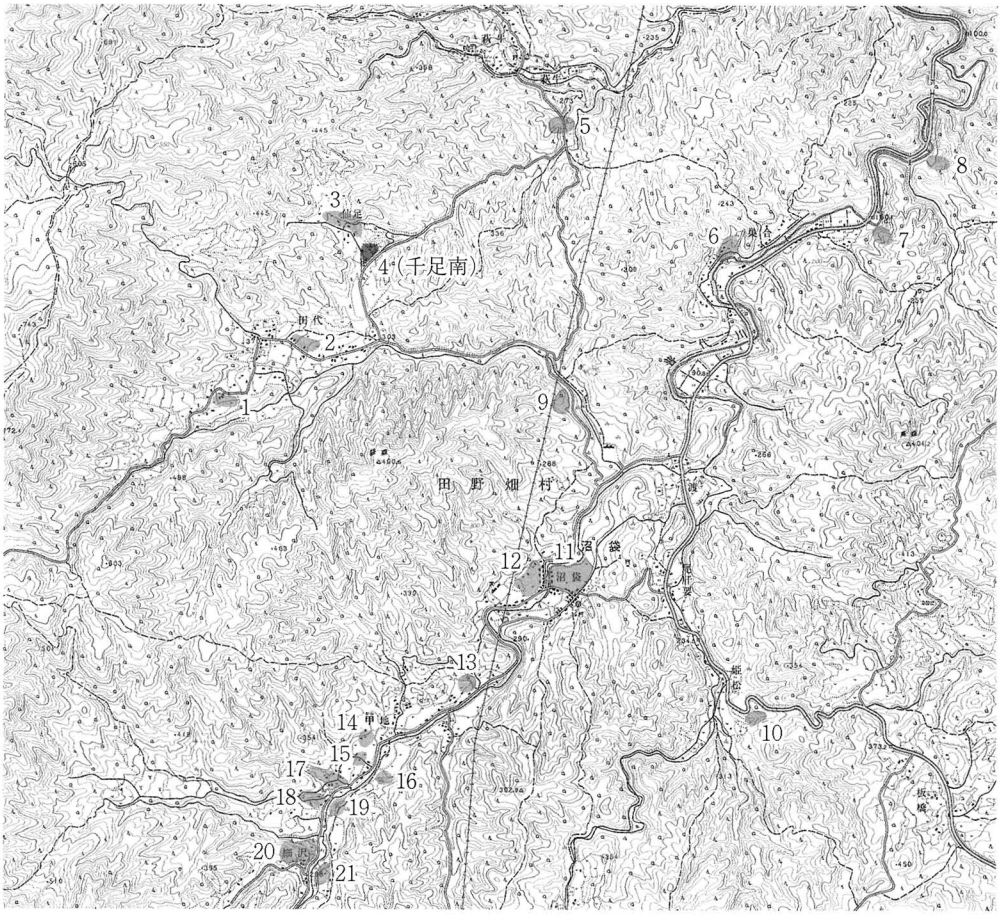
シベリア大陸は、春から夏にかけて急速に温度が上昇する。これに対して、オホーツク海では融氷に日射エネルギーが費やされるため温度上昇が抑えられ、両者の気温差によってオホーツク海上にはオホーツク海高気圧が生じる。上暖下冷の安定した成層状態のなかで下層雲が発達し、日照が遮られることで放射冷却が効率的に行われ、オホーツク海に冷気が停滞する。千島列島や北海道釧路・根室地方の夏季の天候が冷気と濃霧に特徴づけられるのと同様に、三陸海岸北部にもオホーツク海高気圧によって寒気が「ヤマセ」として時計回り方向で流入する。岩手県沿岸北部ではこのほかにも沿岸水温が低い夏季前半に日中の海風によって気温が急速に低下する「晴れヤマセ」も存在し、発生のメカニズムは異なるものの、この地方をたびたび襲ってきた冷害をもたらす複数の要因が存在している。

北緯40度に近い田野畑・普代付近では冬季は最深積雪深が100cmを越える。この地域の降雪は、冬季季節風ではなく、オホーツク海の高気圧が低気圧をブロックして湿潤な東風を送り込むことによって生じており、ヤマセの変種とも考えられる。また、『平成14年度版　岩手県統計年鑑』によれば、平成13年７～10月における小本（岩泉町）の月平均気温は17.7℃、月平均日照時間は119.8時間、月平均降水量は191㎜であった。平成10～12年度の平均値はそれぞれ18.9℃、132.8時間、230㎜である。

第１表　周辺の遺跡

番号	遺跡コード	遺跡名	種別	時代	主な遺構・遺物
1	KG10-2322	田代タテ	散布地	縄文・弥生	縄文土器（前期～晩期）、弥生土器、石器
2	KG10-1378	田代イクアエ	散布地	縄文・近世	縄文土器、石器、鉄滓
3	KG11-1091	千足	散布地	縄文・近世	縄文土器（前期・後期）、磨製石斧
4	KG11-1013	千足南	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡（古代）、焼土遺構（縄文早期・前期）、縄文土器（早期～前期・晩期）、尖頭器、石鏃、石匙、磨石、土師器
5	KG11-0125	萩牛Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（後期・晩期）
6	KG11-0297	オヤッキ沢	散布地	縄文	打製石斧
7	KG11-1317	巣合	散布地	縄文・弥生	縄文土器（中期～晩期）、弥生土器、石皿
8	KG12-0051	巣合エゾ館	城館跡	中世	主郭、空堀
9	KG11-1089	田代大平	散布地	縄文	縄文土器（後期・晩期）
10	KG31-1229	尾肝要	散布地	縄文	縄文土器（後期・晩期）
11	KG21-0127	沼袋	集落跡	縄文・弥生・中世・近世	掘立柱建物跡（縄文・近世）、近世墓壙、捨て場（縄文後期）、縄文土器（後期・晩期）、弥生土器、中世・近世陶器（唐津、瀬戸・美濃産、在地系など）、永楽通宝、寛永通宝、火打ち金
12	KG21-0124	坂の下	集落跡	縄文・弥生	縄文土器（中期～晩期）、弥生土器、石棒
13	KG21-0099	子木地	散布地	縄文	縄文土器、剥片石器、磨石
14	KG21-1022	甲地大森	散布地	縄文	縄文土器（後期・晩期）
15	KG21-1033	蝦夷森	散布地・産業遺跡	縄文・近世	縄文土器、陶器、磁器、鉄滓
16	KG21-1036	子木屋敷	散布地	近世	陶器、磁器、鉄滓
17	KG21-1042	蝦夷森甲地	散布地・集落跡	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器
18	KG20-1389	子木地の台	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、縄文土器（後期・晩期）、土師器、鉄製馬具
19	KG21-1081	子木屋敷南	散布地	縄文	縄文土器
20	KG20-2329	蝦夷森チャシ	散布地・城館跡	縄文・中世	堀切、縄文土器
21	KG21-2020	細沢向	散布地	縄文	縄文土器





1　田代タテ
2　田代イクアエ
3　千足
4　千足南
5　萩牛Ⅱ
6　オヤッキ沢
7　巣合
8　巣合エゾ館
9　田代大平
10　尾肝要
11　沼袋
12　坂の下
13　子木地
14　甲地大森
15　蝦夷森
16　子木屋敷
17　蝦夷森甲地
18　子木地の台
19　子木屋敷南
20　蝦夷森チャシ
21　細沢向

S＝1：50,000

第１図　千足南遺跡の位置と周辺の遺跡

2　周辺の遺跡

田野畑村内ではこれまで100ヵ所以上の遺跡が確認されていた。しかし、昭和38年の分布調査以来、本格的かつ総合的な調査はほとんどおこなわれてこなかったことから、田野畑村教育委員会では平成12年度から4ヵ年計画で村内の埋蔵文化財一般調査をすすめることとなった。平成12年度終了時点で131ヵ所の遺跡が確認されている。村内全域でみると遺跡の多くは南西部の高位段丘面上で確認されており、北部や西部は希薄である。このような状況は本来的な遺構の分布というより、これまでの分布調査の有無や土地利用の結果による部分が大きいと考えられる。なお、千足南遺跡は平成16年度に行われた岩手県教育委員会による試掘調査で発見された新規の遺跡で、周知の千足遺跡の南側に隣接することから千足南の登録名となった。

遺跡のなかでは縄文時代の遺跡が最も多く、時期が特定できるものでは早期11ヵ所、前期20ヵ所、中期23ヵ所、後期38ヵ所、晩期34ヵ所と後・晩期に増加傾向を示し、地域も海岸段丘上からさまざまな地形へ分布が拡大する傾向がみられる。主な遺跡を概観すると、村の南西部の浜岩泉地区に遮光器土偶のほぼ完形品が出土した浜岩泉Ⅱ遺跡（田野畑村1985）、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが1996年に調査し、縄文時代中期の集落であったことが確認された浜岩泉Ⅰ遺跡などがある。また、その隣接地の島越地区には館石野Ⅰ遺跡がある。早稲田大学文学部考古学研究室によって1987年から1993年にかけて8次にわたる調査が行われた縄文時代中期～後期にかけての遺跡で、列石を伴う大規模な遺構が確認されている。なお、館石野Ⅰ遺跡は岩手県指定史跡となっており、現在も田野畑村教育委員会が継続調査を行っており、平成16年度の調査では遺跡の範囲確認調査を実施し、遺跡の範囲が東側、すなわち太平洋側への延びることが確認された。村央部の田野畑地区では平成16年4月から7月まで田野畑村役場の北側に隣接する平波沢遺跡の発掘調査が行われ、近世墓、縄文時代後・晩期の竪穴住居跡が多数確認された。また、下層からは縄文時代前期の土器が発見されている。島越地区に位置する切牛Ⅱ遺跡では縄文時代後期初頭の竪穴住居跡3棟のほか、縄文時代早期・前期・後期の土器、土師器の出土報告がある。また同じく島越地区の真木沢Ⅰ遺跡では縄文時代早期・前期の竪穴のほか、古代の竪穴住居跡も確認されている。

千足南遺跡のある田野畑村北西部は旧沼袋村内に位置する（第1図）。遺跡は普代川流域を中心に点在しているが、旧沼袋村は近世～近代に鉄山経営で栄えた場所として知られ、製鉄関連遺跡の可能性を示す鉄滓が蝦夷森遺跡や子木屋敷遺跡で採取されている。北西部での発掘調査は子木地の台遺跡（大澤1994）と沼袋遺跡（岩手埋文2005）の2例あるが、子木地の台遺跡では古代の竪穴住居跡や土師器甕・鉄製馬具が見つかっている。沼袋遺跡からは縄文時代後期の掘立柱建物跡・捨て場・埋設土器や、近世の掘立柱建物跡・墓壙・墓碑などが見つかっている。なお、沼袋遺跡では16世紀後半の唐津産陶器、永楽通宝が掘立柱建物跡から出土しており、村内では不明瞭な中世の可能性を示す資料として注目される。その他、千足南に近在する縄文遺跡としては沼袋遺跡対岸に位置する坂の下遺跡・田代タテ遺跡がある。坂の下遺跡では後期後葉の瘤付土器や優美な石棒が採取され、田代タテ遺跡では完形に近い晩期の土器が採集されている。

今回の千足南遺跡発掘調査は北西部で3件目となり、田代地区では初めてである。したがって、周辺遺跡との時期差や性格の比較資料として、すなわち村内北西部の一様相を知る手がかりになるものとして期待された。

3　基　本　土　層

基本土層は調査区ほぼ中央のⅣＥ１ｅグリッド調査区壁で観察・記載した（第２図）。工事用盛土が少なからず残っていたため、これをⅠ層とし、盛土以前の旧表土をⅡ層とした。Ⅱ層直下に微量ではあるが灰白色粒子が見られた。火山灰の可能性があったため柴正敏氏（弘前大学）に分析を依頼し（第Ⅴ章参照）たが、火山ガラスの形態や褐色ガラスを含まないことから、基盤花崗岩の風化物の可能性が高いとの報告を得た。Ⅲ層は層厚の厚いところではⅢａ～Ⅲｄ層に分離している。古代の検出面としたⅢ層上部では竪穴住居跡を確認している。また、縄文時代晩期の土器はⅢ層下部をピークとしてⅡ層～Ⅲ層下部で出土している。Ⅳ層は洪水砂層で、Ⅴ層（十和田中掫火山灰）の残存する場所付近に散在しており、Ⅴ層堆積後に千足沢の氾濫がおこったと推察できる。Ⅴ層は黄褐色火山灰層である。近隣の沼袋遺跡でも確認され、十和田中掫火山灰（To-cu）と同定された。本遺跡での層厚は沼袋遺跡よりやや薄く５～15cm程度でモザイク状に散在し、面的な広がりのある範囲はわずかである。村内での十和田中掫火山灰の確認例は沼袋遺跡のほか和野１遺跡、和野ソマナイ遺跡がある。Ⅵ層は縄文早期～前期の遺物包含層で平坦面では層厚が薄く、緩斜面ではやや厚い。焼土遺構を３基検出している。Ⅶ層は基盤花崗岩層の風化による形成層で、いわゆるマサ土である。Ⅶ層の堆積を確認するべくＶＤ２ａグリッドにトレンチを設定して掘り下げたが、１ｍ近く掘削しても基盤花崗岩層に達しなかったのでⅦ層の層厚を確認していない。Ⅶ層は当該地域で一般的な花崗岩風化土壌による堆積層であり、周辺の崖などでは５ｍ以上堆積が認められる。

基本土層

Ⅰ　層　10YR5/3　にぶい黄褐色土層　（盛土）層厚20～30cm　粘性なし　しまりなし

Ⅱ　層　10YR2/3　黒褐色土層　（表土）　層厚20～40cm　粘性なし　しまりなし

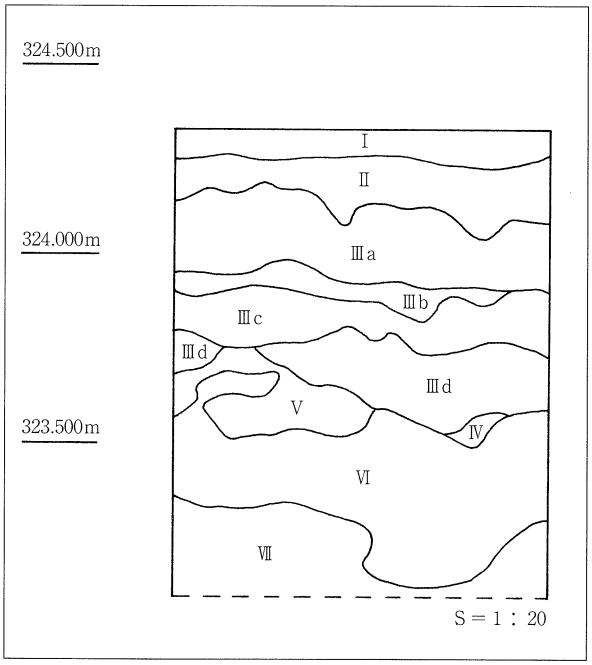
Ⅲ　層　10YR3/2　黒褐色土層　（上部：古代検出面、下部：縄文晩期土器出土）　層厚20～40cm　粘性なし　しまりやや疎　Ⅲ層は砂粒の多寡によってａ～ｄに細分したが、堆積土に極端な差はない

Ⅳ　層　10YR5/4　にぶい黄褐色砂層（洪水砂）　層厚５～10cm　粘性なし　しまりやや密　ブロック状に見られる。

Ⅴ　層　10YR5/6　黄褐色火山灰層（十和田中掫火山灰）層厚10～15cm　しまりなし　粘性なし　しまり密　Ⅴ層の上部と下部は灰白色

Ⅵ　層　10YR4/4　褐色土層（縄文時代早期～前期前半遺物包含層）層厚20～50cm　粘性なし　しまり密

Ⅶ　層　10YR3/4～10YR4/2　にぶい黄褐色～灰黄褐色土層（本遺跡の地山）層厚不明　粘性なし　しまり密　基盤の花崗岩帯の風化層（いわゆるマサ土）



第２図　基本土層（ⅣE１ｅグリット）

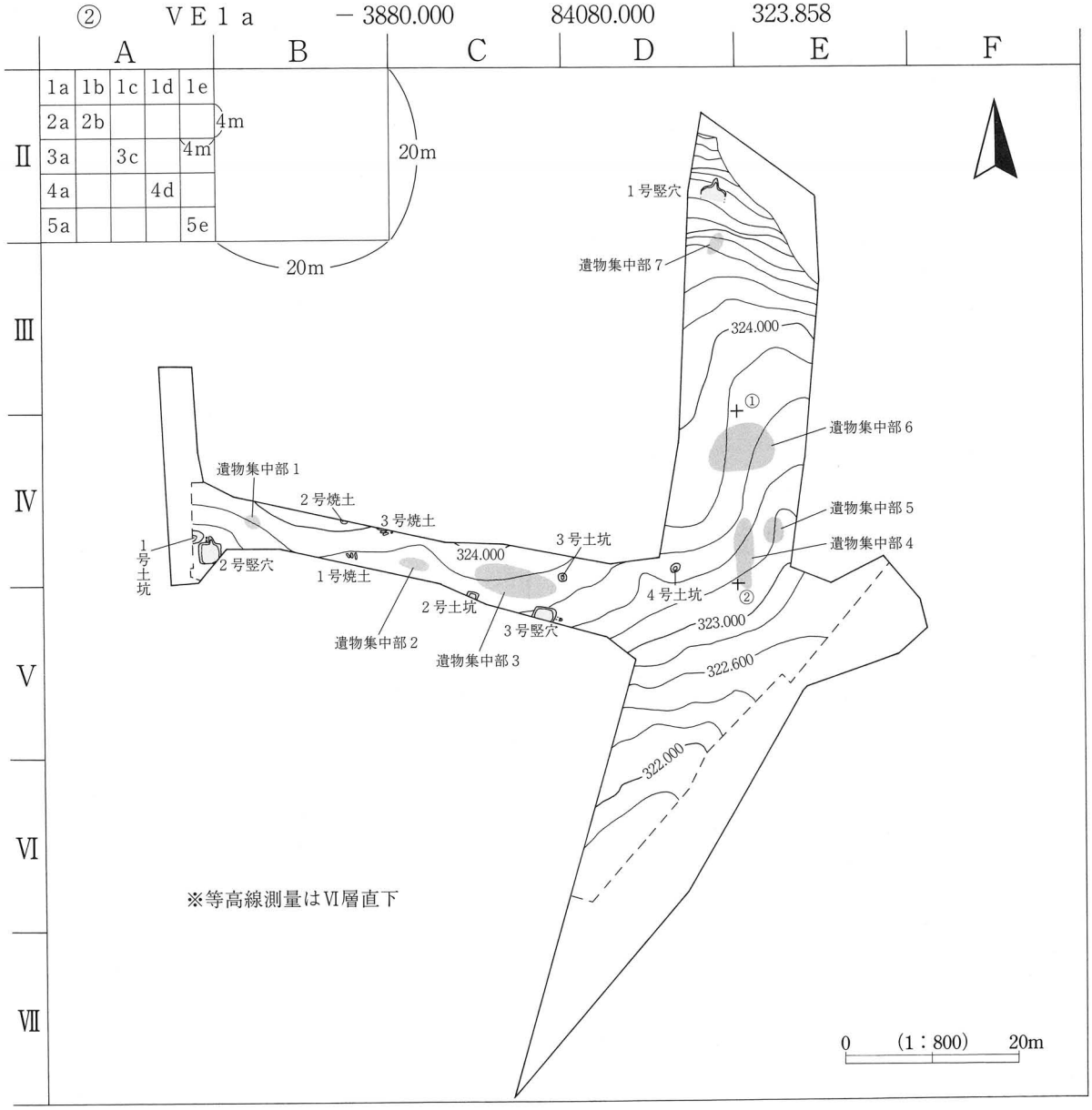
Ⅲ 調査の方法

1 発掘調査

(1) グリッドの設定

発掘区全体を4mグリッドによって区分し（第3図）、グリッドの区分および方位は、平面直角国家座標世界測地系による座標を採用した。千足南遺跡のグリッド設定は緑資源機構東北北海道整備局下閉伊北事業所が実施した農用地整備事業に係わる「農用道測量設計業務」の成果を援用し、X・Y座標値と標高を割り出した。これを光波測量機器によって調査員がグリッド計算、および基準点の設置を行った。調査で主な基準とした座標値を以下2ヵ所提示する。

点名	グリッド	座標X	座標Y	標高（m）
①	ⅣE1a	－3860.000	84080.000	324.902
②	VE1a	－3880.000	84080.000	323.858



第3図 調査区設定図及び遺構配置図

（２）調査経過

調査は農用地総合整備事業に伴うものである。平成17年６月１日に調査機材を搬入し、下草の除去および切り株周辺の清掃を行った。試掘トレンチは４ヵ所設定し、地層を確認の上、写真撮影を行った。

調査区西端と南側の舗装道路面は調査を行わなかった。西端は１号竪穴住居跡に隣接し、水道管埋設工事によって削平されていた。舗装道路部分の断面観察で、地山（Ⅶ層）から80cm以上の深さまで削平の及ぶことを確認した。南側の舗装道路面は沢の流れていた場所に盛土していることが、等高線の検討から明らかであった。また、隣接する調査区内では遺物が数点出土したにとどまり、遺構は確認できなかったため、遺構・遺物の存在はきわめて低いと考えられた。この未調査範囲は、岩手県教育委員会生涯学習文化課による終了確認で、調査の必要性のないことを判断された。

調査区は工事用の仮置きされた盛土（Ⅰ層）と表土（Ⅱ層）を重機によって掘削し、Ⅲ層を古代の遺構検出面とした。古代検出面では竪穴住居跡３棟、土坑２基を検出した。Ⅲ層より下位の調査は手作業で行い、Ⅴ層（To-cu）下位のⅥ層を主体として縄文時代早期～前期の遺構・遺物を発見した。

野外調査はⅥ層の完掘をもって終了し、平成17年７月29日に現場撤収した。

（３）遺構調査と遺物の取り上げ

遺構は検出後に平面形と他の遺構との関係を検討してから埋土掘削し、平面・断面・完掘状況の写真撮影・記録を行った。写真撮影には35mm判モノクロネガフィルム・カラーリバーサルフィルム、６×７cm判モノクロ・カラーネガフィルムを使用した。

遺物は調査区等高線作成作業と併行して光波測量機により各遺物のＸ・Ｙ・Ｚ座標値を採取した。

２　室　内　整　理

平成17年11月１日より室内整理作業を開始した。遺物は洗浄・注記・接合・選別・登録後に計測・拓本採取を行った。縄文土器はⅠ～Ⅳ群の時期ごとに類別した。石器群については二次加工のあるトゥールを主体に実測図を掲載している。遺物は縄文土器・石器・土師器など種別ごとに掲載番号を付した。

整理作業は図版・写真図版の作成を行い、図面・写真ファイル、遺物など各資料を収納し平成18年３月31日に終了した。回収した遺物・礫は小コンテナ（30×40×10cm）５箱、中コンテナ（30×40×20cm）３箱に分けられる。

３　掲載図版・観察表解説

（１）遺構

縮尺は概ね１/40を主体としているが、遺構サイズに合わせて適時変更している。カマドと焼土遺構は１/20を採用した。スケールは各図版に示してあり、平面図と断面図は同スケールである。なお、遺構図版中にみられる遺物図は縮尺を統一していない。詳細は遺物図版・遺物観察表等を参照されたい。

（2）遺物

遺物図版は縄文土器、石器、土師器の順に掲載し、整理作業の都合上、通し番号を付けず、下記の遺物掲載番号を付した。

縄文土器　№1～69　　石　器　№101～132　　土師器　№201～209

a）縄文土器の分類

Ⅰ　群　縄文早期前葉の土器　　押型文によって文様を描出するもの（日計式相当）。

Ⅱa群　縄文早期後葉の土器　　土器の内外面に縄文を施すもの。繊維を含まないものと繊維を微量ながら含むものがある（赤御堂式相当）。

Ⅱb群　縄文早期末葉の土器　　土器の内外面に縄文を施し、繊維を多く含むもの。Ⅱa類に比して器厚が厚い（早稲田5類相当）。

Ⅲ　群　縄文前期前半の土器　　繊維を多く含む尖底土器（早稲田6類、大木1式相当）。口縁部に結節回転文が施文される。

Ⅳ　群　縄文晩期の土器　　晩期の土器を一括する。

b）石器の分類

尖頭器　　完形長（破損品は推定完形長）が5㎝以上の尖頭状石器。

石　鏃　　完形長（破損品は推定完形長）が5㎝未満の尖頭状石器で鏃として機能したと考えられるもの。

石　錐　　器体端部に錐部を有するもの。

石　匙　　摘み部を持つスクレイパー。

掻　器　　素材端部あるいは側縁部に連続的な調整によって刃部を作出したもののうち直角に近い刃部角を有するもの。大半は素材端部に刃部をもつ。

削　器　　素材端部あるいは側縁部に連続的な調整によって刃部を作出したもののうち鋭角な刃部角を有するもの。

楔形石器　　両極剥離痕のある石器のうち剥離面がネガ面で構成されているもの。石鏃製作に関わる素材供給を行った石核の機能を有すると考えられる。ポジ面を含むものはいわゆる両極剥片と捉え、楔形石器の範疇には入れない。

剥　片　　長さと幅のどちらかが1.5㎝以上の二次加工の見られない剥片石器。

砕　片　　長さと幅のどちらも1.5㎝未満の二次加工の見られない剥片石器。

石　核　　最終剥離面がネガ面で剥片製作を意図した石器。

磨製石斧　　磨面を有する斧形石器。

特殊磨石　　磨面を有する横断面三角形の石器。

磨石A　　磨面＋凹み痕＋敲打痕を有する石器。

磨石B　　磨面＋敲打痕を有する石器。

磨石C　　磨面＋凹み痕を有する石器。

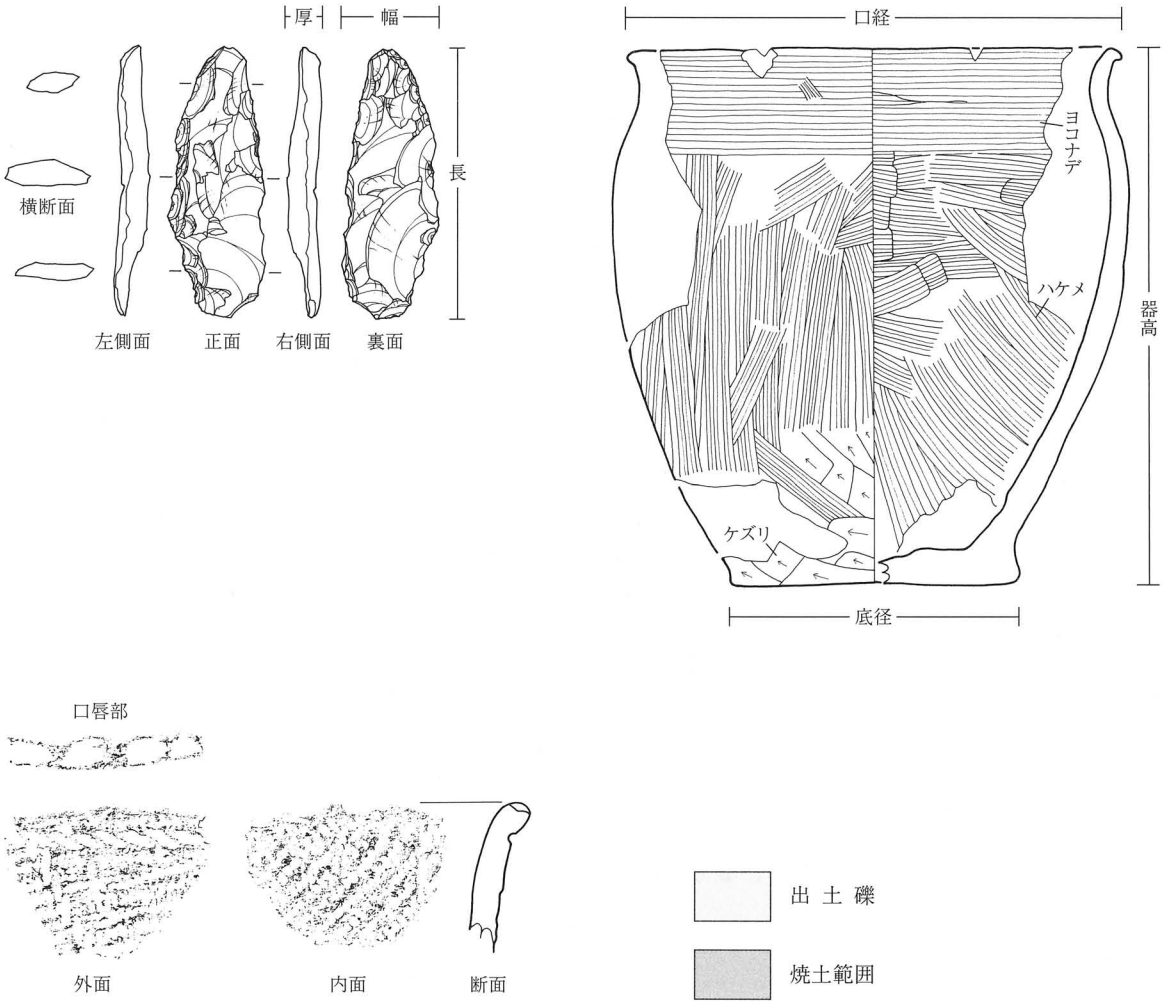
磨石D　　磨面を有する石器。

c）石材略号

頁岩：Sh、黒色頁岩：BSh、メノウ：Ag、安山岩：An、凝灰岩：Tuff、閃緑岩：Dio、
砂岩：S.S、礫岩：Cong、チャート：Ch、ホルンフェルス：Ho

d）その他観察表記載事項について

・縄文土器と土師器は完形近くまで復元された資料がない。なお、実測図上で復元した個体については口径、器高、容量を推定値として備考欄に記載した。
・石鏃と尖頭器は先端角をクリノメーターで計測している。
・石器石材は母岩分類を行った。略号名に母岩№を付して記載している。



第4図　凡例

Ⅳ 遺構・遺物

1 概　　要

調査遺構は、竪穴住居跡３棟、土坑４基、焼土遺構３基である。所属時期は縄文時代早期～前期と奈良・平安時代に大別される。

縄文時代については、Ⅵ層検出時に土坑２基と焼土遺構３基を確認した。焼土遺構は３基とも赤化が進行していない。また、土器・石器が密集して出土した範囲を遺物集中部とした。これは２ｍの範囲内に５点以上の遺物がある場合に設定した操作概念上の遺構であり、掘り込みをもつ通常認識されている遺構概念とは異なる。これらは人類の活動による廃棄・遺棄行為か、あるいは自然の営力による堆積・集散で形成されたと見られる。７ヵ所確認した。遺物集中部は比較的平坦な場所や埋没沢と見られる窪地状の範囲に形成されている。

古代では奈良・平安期の竪穴住居跡３棟と土坑１基を検出した。微地形で見ると１号竪穴住居跡は標高325.600ｍ付近、２・３号竪穴住居跡は標高323.600ｍ付近の緩斜面上に位置している。３棟とも１辺３ｍ未満、床面積９㎡未満の小規模な住居跡である。

遺物は小コンテナ（30×40×10㎝）５箱、礫は中コンテナ（30×40×20㎝）３箱分出土した。内訳は縄文土器・土師器が小コンテナ４箱（344点）、石器が小コンテナ１箱（77点）、礫が中コンテナ３箱分（89点）である。その他、竪穴住居跡から炭化種実、骨片、水晶製砕片が出土している。２・３号竪穴住居跡出土炭化物は放射性炭素年代測定を実施し（Ⅴ章２節参照）、２号竪穴住居跡のカマド内土壌から検出した炭化種実については種実同定を行っている（Ⅴ章１節参照）。

縄文土器は早期後半～前期前半・晩期の資料で構成される。早期後半～前期前半の土器はⅥ層にピークを持つ。調査区東側ではⅡａ群土器（早期後半）の出土数が多く、西側ではⅢ群土器（前期前半）がまとまっている。Ⅳ群土器（晩期）は表土直下またはⅢ層内から出土しており、粗製土器が主体である。

石器は大半がⅥ層で出土し、早期～前期に位置づけられる。尖頭器４点、石鏃５点、石匙２点、掻器２点、削器２点、楔形石器１点、石核２点、剥片38点、砕片９点、特殊磨石５点、磨石７点が出土している。剥片石器は頁岩製が主体で、礫石器には砂岩、安山岩、閃緑岩が利用されている。遺物集中部３は石器製作跡で、黒色頁岩１を母岩とする剥片、砕片が出土している。

土師器は竪穴住居跡から出土し、２号竪穴住居跡では甕５個体、３号竪穴住居跡では甕４個体が出土している。

2 遺　　構

（1）竪穴住居跡

１号竪穴住居跡

遺構（第５・６図、写真図版２）

[位置・検出状況]緩斜面上の調査区北側のⅡＤ区に位置する。調査区より北側は山地が連なり、部分的に花崗岩風下層が露出し、雨天時には調査区内に少なからず流れ込んできた。検出はⅡ層（旧表土）を重機で掘削後にⅢ層上面で行っており、最初に北側のカマド煙道部範囲、それに続いて方形プラン

の住居跡範囲を確認した。検出段階ですでにカマド燃焼部の焼土が露出・散在していた。遺存状態が悪く、住居壁は南側を確認できなかった。住居にはセクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ０～３㎝程度で床面に達した。住居範囲はⅡ層からのカクランが著しい。

[埋土]10YR2/2黒褐色土の１層のみで堆積環境を理解できるほど残存していなかった。

[平面形式・内部施設]１辺約３ｍの正方形プランと思われ、北壁にカマドを持つ。柱穴は検出できなかった。

[カマド]北壁中央に１基設置されている。カマド構築材はほとんど消失しており、西側袖部がわずかに残存していた。構成材に白色粘土は含まれず、褐色～黒褐色土で占められる。煙道部の構築方法は上部の削平により不明である。煙道部は緩やかに傾斜しながら煙出し部へと続く。煙出し部の底部埋土は暗褐色土で、微量の焼土を包含する。燃焼部は煙道部ラインから若干西側に円形の焼土範囲を確認している。第２層には炭化物が多く見られた。

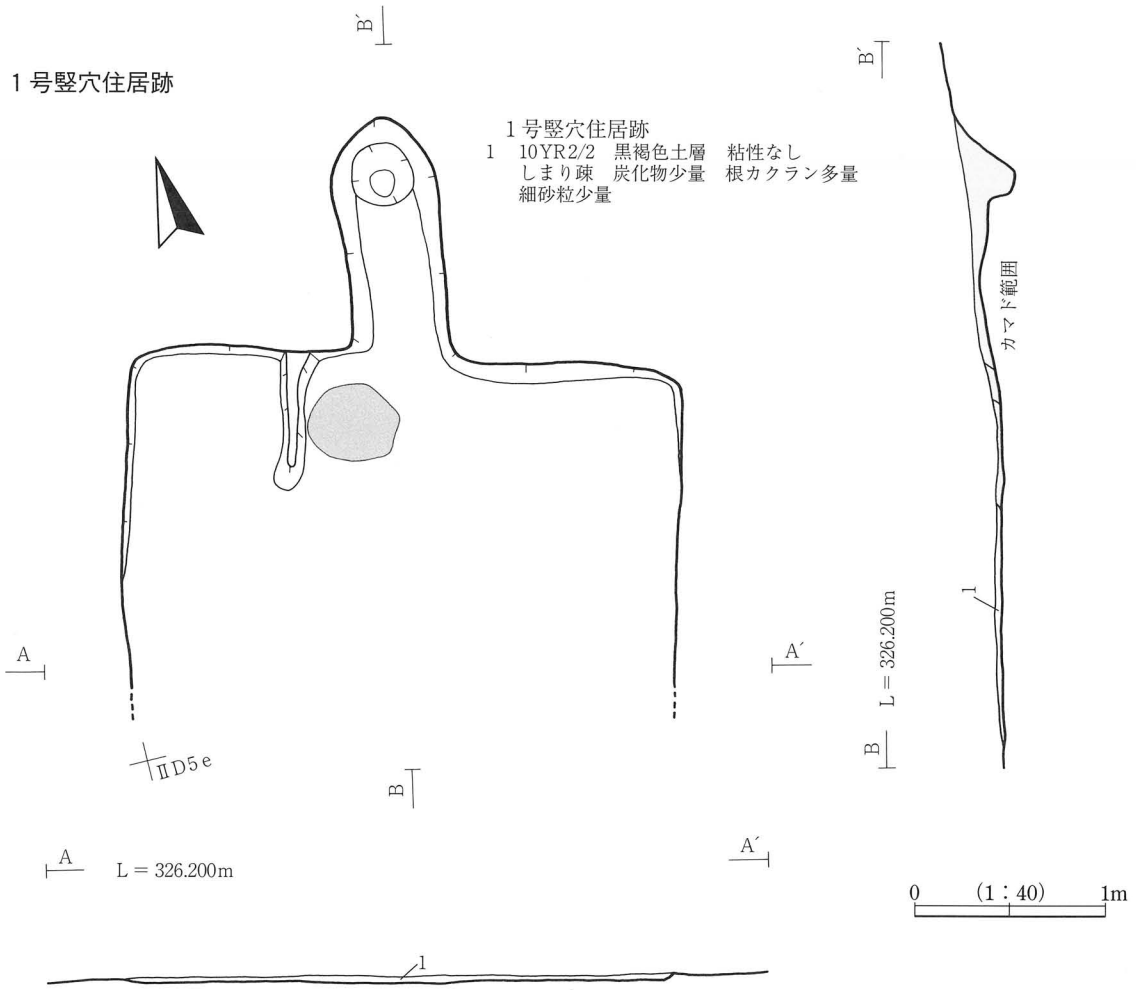
[重複関係]なし。

[掘り方]表土からのカクランにより削平された部分が多く不明確である。

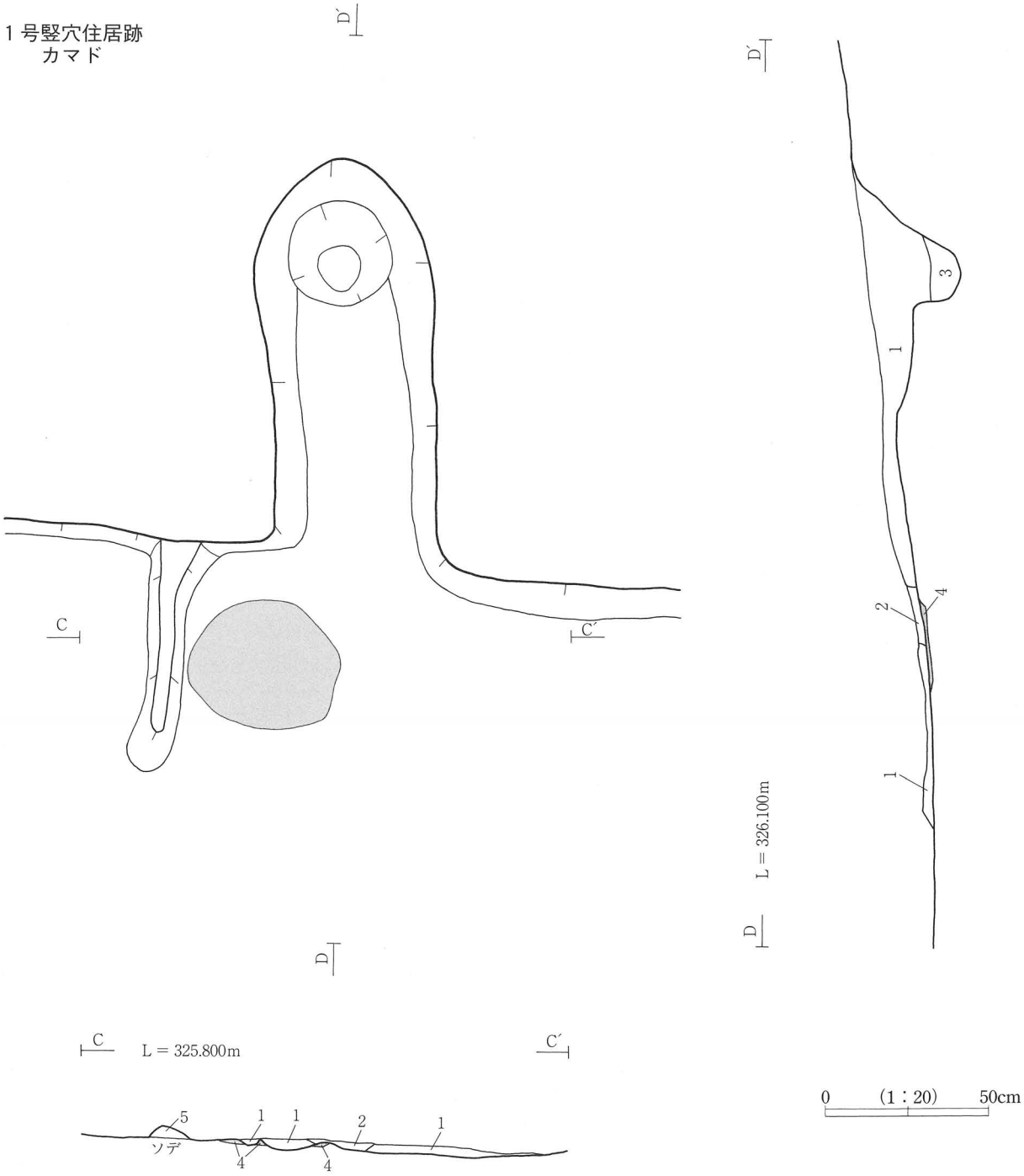
[計測値]住居規模2.92×(1.8)ｍ、床面積：5.26㎡以上、床面標高：325.580ｍ、カマド方位：N-13度-E、カマド煙道部長：75㎝、カマド煙出し部径：45×50㎝

遺物　出土していない。

時期　奈良～平安時代と考えられる。



第５図　１号竪穴住居跡



1号竪穴住居跡カマド
1　10YR2/3　黒褐色土層　粘性弱　しまりやや疎　細砂粒少量
2　10YR2/2　黒褐色土層　粘性弱　しまりやや疎　炭化物多量
3　10YR3/4　暗褐色土層　粘性なし　しまり疎　焼土1％包含
4　5YR5/6　明赤褐色土層（焼土）粘性なし　しまりやや疎　マサ土2％包含
5　10YR4/4　褐色土層（袖部）粘性弱　しまり疎

第6図　1号竪穴住居跡カマド

２号竪穴住居跡

遺構（第７～12図、写真図版３・４）

[位置・検出状況]緩斜面上の調査区西側のⅣＡ区に位置する。検出はⅡ層（旧表土）を重機で掘削後にⅢ層上部で行っており、黒色土の方形プランを確認した。検出段階で中央部の焼土範囲（焼土１）、カマド１の煙道部が確認でき、北側にはカマド構築材と考えられる白色粒子が散在していた（第９図）。また、北東部でわずかに見られた灰白色粒は火山灰の可能性があるもの（試料№１）と考え、火山灰同定分析を行った（第Ⅴ章３節参照）が、黒雲母の粘土化が観察され、古代の火山灰（To-a、B-Tm等）の可能性が低いとの結果を得た。これら灰白色粒についてもカマド構築材の一部と考えられる。検査棒による埋土の深さの検討では20～25㎝の堆積が認められ、良好な遺存状態であることが推察された。南東部はわずかに調査区外へ続くため未検出である。方形プラン範囲はセクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ20㎝程度で床面に達した。

[埋土]10YR1.7/1黒色土（第２層）と10YR2/2黒褐色土（第３層）に二分される。遺物はほとんど３層内から出土している。第２層は北側がやや厚いことから、緩い傾斜に沿うように北側からの自然埋没によって形成されたと考えられる。

[平面形式・内部施設]１辺約2.5ｍの方形プランで北壁にカマドを２基持つ。中央部に焼土範囲（焼土２）、南東部に柱穴を確認した。

[焼土１]検出時に中央部から不整形の焼土範囲を確認した（第９図）。ブロック状に散在しており、原位置を保っていない可能性がある。

[焼土２]床面中央に楕円形の範囲を確認した。範囲内とその周辺には小礫が散在しており、囲炉裏としての機能があったと考えられる。焼土の厚さは12㎝程度であった。

[カマド１]北壁中央に設置されている。カマド構築材はほとんど消失しており、袖部がわずかに残存する（第８図）。芯材に利用されたと考えられる礫が住居内に散在していることから廃絶後に崩落したものと考えられる。埋土は炭化物（第１・10層など）が多い。焼土範囲は明確であった。煙道部は燃焼部からほぼ水平に続き、煙出し部に至る。上部の埋土が削平されているため煙道部の構築方法は不明である。

[カマド２]北壁やや西側に構築されている。刳抜式で煙出し部は１号土坑に削平されている。煙道部は燃焼部から住居壁まで緩やかに上り、壁付近から煙出し部に向かって緩やかに下る（第８図）。埋土の残存は悪い。検出時に確認された北西部のカマド構築材は、カマドの配置からカマド２帰属の可能性が高い。

[柱穴１]柱痕跡をもち、底面と側面に礫が充填されている。

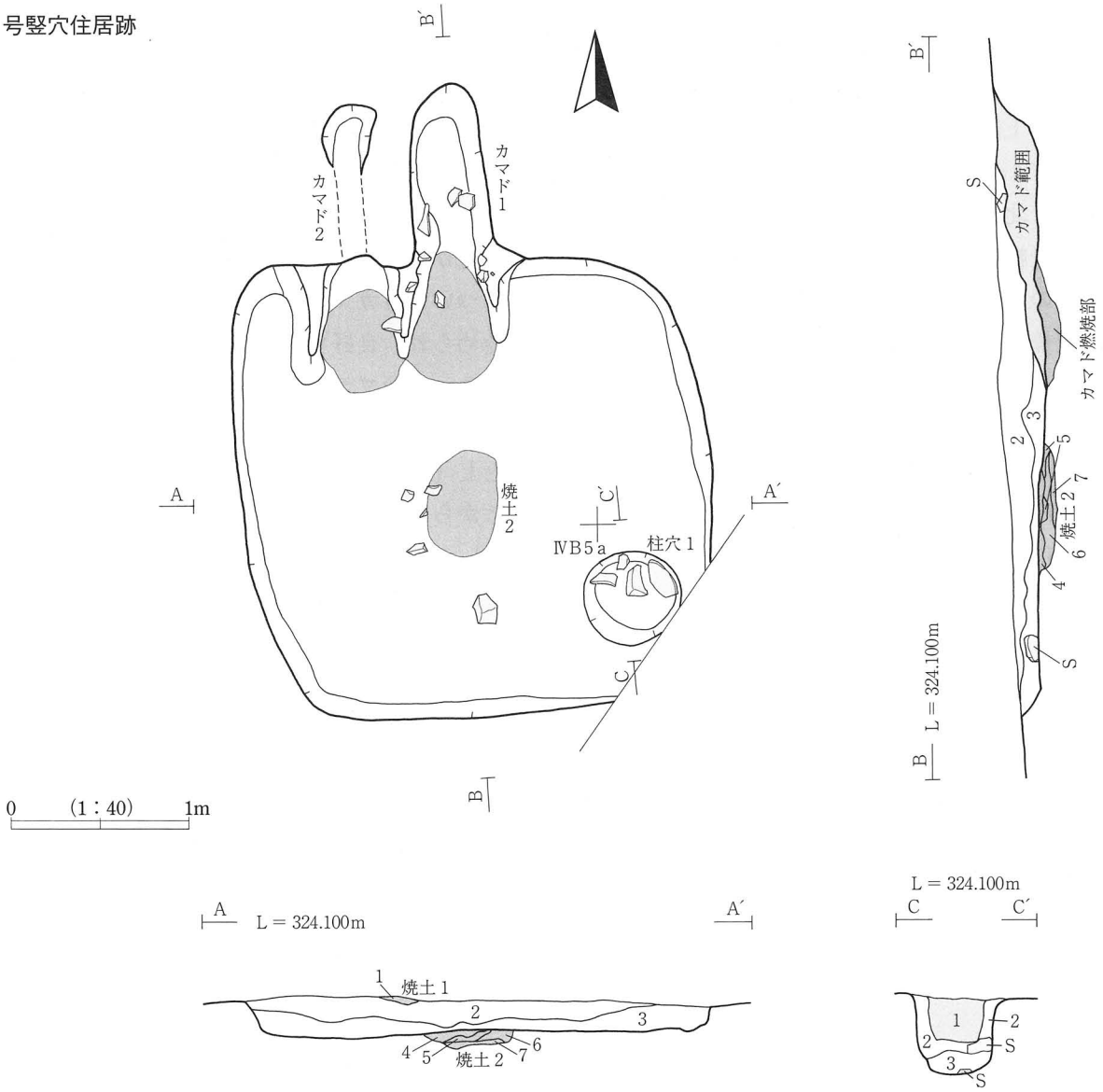
[炭化物・焼土範囲]カマド燃焼部から南方向に炭化物が拡散しており、住居廃棄後にカマド崩落を要因とする炭化物の拡散と考えられる。カマド燃焼部と焼土２のある中央部付近に炭化物量が多く、東西壁付近には炭化物が少量であった（第10図）。遺構内の炭化物出土量を考えると、住居廃絶後の火所からの炭化物拡散の可能性ばかりでなく、住居焼失による形成も考えられる。

[遺物分布]人工物は土師器甕の破片のみである（第11図）。住居内で礫がまとまって出土したが、礫石器は見られない。カマド１内と住居内の北東部から南西方向に遺物が散乱したようである。大型礫周辺から出土する傾向にある。

[掘り方]硬質面範囲は住居中央に広がり、硬質面を掘削すると多数の突起状の掘り方が確認できた。掘り込みは壁近くでは浅い傾向にあるが、中央部や南側はやや深い（第12図）。

[重複関係]カマド２の煙出し部が北西の１号土坑に切られている。

2号竪穴住居跡



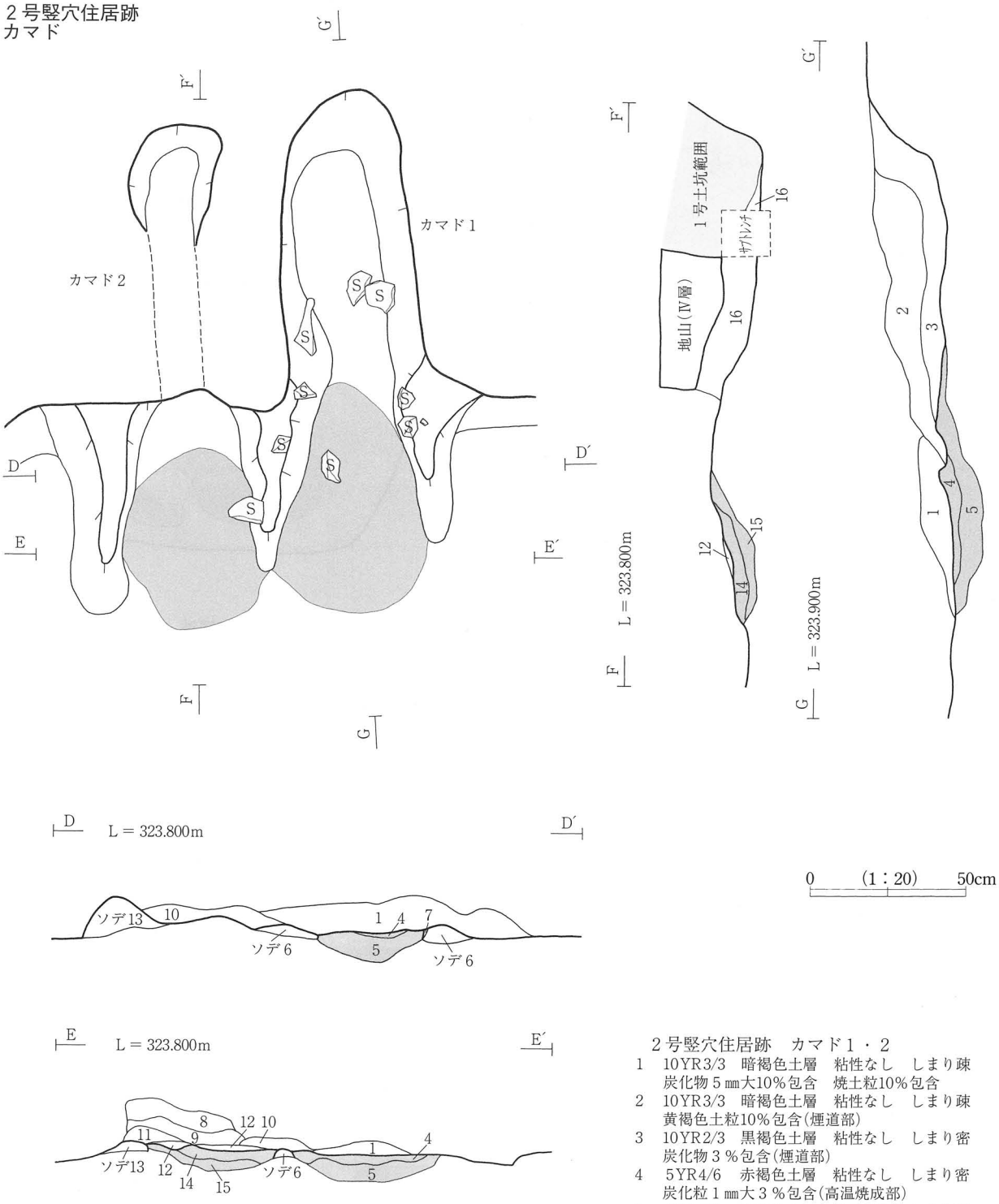
2号竪穴住居跡焼土1
1　5YR5/6　明赤褐色土層　粘性なし　しまり疎

2号竪穴住居跡
2　10YR1.7/1　黒色土層　粘性なし　しまり疎
3　10YR2/2　黒褐色土層　粘性なし　しまりやや疎
　炭化物3％包含

2号竪穴住居跡焼土2
4　10YR2/3　黒褐色土層　粘性なし　しまり弱
　炭化物1㎝大2％包含　焼土粒2％包含
5　5YR4/6　赤褐色土層　粘性なし　しまり密
　炭化粒1㎜大1％包含(高温焼成部)
6　10YR3/4　暗褐色土層　粘性なし　しまりやや密
　炭化粒3㎜大2％包含(高～低温焼成部)
7　5YR4/6　赤褐色土層　粘性なし　しまり密
　炭化粒3㎜大2％包含(高温焼成部)

2号竪穴住居跡柱穴1
1　10YR2/2　黒褐色土層(柱痕跡)
　粘性弱　しまり疎　炭化物3％包含
2　10YR2/3　黒褐色土層　粘性弱
　しまり疎　小礫包含
3　10YR4/3　にぶい黄褐色土層
　粘性なし　しまり疎

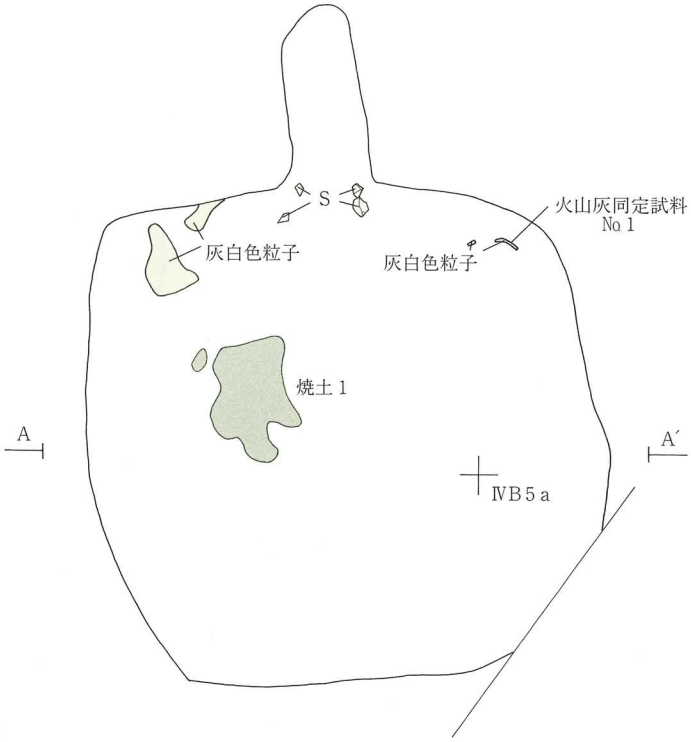
第7図　2号竪穴住居跡



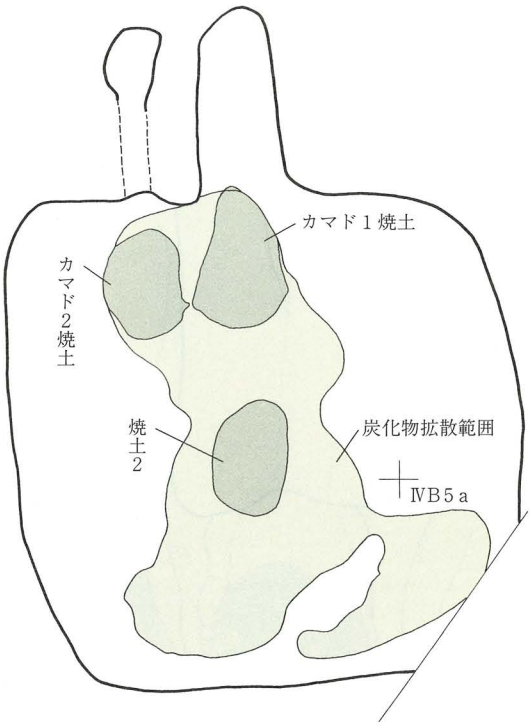
2号竪穴住居跡　カマド1・2

1　10YR3/3　暗褐色土層　粘性なし　しまり疎
　炭化物5㎜大10%包含　焼土粒10%包含
2　10YR3/3　暗褐色土層　粘性なし　しまり疎
　黄褐色土粒10%包含(煙道部)
3　10YR2/3　黒褐色土層　粘性なし　しまり密
　炭化物3%包含(煙道部)
4　5YR4/6　赤褐色土層　粘性なし　しまり密
　炭化粒1㎜大3%包含(高温焼成部)
5　5YR4/6　赤褐色土層　粘性なし　しまり密
6　10YR3/4　暗褐色土層　粘性弱　しまりやや密
　黄褐色土粒20%包含(ソデ)
7　5YR4/6　赤褐色土層　粘性弱　しまりやや密
　黄褐色土粒20%包含(ソデ被熱部)
8　10YR4/3　にぶい黄褐色土層　粘性なし　しまりやや密(カマド崩落土)
9　10YR2/3　黒褐色土層　粘性弱　しまり疎
10　10YR3/3　暗褐色土層　粘性弱　しまり密　炭化物30%包含
11　10YR3/3　暗褐色土層　粘性弱　しまり疎　焼土2%包含
12　10YR2/2　黒褐色土層　粘性なし　しまりやや密　炭化物1㎝大3%包含
13　10YR4/3　にぶい黄褐色土層　粘性なし　しまり疎　(ソデ)
14　5YR5/6　明赤褐色土層　粘性なし　しまりやや密　15層より暗い
15　5YR5/6　明赤褐色土層　粘性なし　しまりやや密
16　10YR4/3　にぶい黄褐色土層　粘性弱しまり疎　黒褐色土粒3%包含(煙道部)

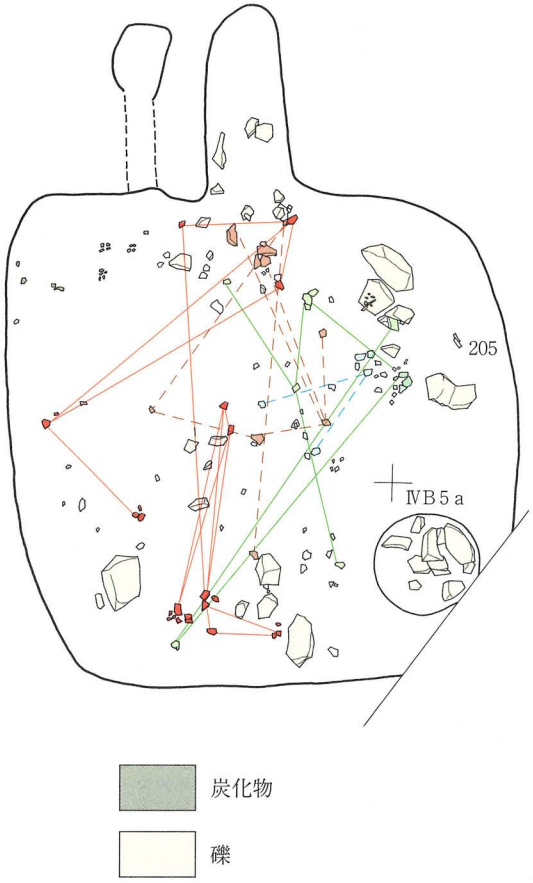
第8図　2号竪穴住居跡　カマド1・2

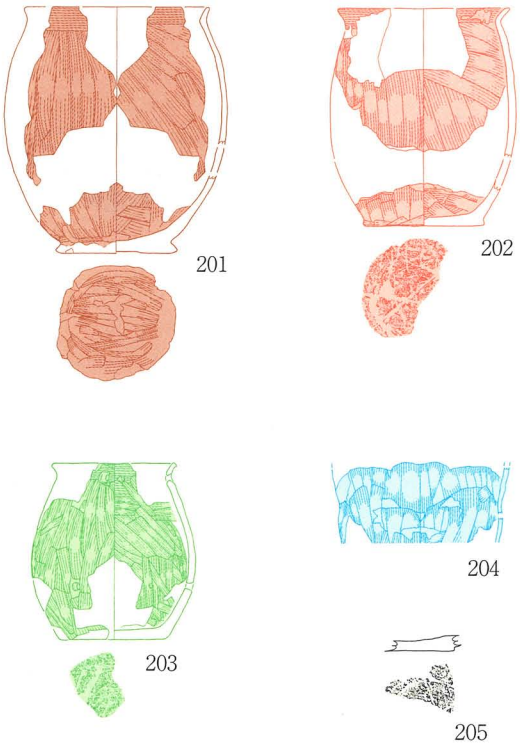


第 9 図　2 号竪穴住居跡検出

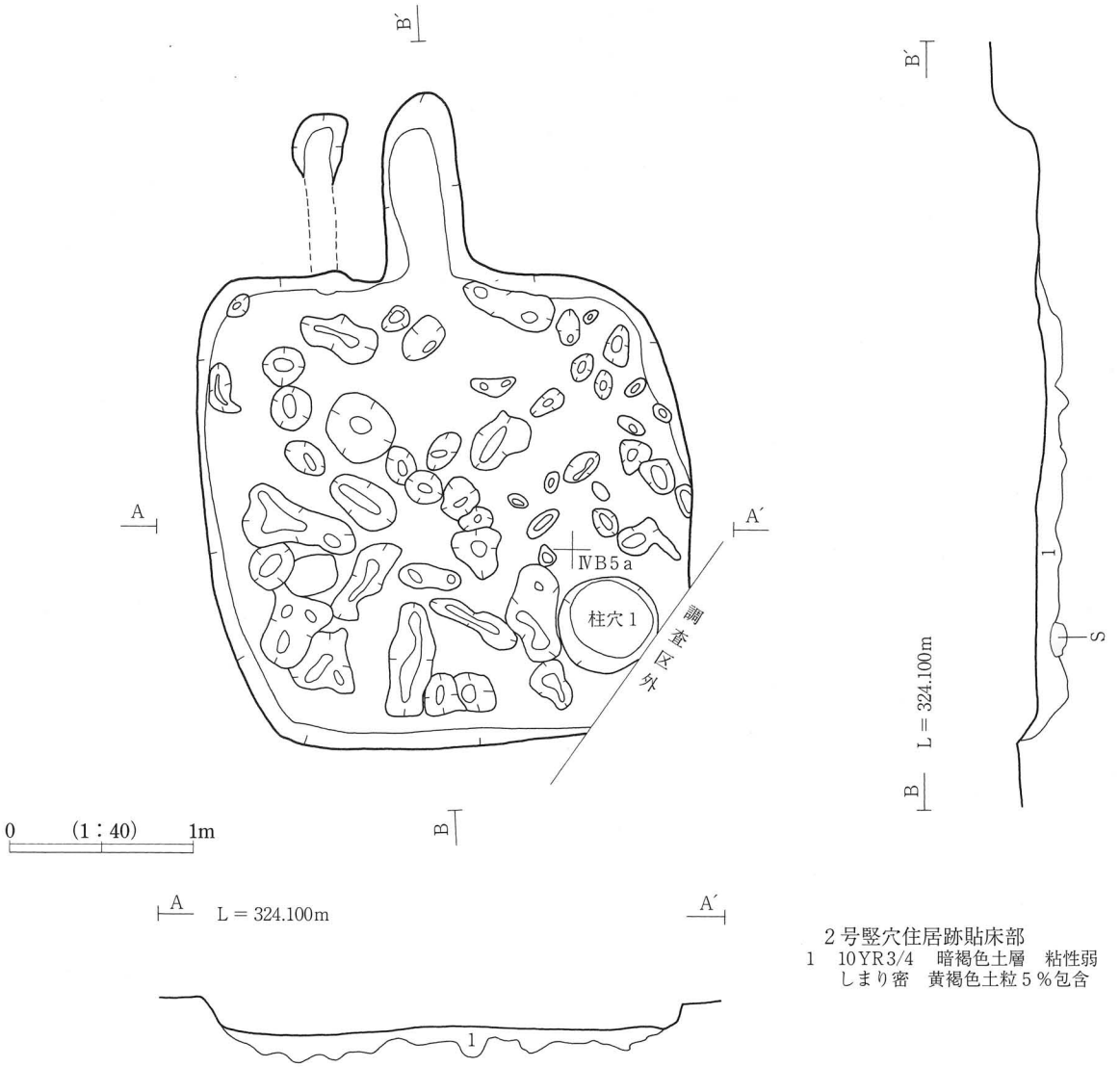


第10図　2 号竪穴住居跡
床面での焼土、炭化物拡散状況





第11図　2 号竪穴住居跡遺物分布



第12図　２号竪穴住居跡掘り方

[計測値]住居規模：2.68×2.58m、床面積：6.5m²、床面標高：323.480m、残存壁高：25cm
カマド１・２方位：N-2度-W、カマド１煙道部長：75cm、カマド２煙道部長：90cm
柱穴１規模：54×53cm、柱穴１深さ45cm、柱穴１底面標高323.040m、柱穴１柱痕跡幅30cm
焼土１範囲：62×40cm、焼土１厚さ：５cm、焼土２範囲：60×42cm、焼土２厚さ12cm

遺物（第32図、写真図版18）

[土師器]口縁部ナデ調整の小形甕である。底部に木葉痕、底部をヘラナデ調整している。203は球胴甕の系譜であろう。補修孔が２ヵ所穿たれている。

時期　奈良～平安時代と考えられる。なお、カマド内出土炭化物の放射性炭素年代測定値OxCal V3.10暦年更正プログラムでは８世紀後半～10世紀の年代が得られている（Ⅴ章２節参照）。

３号竪穴住居跡

遺構（第13～15図、写真図版５・６）

[位置・検出状況]緩斜面上の調査区ほぼ中央のＶＣ区に位置する。検出はⅡ層（旧表土）を重機で掘

削後にⅢ層上部で行っており、黒褐色～暗褐色の方形プランを確認した。検出段階でカマド煙出し部が確認できた。検査棒による埋土の深さの検討では約40cmの堆積が認められ、良好な遺存状態であることが推察された。遺構の南部は調査区外へ続くため未検出である。セクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ40cm程度で床面に達した。

[埋土]黄褐色土粒を含む堆積層が多い。埋土は6層に分離した。第4層の黄褐色土層はカマド崩落土を含むと考えられる。東西セクションを調査区壁第1層より上位にⅢ層の堆積が確認できたことから、古代の生活面はⅢ層上部にあると考えられる。遺物は床面上位の第3層内から出土している。埋土はレンズ状堆積を呈しており、自然埋没と考えられる。

[平面形式・内部施設]方形プランと考えられ東壁にカマドを1基持つ。柱穴は確認できなかった。

[カマド]東壁北側に設置されている。刳抜式である（第15図）。カマド構築材ににぶい黄褐色土、礫を使用している。崩落した構築材は住居中央に散乱し（住居埋土第4層）、袖部は芯材となる礫の残存が良好で、南側の袖部には縄文時代の特殊磨石（124）の転用も見られる。煙出し部では土師器片が出土している。燃焼部の焼土範囲は明確で、範囲内の炭化物については放射性炭素年代測定を行っている（Ⅴ章2節：試料No.3）。煙道部は燃焼部からほぼ水平に煙出し部まで続く。

[炭化物・遺物分布]カマド燃焼部周辺と住居中央付近に遺物が散乱している。遺物は床面を中心に土師器甕の破片、炭化物、骨片、水晶製砕片が出土しているが、量は少ない。

[掘り方]硬質面範囲は住居中央に広がり、硬質面を掘削すると多数の突起状の掘り方が確認できた。掘り込みは壁近くでは浅い傾向にあるが、南側はやや深い（第14図）。

[重複関係]なし。

[計測値]住居規模：2.64×(1.32)m、床面積：2.7m²以上、床面標高：323.200m、残存壁高：44cm、カマド方位：E-11度-S、カマド煙道部長：62cm、カマド煙出し部径38×42cm

遺物（第32図、写真図版18）

[土師器]207は口縁部ナデ調整の小形甕である。胴上部に最大径をもつ。底部残存個体は外面にヘラケズリ調整が見られる。

時期　平安時代と考えられる。なお、カマド内出土炭化物の放射性炭素年代測定値OxCal V3.10暦年更正プログラムでは8世紀後半～10世紀の年代が得られている（Ⅴ章2節参照）。

（2）土　　坑

1号土坑

遺構（第16図、写真図版6）

[位置・検出状況]ⅣAグリッドに位置し2号竪穴住居跡に隣接する。検出はⅡ層（旧表土）を重機で掘削後にⅢ層上部で行っており、黒褐色土の半円状プランを確認した。遺構の西部は調査区外へ続くため未検出である。セクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ20cm程度で床面に達した。

[埋土]黒褐色土で構成される。第1層は2号竪穴住居跡の第1層と対応すると考えられる。黄褐色土粒を微量包含する。

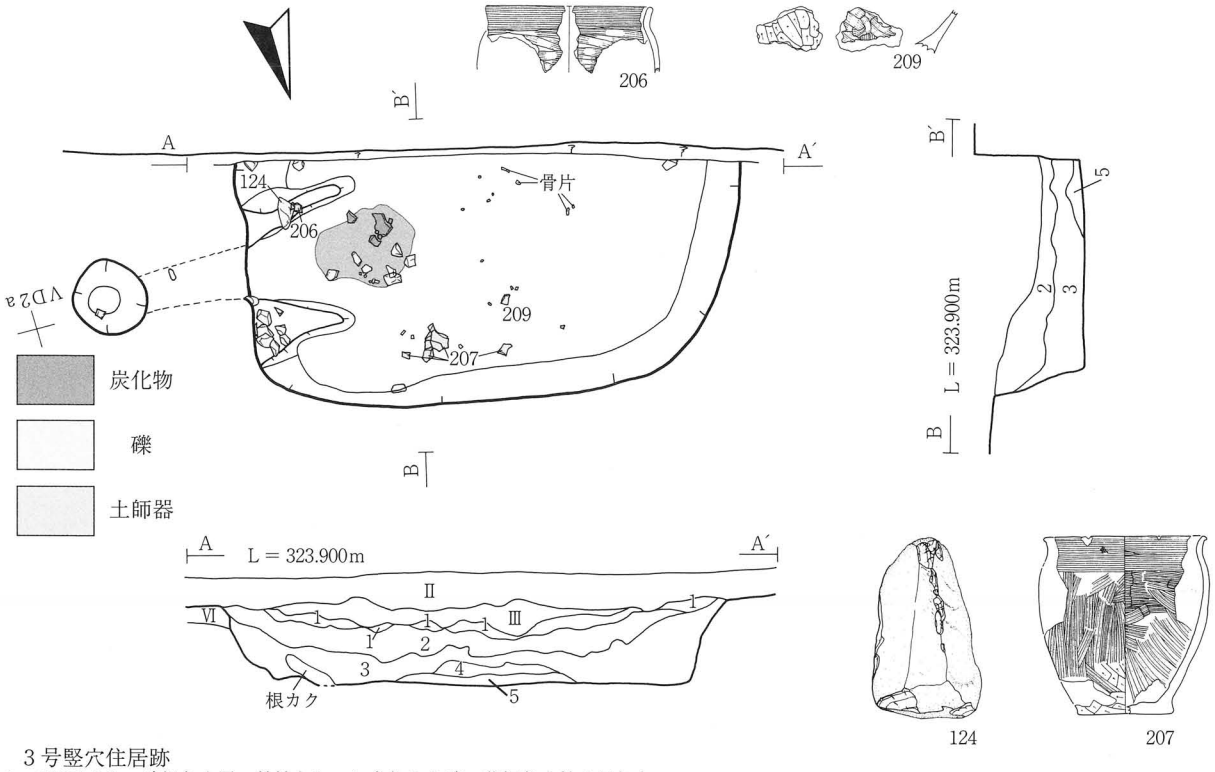
[形状]確認された平面形態から不整楕円形を呈すると思われる。

[重複関係]2号竪穴住居跡のカマド2煙出し部を切る。

[計測値]規模：140×160cm以上、検出面からの深さ：20cm、底面標高：323.500m

遺物　なし。

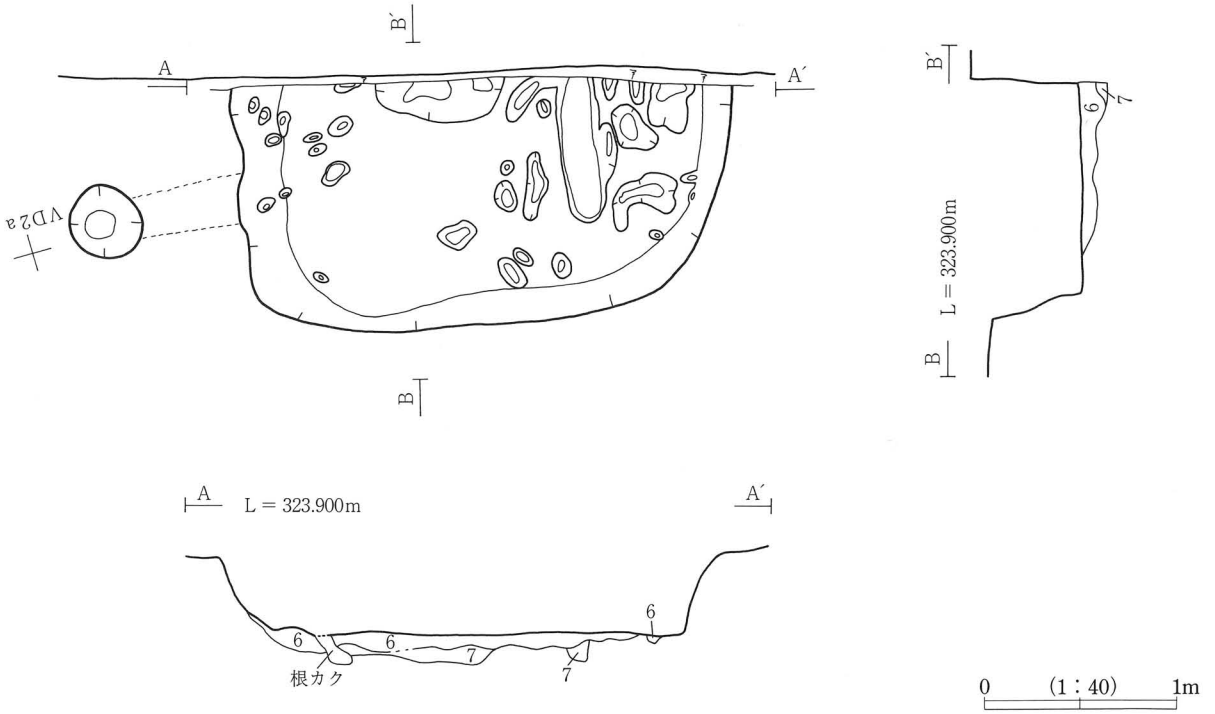
時期　検出面と埋土の状況から2号竪穴住居跡とほぼ同時期の奈良～平安時代と考えられる。



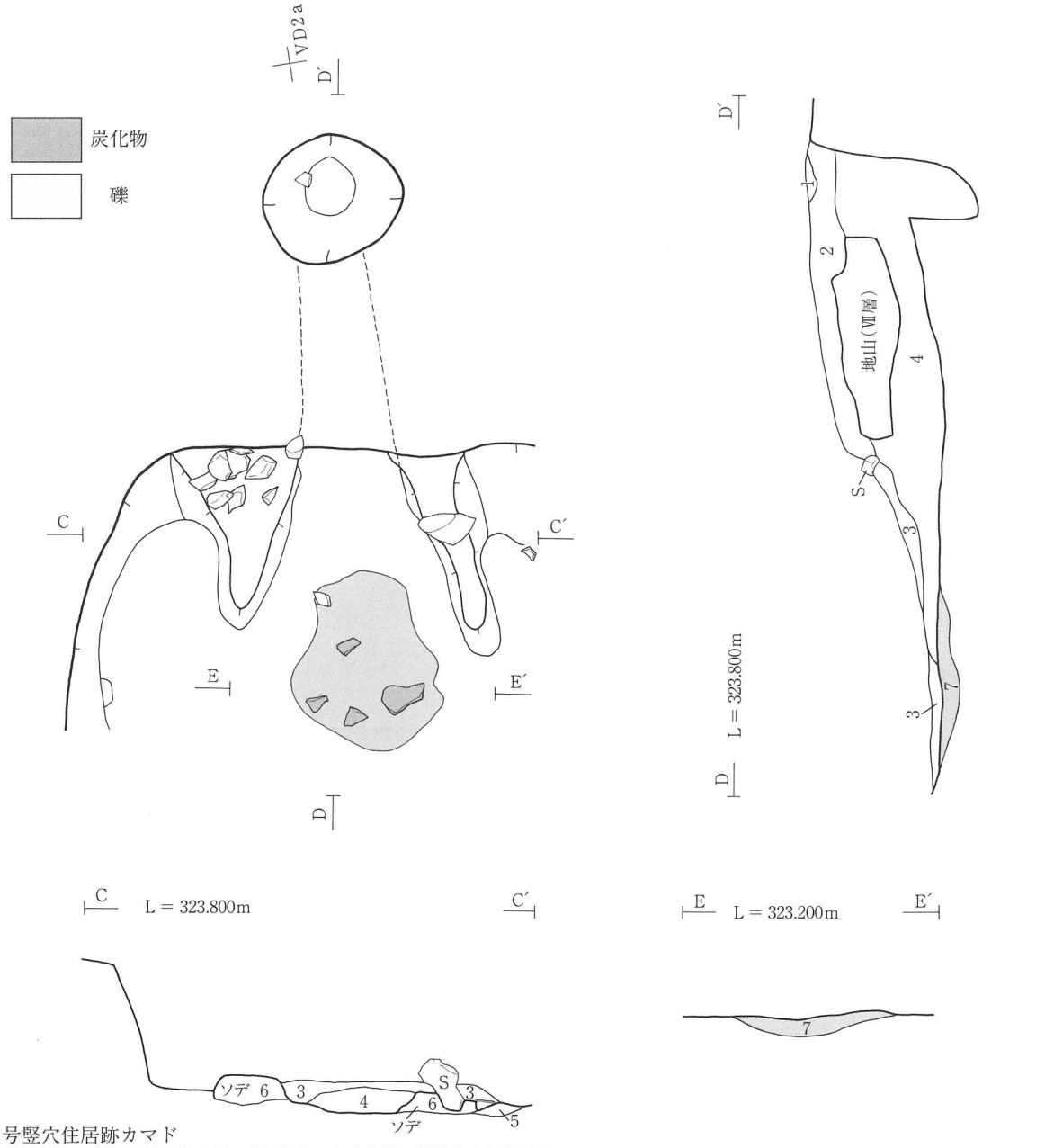
3号竪穴住居跡
1　10YR3/3　暗褐色土層　粘性なし　しまりやや疎　黄褐色土粒３％包含
2　10YR2/2　黒褐色土層　粘性なし　しまり疎　炭化物３％包含
3　10YR4/3　にぶい黄褐色土層　粘性なし　しまりなし　黄褐色土粒10％包含　炭化物２％包含
4　10YR5/6　黄褐色土層　粘性なし　しまり疎　カマド崩落土を含む層か？
5　10YR3/3　暗褐色土層　粘性なし　しまり疎　炭化物10％包含

第13図　３号竪穴住居跡

3号竪穴住居跡貼床部
6　10YR5/4　にぶい黄褐色土層　粘性なし　しまり密
7　10YR5/3　にぶい黄褐色土層　粘性弱　しまり疎



第14図　３号竪穴住居跡掘り方



第15図　３号竪穴住居跡カマド

２号土坑

遺構（第16図、写真図版６）

[位置・検出状況]ＶＣグリッドに位置する。検出はⅡ層（旧表土）を重機で掘削後にⅢ層上部で行っており、暗褐色土の方形プランを確認した。遺構の一部は調査区外へ続くため未検出である。セクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ30cm程度で床面に達した。

[埋土]暗褐色土１層のみである。黄褐色土粒を微量包含する。

[形状]確認された平面形態から方形を呈すると思われる。底面は礫が露出し、根カクランの可能性も

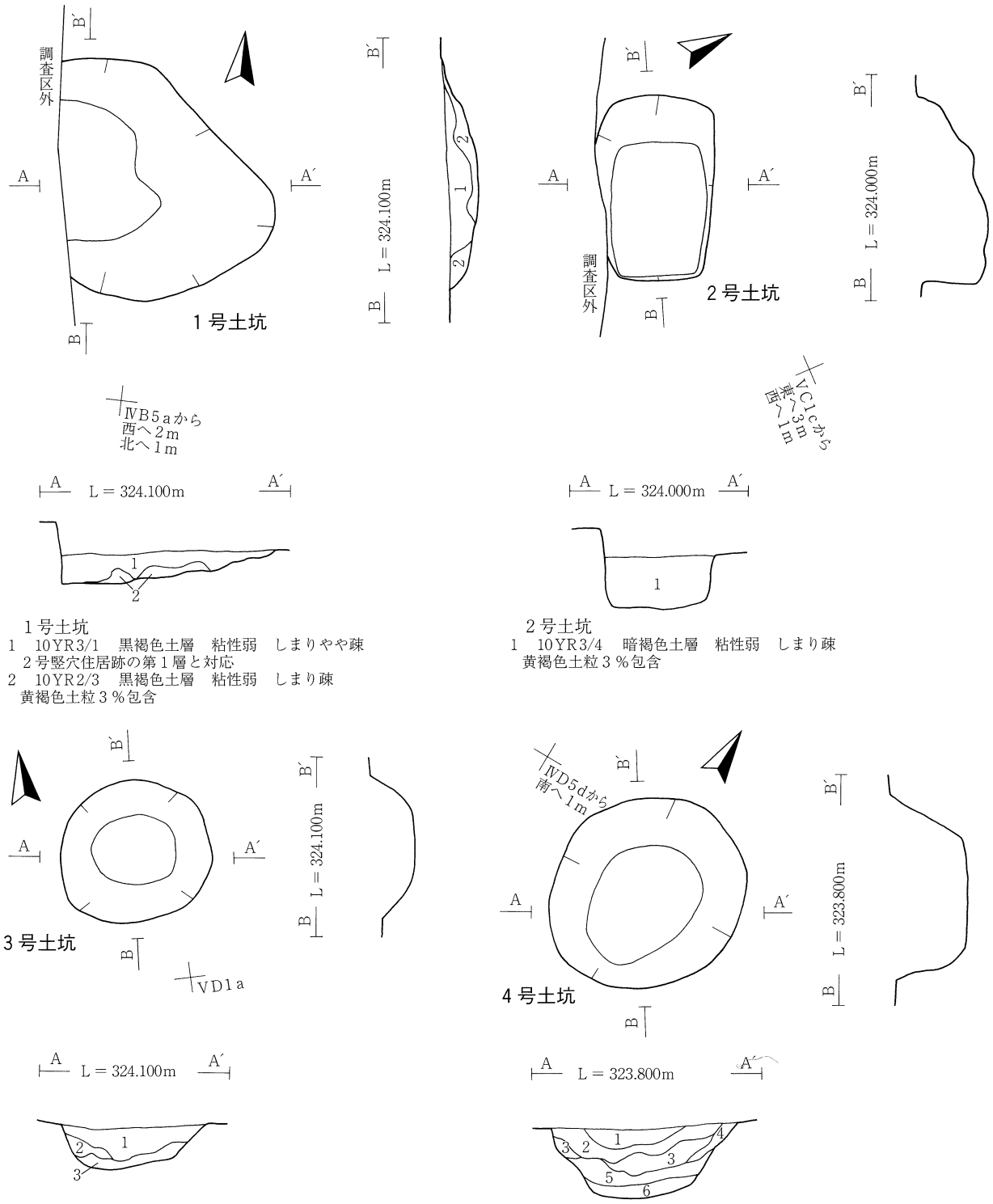
否定できない。
[重複関係]なし。
[計測値]規模：123×76cm、検出面からの深さ：34cm、底面標高：323.240m
遺物　なし。
時期　不明。

3号土坑
遺構（第16図、写真図版7）
[位置・検出状況]ⅣCグリッドに位置する。Ⅴ層掘削のⅥ層上面でにぶい黄褐色土の円形プランを検出した。セクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ30cm程度で床面に達した。
[埋土]にぶい黄褐色土を主体とする。
[形状]平面形は円形、断面は碗形を呈する。
[重複関係]なし。
[計測値]規模：98×94cm、検出面からの深さ：28cm、底面標高：323.450m
遺物　なし。
時期　検出面から縄文時代と考えられる。

4号土坑
遺構（第16図、写真図版7）
[位置・検出状況]ⅣCグリッドに位置する。Ⅳ層掘削のⅤ層上面で褐色～黒褐色土の円形プランを検出した。セクションベルトを設定して掘り下げを行い、検出面から深さ45cm程度で床面に達した。
[埋土]褐色～黒褐色土、黄褐色土、砂層で構成され、6層に分離した。第6層は底部に堆積する砂層で、Ⅳ層の流入の可能性がある。
[形状]平面形は円形、断面形は碗形を呈する。
[重複関係]なし。
[計測値]規模：134×118cm、検出面からの深さ：46cm、底面標高：322.980m
遺物　なし。
時期　検出面から縄文時代と考えられる。

（3）焼土遺構

1号焼土遺構
遺構（第17図、写真図版7）
[位置・検出状況]ⅣBグリッドに位置する。Ⅴ層掘削後のⅥ層中部でにぶい赤褐色土のプランを検出した。平面を実測後にセクションベルトを設定して掘り下げを行い、被熱深度の確認を行った。
[被熱土]しまりのあるⅥ層が熱変色したと考えられる。被熱土1層はにぶい赤褐色土層、被熱土2は極暗赤褐色土で黒褐色土を少量包含している。被熱土は廃棄されたものではなく、原位置を保持している。
[形状]平面形は南北に筋状にのびる。
[重複関係]なし。
[計測値]検出面標高：323.600m



1号土坑
1　10YR3/1　黒褐色土層　粘性弱　しまりやや疎
　2号竪穴住居跡の第1層と対応
2　10YR2/3　黒褐色土層　粘性弱　しまり疎
　黄褐色土粒3％包含

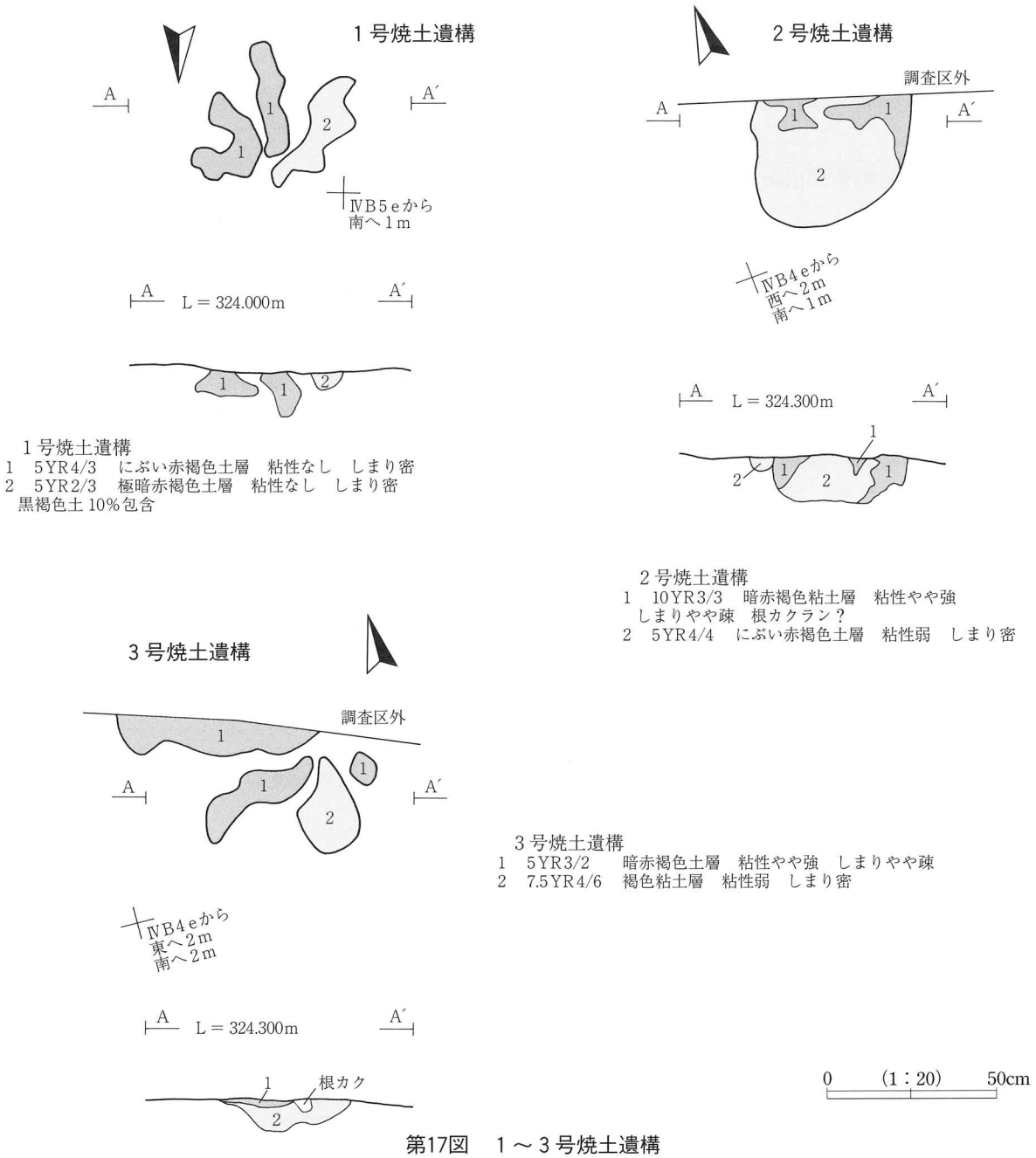
2号土坑
1　10YR3/4　暗褐色土層　粘性弱　しまり疎
　黄褐色土粒3％包含

3号土坑
1　10YR4/3　にぶい黄褐色土層　粘性微弱
　しまりやや疎　黄褐色土粒3％包含　焼土粒1％包含
2　10YR5/4　にぶい黄褐色土層　粘性微弱
　しまり疎　黄褐色土粒20％包含
3　10YR4/4　褐色土層　粘性なし　しまり疎
　黄褐色土粒5％包含

4号土坑
1　10YR4/4　褐色土層　粘性なし　しまり疎　砂粒少量　小礫少量
2　10YR2/2　黒褐色土層　粘性なし　しまり疎　砂粒少量
3　10YR5/4　にぶい黄褐色土層　粘性弱　しまり疎　砂粒少量
4　10YR2/3　黒褐色土層　粘性弱　しまり疎　砂粒中量
5　10YR4/6　褐色土層　粘性弱　しまり疎　砂粒中量
6　10YR5/6　黄褐色砂層　粘性なし　しまり疎　Ⅳ層の流入か？

0　(1：40)　1m

第16図　1～4号土坑



第17図　1～3号焼土遺構

遺物　なし。

時期　Ⅴ層（黄褐色火山灰）堆積以前で縄文早期～前期と考えられる。

2号焼土遺構

遺構（第17図、写真図版7）

[位置・検出状況]ⅣBグリッドに位置する。Ⅴ層掘削後のⅥ層中部で暗赤褐色土のプランを検出した。平面を実測後にセクションベルトを設定して掘り下げを行い、被熱深度の確認を行った。

[被熱土]しまりのあるⅥ層が熱変色したと考えられる。被熱土1層は暗赤褐色土層、被熱土2層はにぶい赤褐色土で黒褐色土を少量包含している。被熱土は廃棄されたものではなく、原位置を保持している。

[形状]北側は調査区外に続き未検出である。平面形は円形を呈すると考えられる。
[重複関係]なし。
[計測値]検出面標高：324.130m
遺物　なし。
時期　Ⅴ層（黄褐色火山灰）堆積以前で縄文早期～前期と考えられる。

3号焼土遺構

遺構（第17図、写真図版８）
[位置・検出状況]ⅣＢグリッドに位置する。Ⅴ層掘削後のⅥ層中部で暗赤褐色土のプランを検出した。平面を実測後にセクションベルトを設定して掘り下げを行い、被熱深度の確認を行った。
[被熱土]しまりのあるⅥ層が熱変色したと考えられる。被熱土１層は暗赤褐色土層、被熱土２層はにぶい赤褐色土である。被熱土は廃棄されたものではなく、原位置を保持している。
[形状]北側は調査区外へ続き未検出である。平面形は筋状である。
[重複関係]なし。
[計測値]検出面標高：324.090m
遺物　なし。
時期　Ⅴ層（黄褐色火山灰）堆積以前で縄文早期～前期と考えられる。

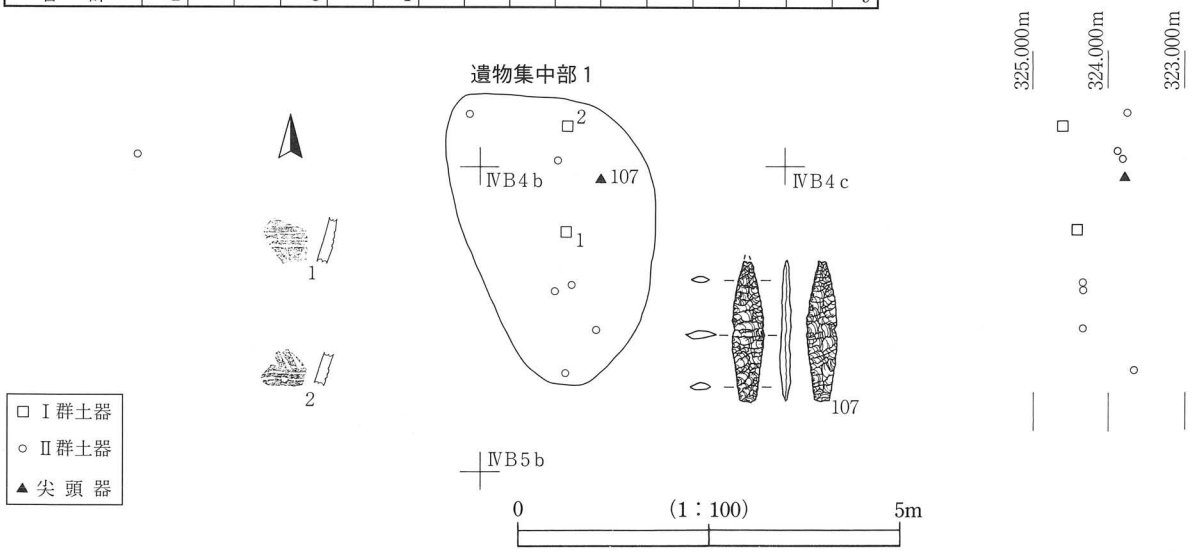
（４）遺物集中部

第Ⅵ層に垂直分布のピークをもつ遺物集中部を７ヵ所設定した。範囲認定は２ｍの範囲に、５点以上の遺物があることとした。

遺物集中部１（第18図）

第２表　遺物集中部１組成表

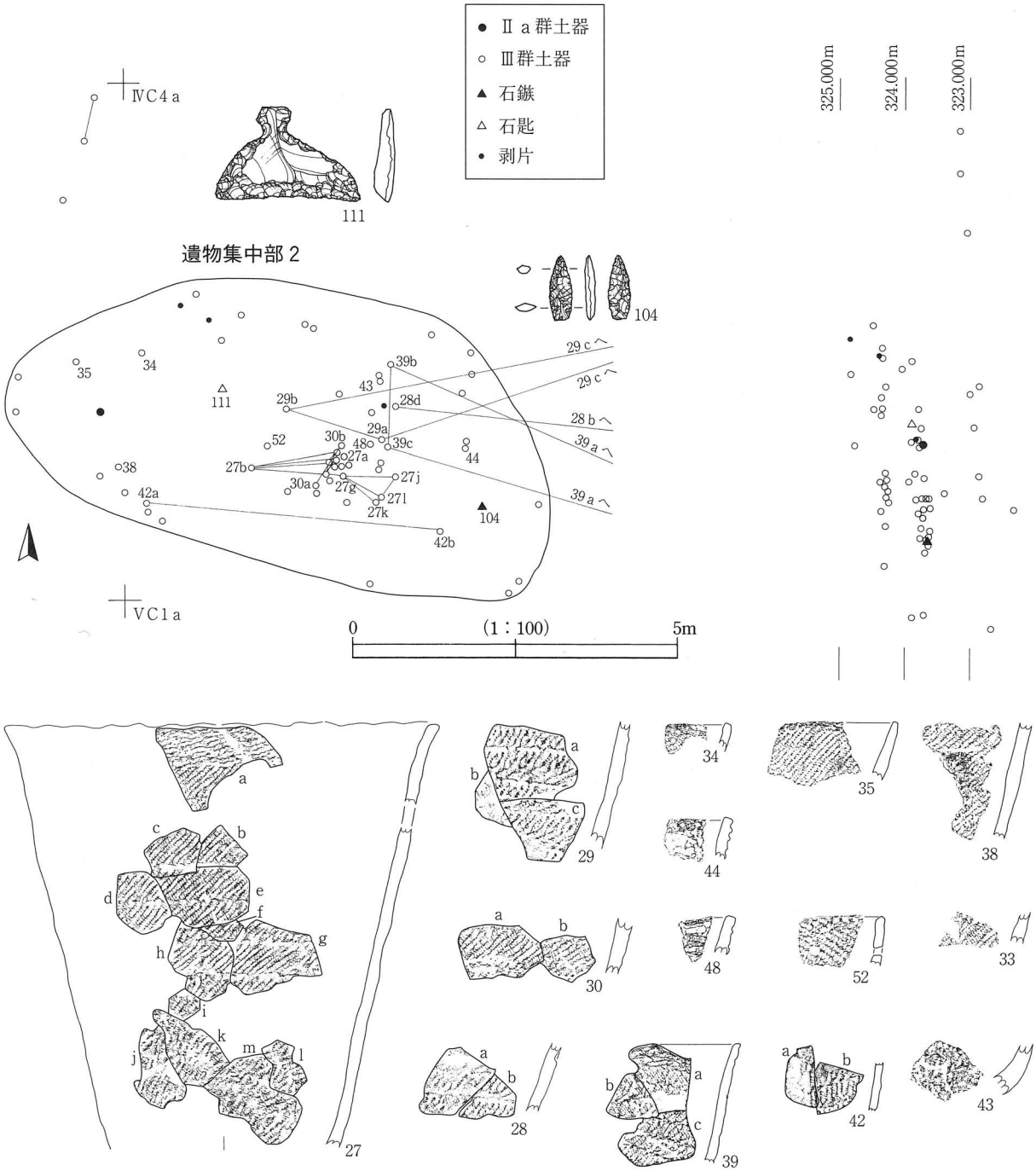
石材	Ⅰ群土器	Ⅱa群土器	Ⅱb群土器	Ⅲ群土器	Ⅳ群土器	尖頭器	石鏃	石匙	掻器	削器	楔形石器	剥片	砕片	特殊磨石	磨石D	合計
	2			6												8
頁岩14						1										1
合　計	2			6		1										9



第18図　遺物集中部１

第３表　遺物集中部２組成表

石材	Ⅰ群土器	Ⅱa群土器	Ⅱb群土器	Ⅲ群土器	Ⅳ群土器	尖頭器	石鏃	石匙	掻器	削器	楔形石器	石核	剥片	砕片	特殊磨石	磨石D	合計
		1		57													58
頁岩３													1				1
頁岩４								1					1				2
頁岩８													1				1
頁岩15							1										1
合　計		1		57			1	1					3				63



第19図　遺物集中部２

[位置・分布]緩やかな傾斜の続くⅣＢ４ｂグリッドに集中する。標高324.000m付近に垂直分布ピークを持つが、上下に分散している。
[遺物]Ⅰ群土器２点、Ⅲ群土器６点、尖頭器１点の計９点で構成される。焼土遺構や石器製作残滓を伴わない。
[時期]縄文時代早期～前期前半に形成されたと考えられる。

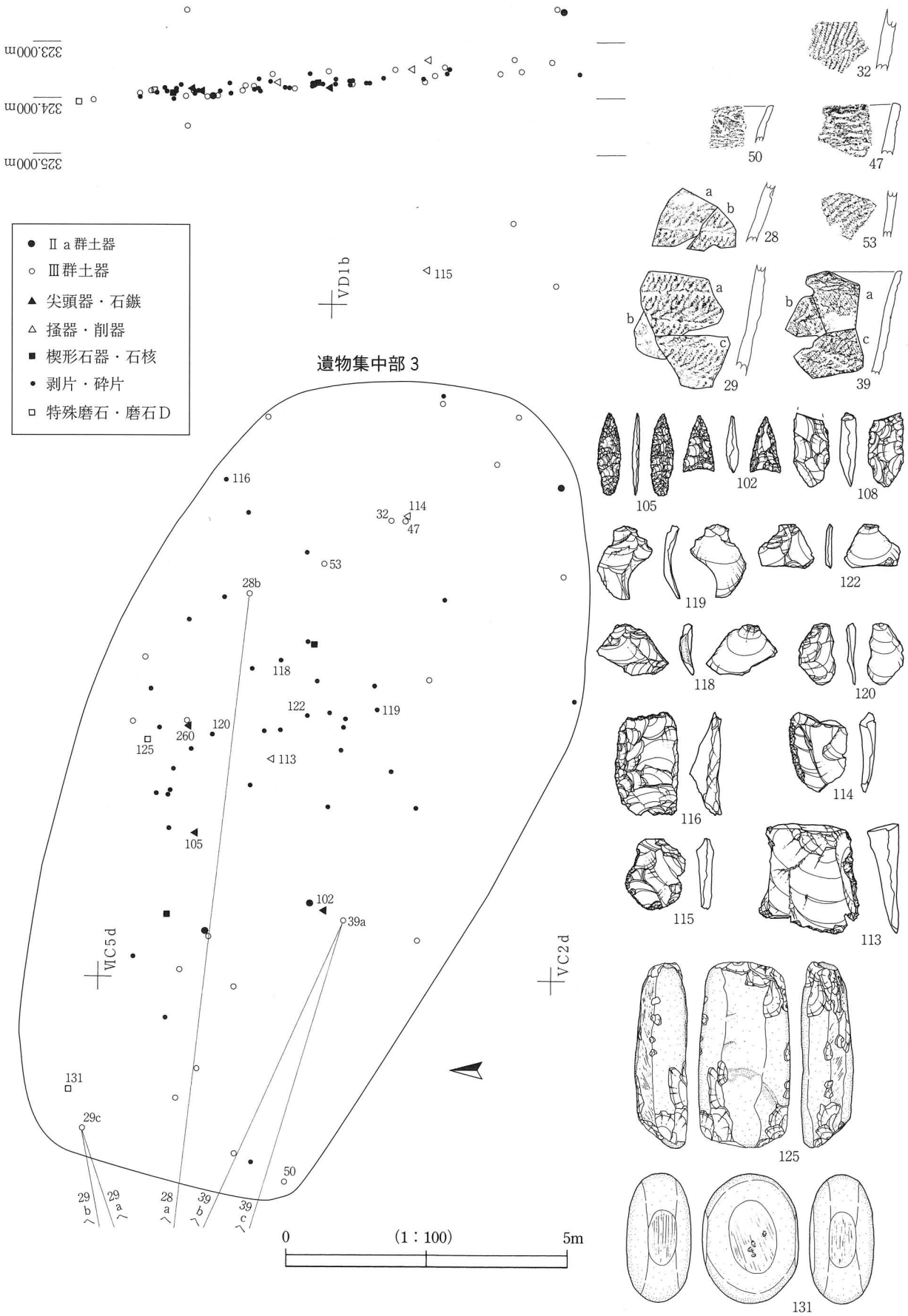
遺物集中部２（第19図）
[位置・分布]緩やかな傾斜の続くⅣＣ５ａグリッドに集中する。標高324.000m付近に垂直分布ピークを持つが、上下の分散は比較的少ない。
[遺物]Ⅱａ群土器１点、Ⅲ群土器61点、石鏃１点、石匙１点、剥片３点の計67点で構成される。分布範囲の西側に３号焼土遺構がある。繊維の多量に混入するⅢ群土器が主体を占める。土器28・29・39は隣接する遺物集中３との遺構間接合関係を有する。
[時期]縄文時代早期後半～前期前半に形成されたと考えられる。

遺物集中部３（第20図）
[位置・分布]緩やかな傾斜の続くⅣＣ５ｄ・５ｅグリッドに集中し、遺物集中２と隣接する。標高323.700m付近に垂直分布ピークを持ち、上下の分散は少ない。中心部に尖頭器製作残滓の剥片・砕片・楔形石器が、周辺部にⅢ群土器と削器、磨石Ｄなどのトゥールが分布している。分布範囲の東側に３号土坑がある。
[遺物]Ⅱａ群土器３点、Ⅲ群土器24点、尖頭器１点、石鏃２点、掻器１点、削器２点、楔形石器１点、石核１点、剥片29点、砕片８点、特殊磨石１点、磨石Ｄ１点の計74点で構成される。土器は破片資料のみでⅢ群土器が主体である。石器では黒色頁岩１を母岩として尖頭器製作が行われている。Ⅲ群土器の一部は遺物集中部２との遺構間接合関係を有する。
[時期]縄文時代早期後半～前期前半に形成されたと考えられる。

第４表　遺物集中部３組成表

石材	Ⅰ群土器	Ⅱａ群土器	Ⅱｂ群土器	Ⅲ群土器	Ⅳ群土器	尖頭器	石鏃	石匙	掻器	削器	楔形石器	石核	剥片	砕片	特殊磨石	磨石Ｄ	合計
		3		22													25
頁岩１													2				2
頁岩２													1				1
頁岩４													1				1
頁岩６							1						1	1			3
頁岩９									1			1	5	3			10
頁岩12							1										1
頁岩13																	0
頁岩16										1							1
黒色頁岩１											1		18	4			24
チャート１						1							1				1
安山岩																1	1
砂　岩															1		1
合　計		3		22		1	2		1	1	1	1	29	8	1	1	71

遺物集中部４（第21図）
[位置・分布]緩やかな傾斜の続くⅣＥ５ａ・ＶＥ１ａグリッドに集中している。標高323.000m付近に垂直分布ピークを持ち、上下の分散は少ない。遺物集中６よりも南側の標高の低い場所に位置する。


323.000m
324.000m
325.000m
Ⅱa群土器
Ⅲ群土器
尖頭器・石鏃
掻器・削器
楔形石器・石核
剥片・砕片
特殊磨石・磨石D
遺物集中部3
VD1b
VC2d
VIC5d
115
116
114
32
47
53
28b
118
122
119
120
260
125
113
105
102
39a
131
29c
50
29b
29a
28a
39b
39c
0
(1：100)
5m
32
50
47
28
53
29
39
102
105
108
119
122
118
120
116
114
115
113
125
131

第20図　遺物集中部3

[遺物]Ⅱａ群土器12点、Ⅱｂ群土器２点、Ⅲ群４点、特殊磨石１点の計19点で構成される。石器製作残滓は出土していない。Ⅱａ群土器の９は遺物集中６と遺構間接合関係を有する。
[時期]縄文時代早期後半～前期前半に形成されたと考えられる。

第５表　遺物集中部４組成表

石材	Ⅰ群土器	Ⅱa群土器	Ⅱb群土器	Ⅲ群土器	Ⅳ群土器	尖頭器	石鏃	石匙	掻器	削器	楔形石器	石核	剥片	砕片	特殊磨石	磨石D	合計
		12	2	4													18
閃緑岩															1		1
合　計		12	2	4											1		19

遺物集中部５（第21図）
[位置・分布]緩やかな傾斜の続くⅣＥ４ｂグリッドに集中している。標高323.000ｍ付近に垂直分布ピークを持ち、上下の分散は少ない。遺物集中４に隣接する。
[遺物]Ⅱａ群土器９点、Ⅱｂ群土器３点の計12点で構成される。石器製作残滓は出土していない。遺跡内でⅡｂ群土器の数量が最も多い。
[時期]縄文時代早期後半に形成されたと考えられる。

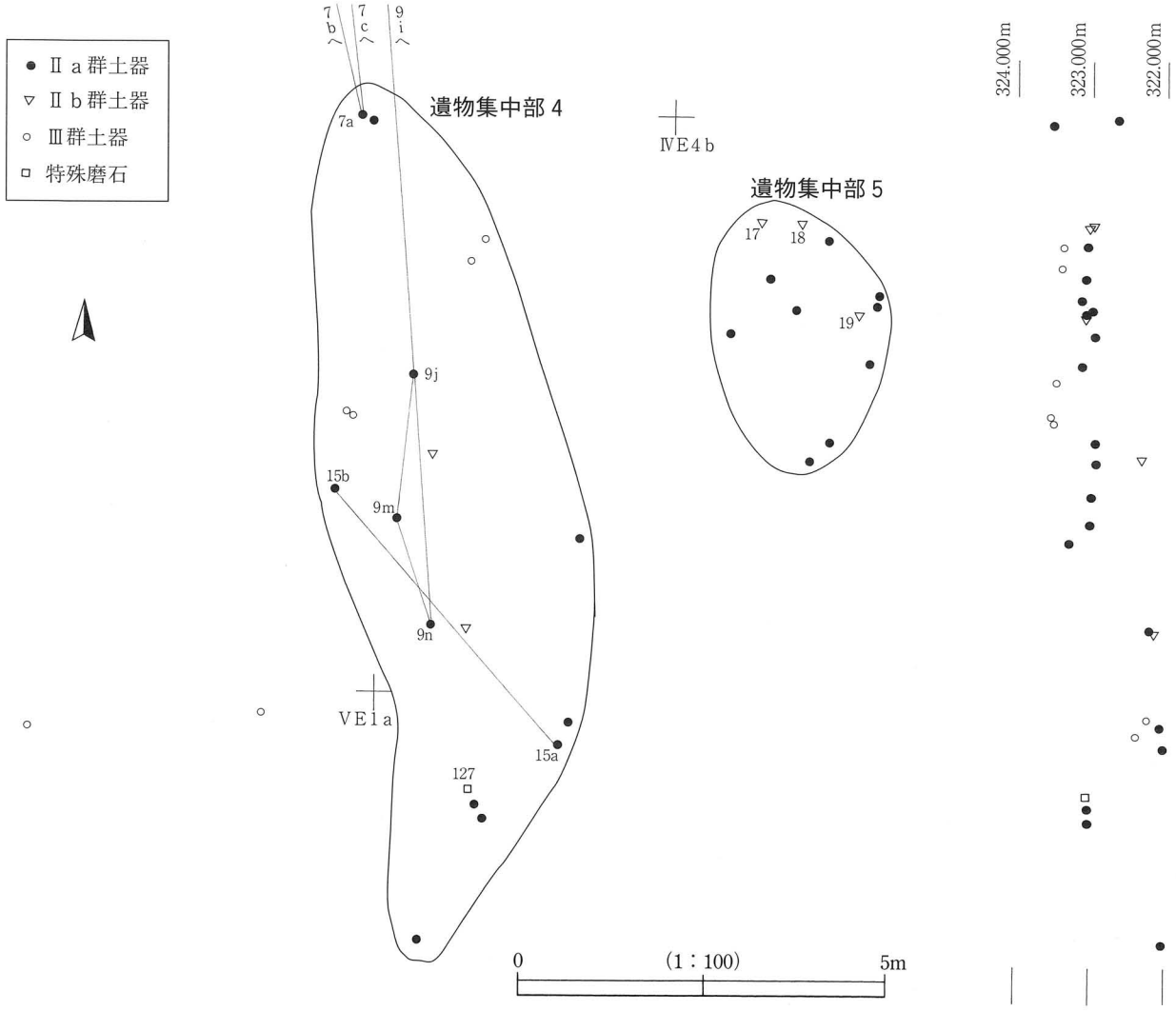
第６表　遺物集中部５組成表

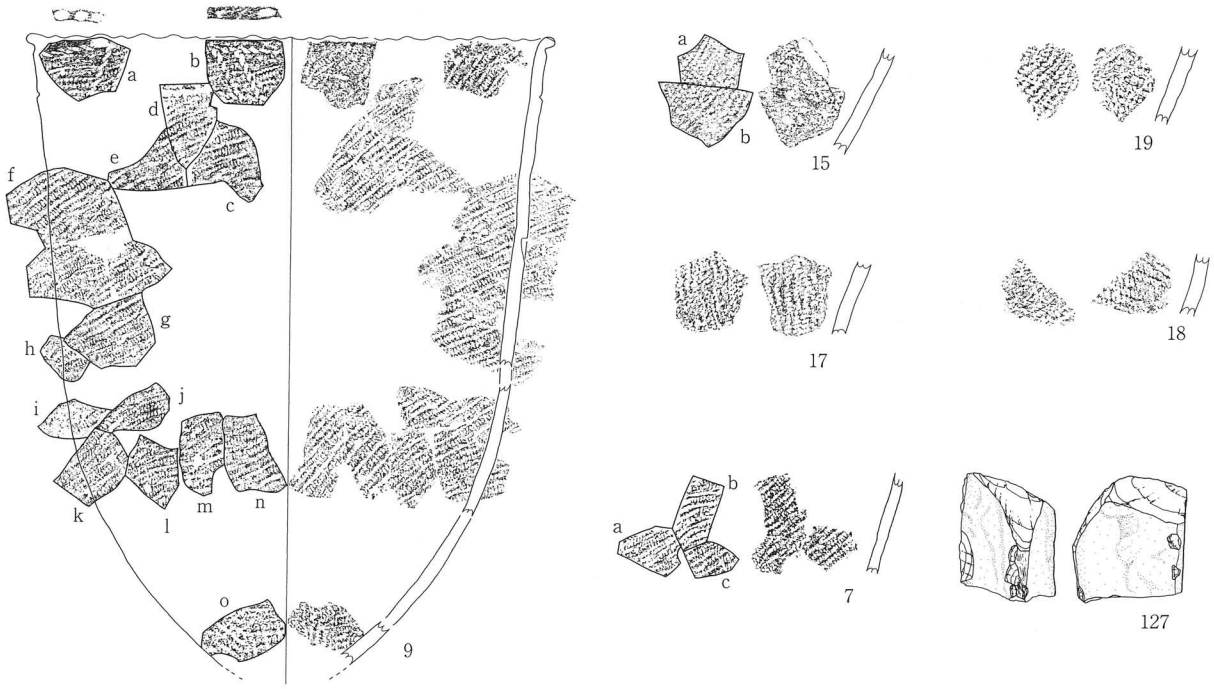
石材	Ⅰ群土器	Ⅱa群土器	Ⅱb群土器	Ⅲ群土器	Ⅳ群土器	尖頭器	石鏃	石匙	掻器	削器	楔形石器	石核	剥片	砕片	特殊磨石	磨石D	合計
合　計		9	3														12

遺物集中部６（第22図）
[位置・分布]緩やかな傾斜の続くⅣＤ２ｅ・ⅣＥ２ａグリッドに集中している。標高323.500ｍ付近に垂直分布ピークを持ち、上下の分散は少ない。窪地状の範囲にⅡａ群土器がまとまって出土している。集中部周辺に尖頭器、剥片が出土している。
[遺物]Ⅱａ群土器72点、Ⅱｂ群土器２点、Ⅲ群土器８点、磨石Ｄ１点の計83点で構成される。石器製作残滓は出土していない。Ⅱａ群の出土数が主体を占めるものの、個体数は少ない。Ⅱａ群土器の９は遺物集中４と遺構間接合関係を有する。
[時期]縄文時代早期後半～前期前半に形成されたと考えられる。

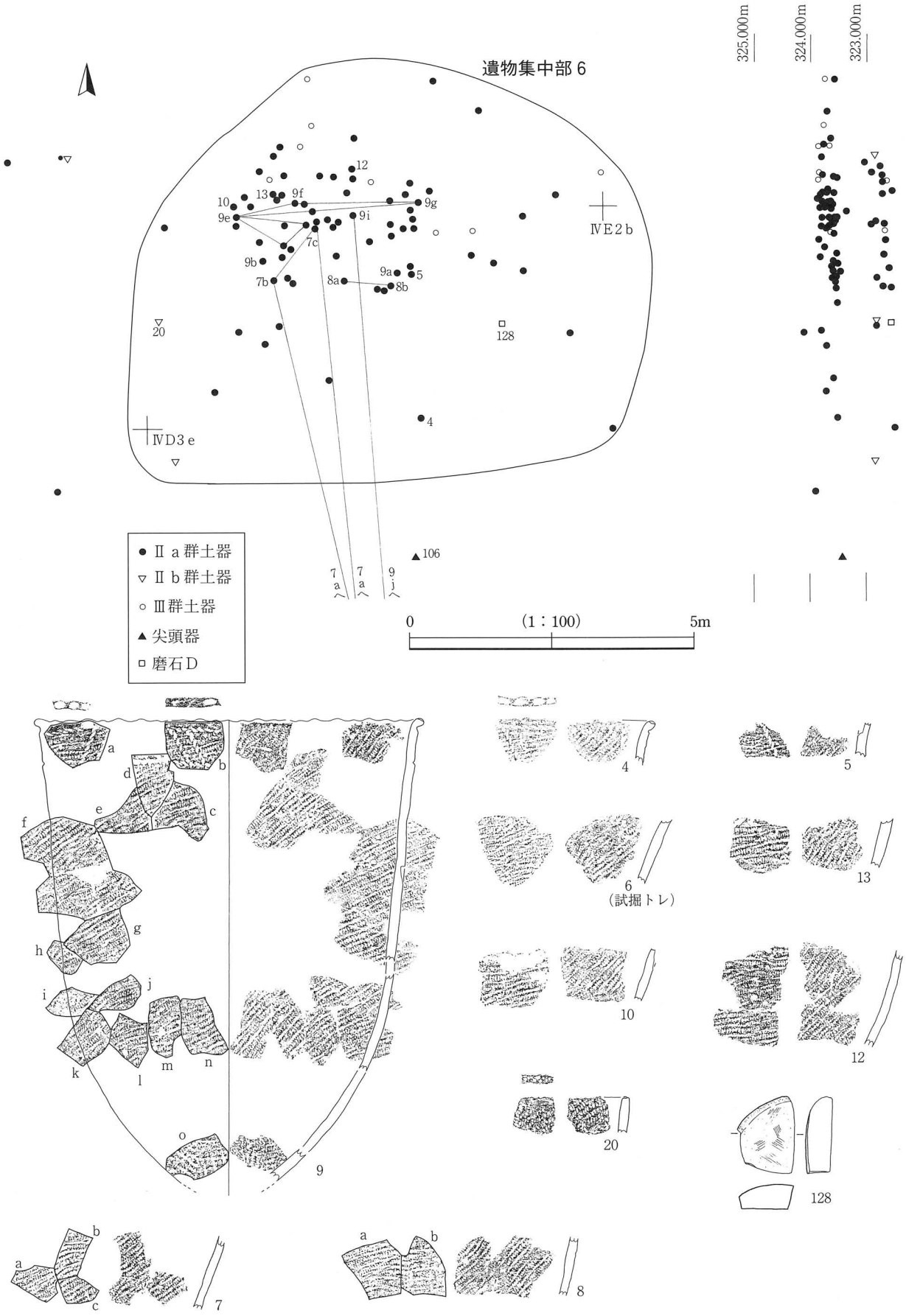
第７表　遺物集中部６組成表

石材	Ⅰ群土器	Ⅱa群土器	Ⅱb群土器	Ⅲ群土器	Ⅳ群土器	尖頭器	石鏃	石匙	掻器	削器	楔形石器	石核	剥片	砕片	特殊磨石	磨石D	合計
		72	2	8													82
砂　岩																1	1
合　計		72	2	8												1	83

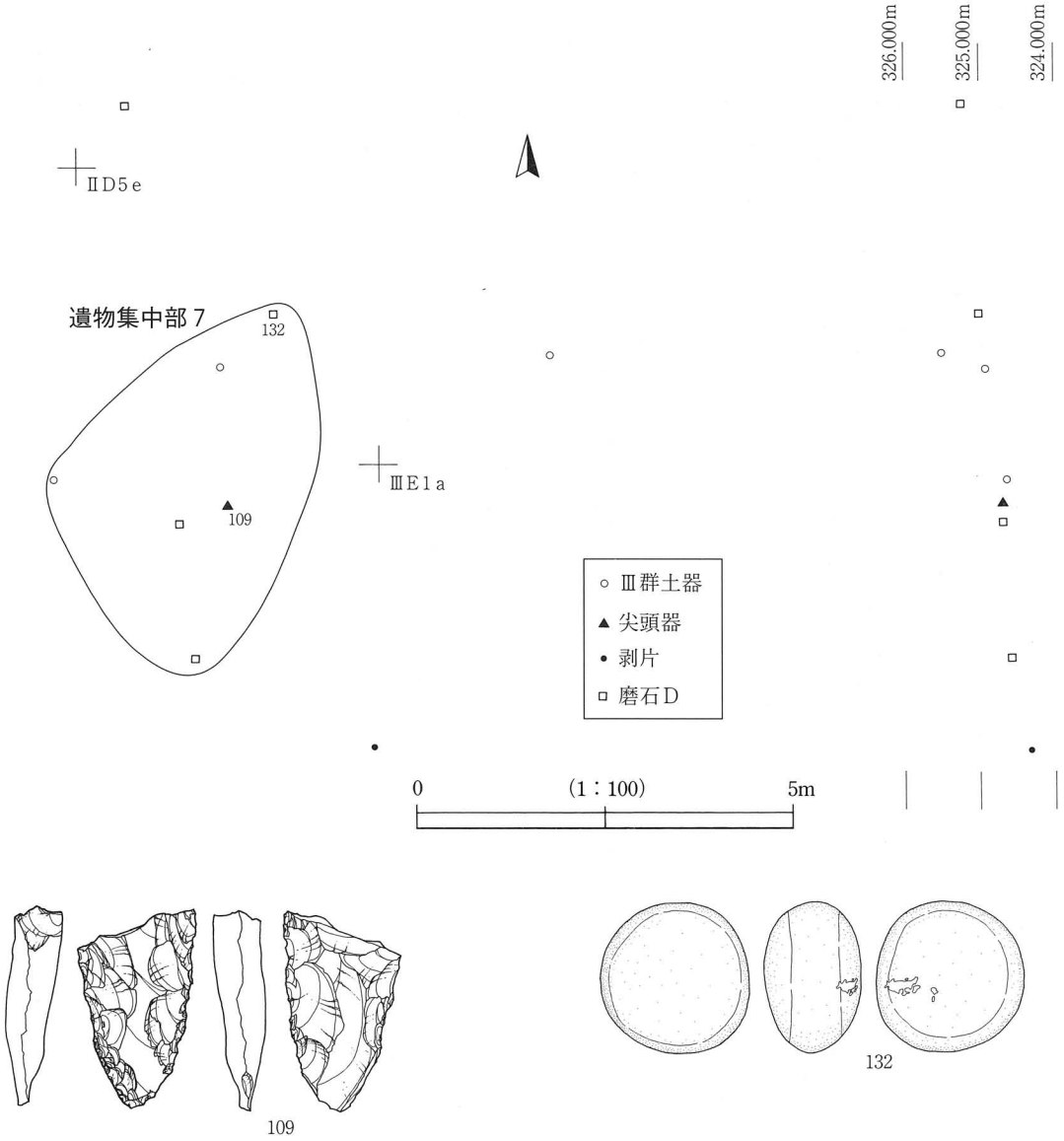




第21図　遺物集中部4・5


遺物集中部6
325.000m
324.000m
323.000m
12
13
9f
10
9g
9e
9i
7c
9b
7b
8a
9a
5
8b
20
128
4
106
ⅣE2b
ⅣD3e
7a
7a
9j
Ⅱa群土器
Ⅱb群土器
Ⅲ群土器
尖頭器
磨石D
0
(1：100)
5m
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l
m
n
o
9
4
5
6
(試掘トレ)
13
10
12
20
128
7
8

第22図　遺物集中部6



第23図　遺物集中部７

遺物集中部７（第23図）

[位置・分布]やや傾斜のあるⅢＤ１ｅグリッドに集中している。標高324.500m付近に垂直分布ピークを持ち、上下の分散は少ない。

[遺物]Ⅲ群土器２点、尖頭器１点、磨石Ｄ３点の計６点で構成される。分布域周辺の単独出土遺物はⅢ群土器、石鏃、剥片である。石器製作残滓は出土していない。

[時期]縄文時代前期前半に形成されたと考えられる。

第８表　遺物集中部７組成表

石材	Ⅰ群土器	Ⅱa群土器	Ⅱb群土器	Ⅲ群土器	Ⅳ群土器	尖頭器	石鏃	石匙	掻器	削器	楔形石器	石核	剥片	砕片	特殊磨石	磨石D	合計
				2													2
黒色頁岩３						1											1
花崗岩																2	2
砂　岩																1	1
合　計				2		1										3	6

3 遺　　物

（1）縄　文　土　器（第24～27図、写真図版９～13）

縄文早期～前期・晩期の土器が出土している。完形まで復元できる資料はなく、すべて破片資料である。Ⅰ群土器（早期前葉）２点、Ⅱａ群土器（早期後葉）105点、Ⅱｂ群土器（早期末）11点、Ⅲ群土器（前期前半）128点、Ⅳ群土器（晩期）16点出土している。

Ⅰ群土器の１、２は押型文系土器である。日計式相当と考えられる。

Ⅱａ群土器は赤御堂式相当で繊維を含まないか、わずかに含む表裏縄文土器である。胎土に小礫、砂粒が見られることも特徴である。器厚は６～９㎜の範囲に多い。０段多条を多様している。３～13は同一個体と考えられる。内外面とも附加条ＬＲ縄文を施文し、口唇部に指頭状圧痕、口縁部に撚糸圧痕が見られる。口縁部は個体数が少ないものの、２条を単位と圧痕文で口縁部文様帯を形成し、横方向と斜方向の施文で鋸歯状のモチーフを描出していると考えられる。遺物集中４・６からまとまって出土している。

Ⅱｂ群は早稲田５類相当で繊維を多く含む表裏縄文土器である。やや薄手の資料もあるが、Ⅱａ群土器に比べて繊維混入量が圧倒的に多く厚手である。遺物集中５でまとまって出土しているが、主体は単独出土資料である。21は外面に非結束羽状縄文を施文している。

Ⅲ群土器は前期前半の土器を一括したが、繊維を多量に含む尖底土器が出土している。０段多条が主体である。遺物集中部２・３で多く出土している。27～30は同一個体で口縁部には結節回転文が見られ、胴部には幅３㎝程度のＬＲ縄文を横位に施文している。31は尖底部でＬＲ縄文を施す。胎土は27～30に似るが同一個体ではない。34～36は同一個体でＬＲ縄文を施す。39～42は同一個体で口縁部に結節回転文を施す。43は尖底部で39～42と類似の胎土である。44は剥落が著しいが、押引沈線を横走させている口縁部片で、早稲田６類相当である。45～47は結節回転文を施す。52・53はⅢ群に含めたが、繊維の混入が明確でない。52については早期前葉の可能性を指摘いただいている。

Ⅳ群土器はⅡ層（表土）～Ⅲ層下部で出土しており、集中部を形成していない。54・55は同一個体で大洞A′式の壺形土器の口縁部と胴部である。56～68は粗製土器である。

（2）石　　器（第28～31図、写真図版14～17）

石器は大半がⅥ層で出土し、早期～前期に位置づけられる。尖頭器４点、石鏃５点、石匙２点、掻器２点、削器２点、楔形石器１点、石核２点、剥片38点、砕片９点、特殊磨石５、磨石７点が出土している。剥片石器は頁岩製が主体で、礫石器には砂岩、安山岩、閃緑岩が利用されている。

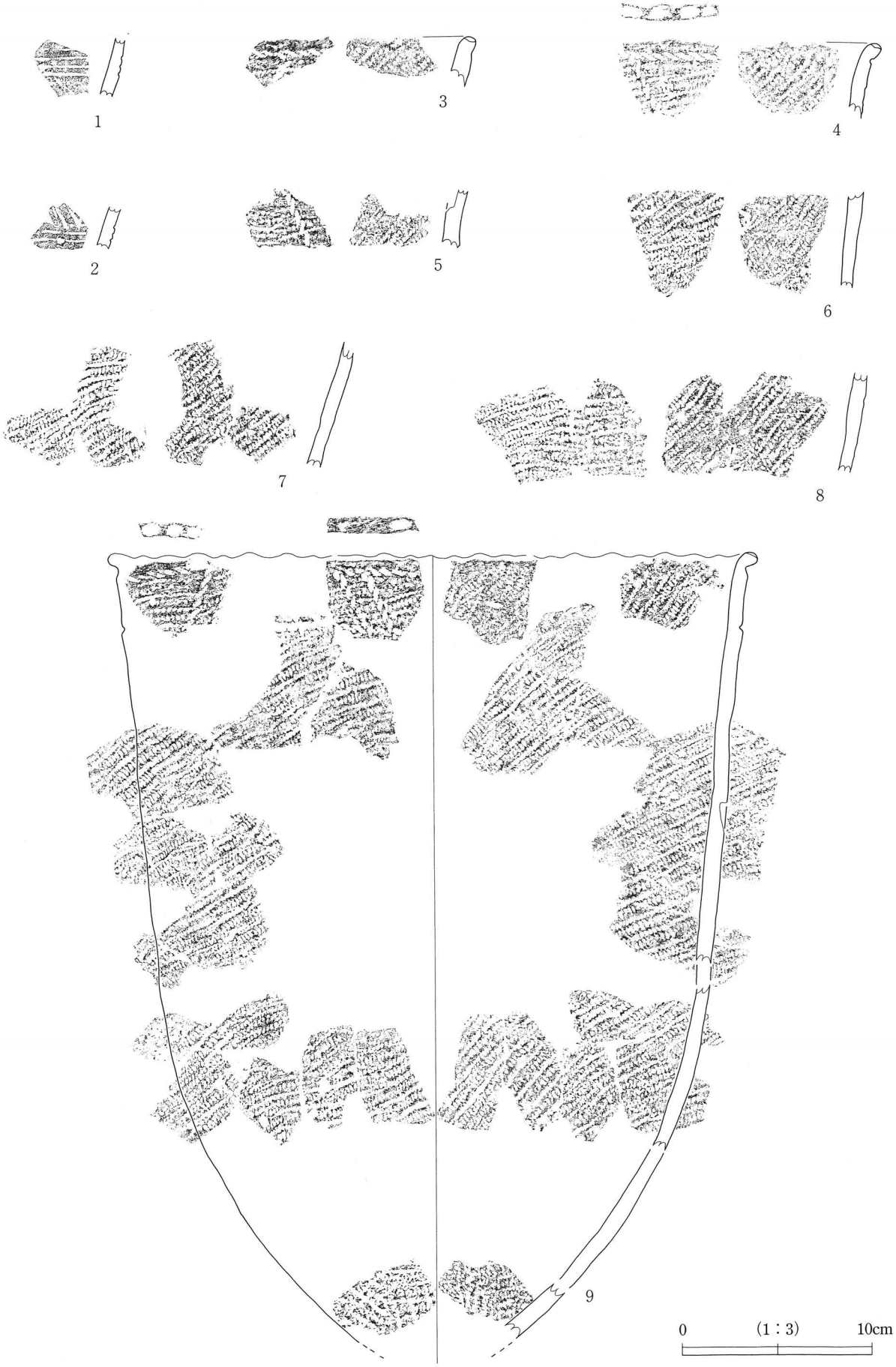
第９表　縄文時代遺物組成表

石材	Ⅰ群土器	Ⅱa群土器	Ⅱb群土器	Ⅲ群土器	Ⅳ群土器	尖頭器	石鏃	石匙	掻器	削器	楔形石器	石核	剥片	砕片	特殊磨石	磨石D	合計
遺物集中部１	2			6		1											9
遺物集中部２		1		57			1	1					3				63
遺物集中部３		3		22		1	2		1	1	1	1	29	8	1	1	71
遺物集中部４		12	2	4											1		19
遺物集中部５		9	3														12
遺物集中部６		72	2	8												1	83
遺物集中部７				2		1										3	6
遺物集中外		8	4	29	16	1	2	1	1	1		1	6	1	3	2	76
合　計	2	105	11	128	16	4	5	2	2	2	1	2	38	9	5	7	339

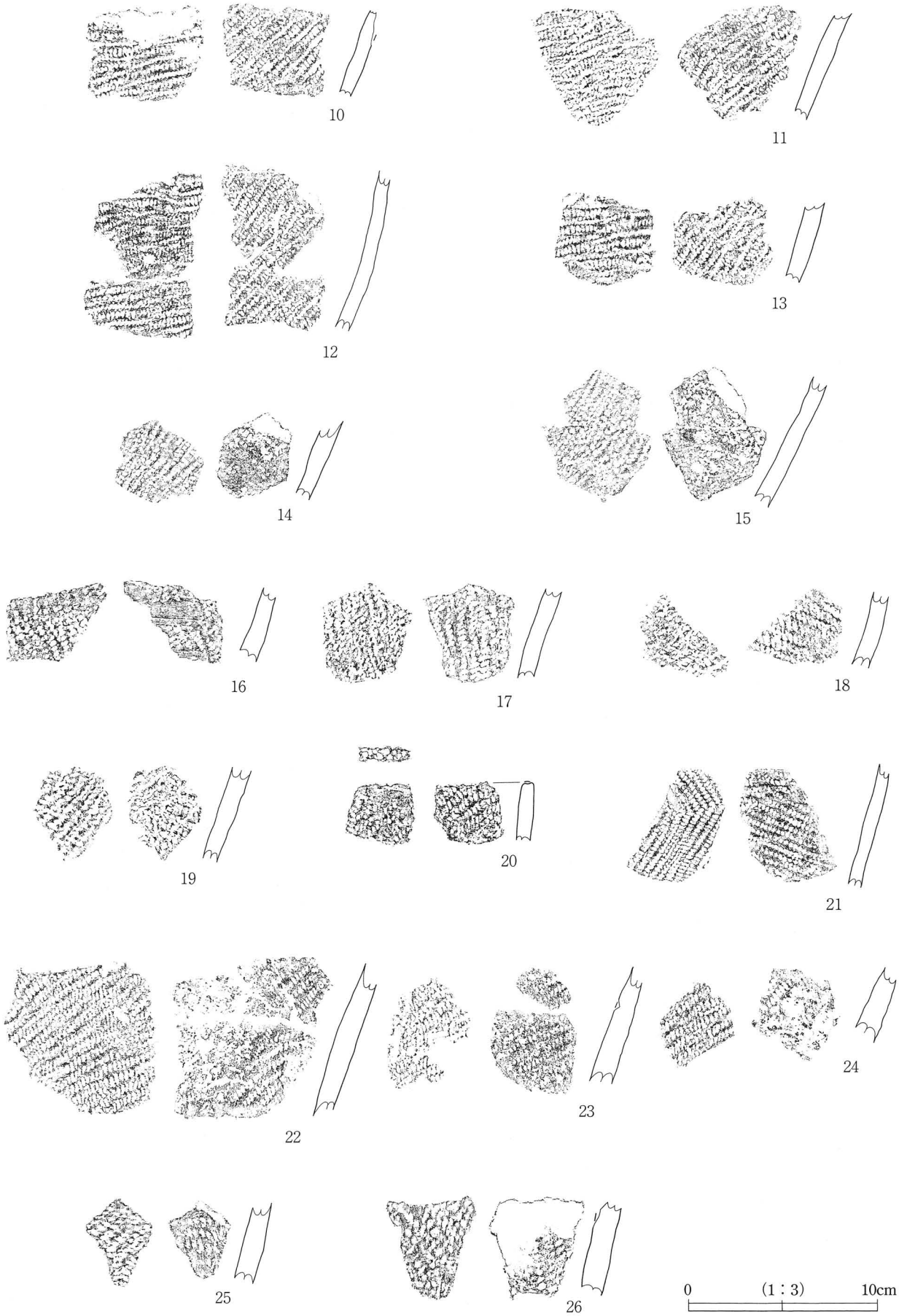
第10表　石器・石材組成表

	尖頭器	石鏃	石匙	掻器	削器	楔形石器	石核	剥片	砕片	特殊磨石	磨石D	点数合計	重量合計
黒色頁岩1	1 3.94					1 4.26		18 22.65	4 0.81			24	31.66
黒色頁岩2								1 20.57				1	20.57
黒色頁岩3	1 38.94			1 19.47				1 5.06				3	63.47
頁岩1								2 1.05				2	1.05
頁岩2								2 1.52				2	1.52
頁岩3								1 0.6				1	0.6
頁岩4			1 10.52					3 5.01				4	15.53
頁岩5									1 0.44			1	0.44
頁岩6		1 1.36						1 0.39	1 0.28			3	2.03
頁岩7								1 8.7				1	8.7
頁岩8								1 2.15				1	2.15
頁岩9				1 23.3			1 6.45	5 16.62	3 1.73			10	48.1
頁岩10		1 2.39										1	2.39
頁岩11			1 13.73									1	13.73
頁岩12		1 1.01										1	1.01
頁岩13					1 4.53							1	4.53
頁岩14	1 1.42											1	1.42
頁岩15		1 0.89										1	0.89
頁岩16					1 4.91							1	4.91
頁岩17							1 27.24					1	27.24
花崗岩											1 243.03	1	243.03
安山岩											3 1119.56	3	1119.56
砂岩										2 1329.98	4 2081.69	6	3411.67
閃緑岩										2 787.65		2	787.65
凝灰岩1								1 5.15				1	5.15
チャート1								1 8.34				1	8.34
チャート2		1 1.4										1	1.4
チャート3	1 15.01											1	15.01
点数合計 重量合計	4 59.31	5 7.05	2 24.25	2 42.77	2 9.44	1 4.26	2 33.69	38 97.81	9 3.26	4 2117.63	8 3444.28	77	5843.75

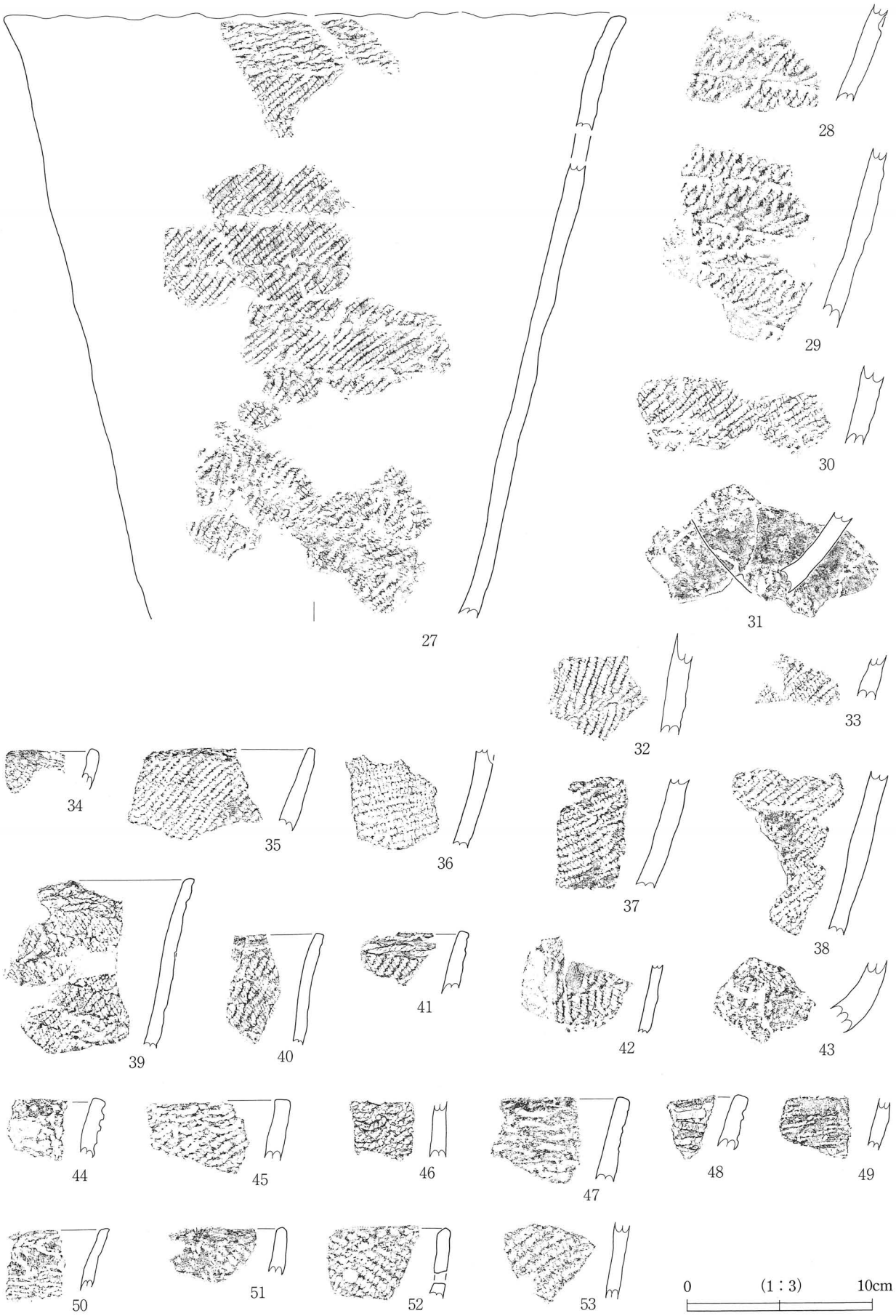
上段：点数
下段：重量（g）



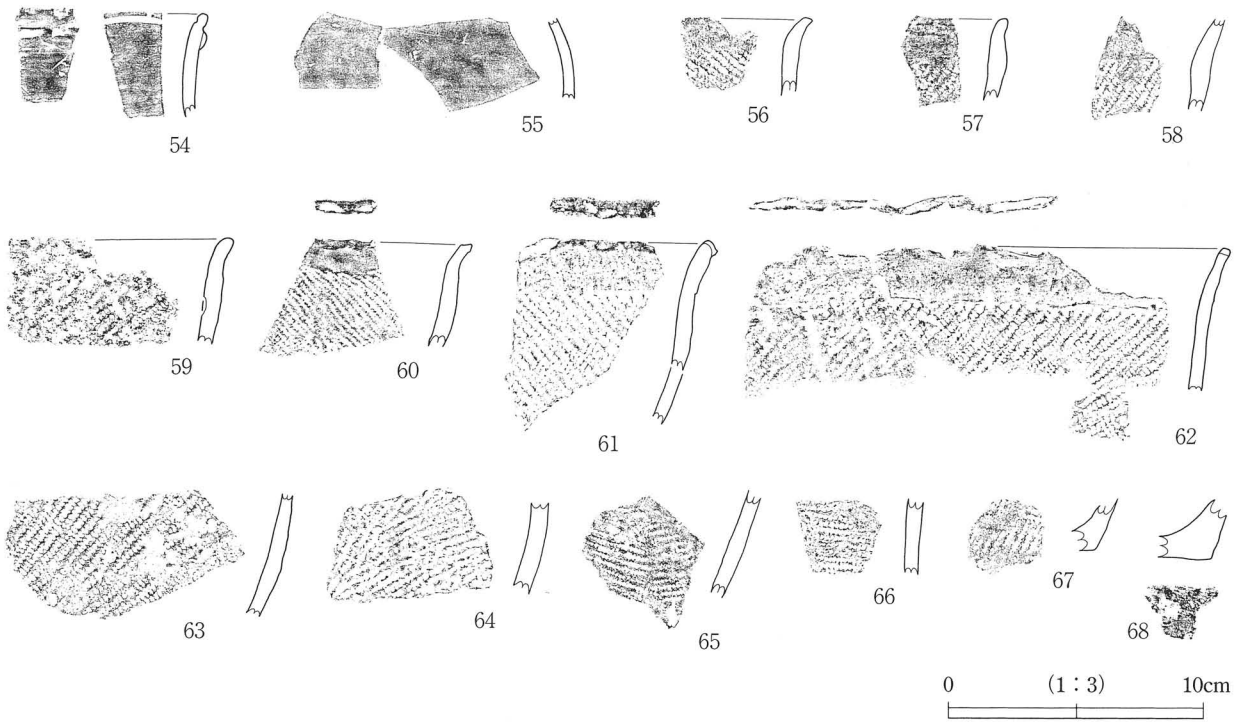
第24図　縄文土器1（Ⅰ・Ⅱa群）



第25図　縄文土器２（Ⅱａ・Ⅱｂ群）



第26図　縄文土器３（Ⅲ群）



第27図　縄文土器４（Ⅳ群）

狩猟具は石鏃と尖頭器が出土している。101～104･105は石鏃で、104･105は尖基鏃である。102･104･105はⅢ群土器主体の遺物集中部２・３から出土している。106～109は尖頭器である。106はチャート製で表面左側縁部と裏面右側縁部に調整が見られる。108は黒色頁岩１製で先端部を欠損する。遺物集中３出土である。109は黒色頁岩３製で先端部を欠損する。遺物集中７出土。

スクレイパー類では石匙、掻器、削器が出土している。110は頁岩４製の石匙で縦型である。111は遺物集中部２出土の石匙で横型である。112・113は掻器で、112は上下両端部に刃部を形成している。114・115は削器で刃部の磨耗が見られる。

116は楔形石器で右側面を折断されている。117は両極打撃によって消費の進行した石核である。118～120・122は黒色頁岩１の剥片で尖頭器製作に伴うものと考えられる。

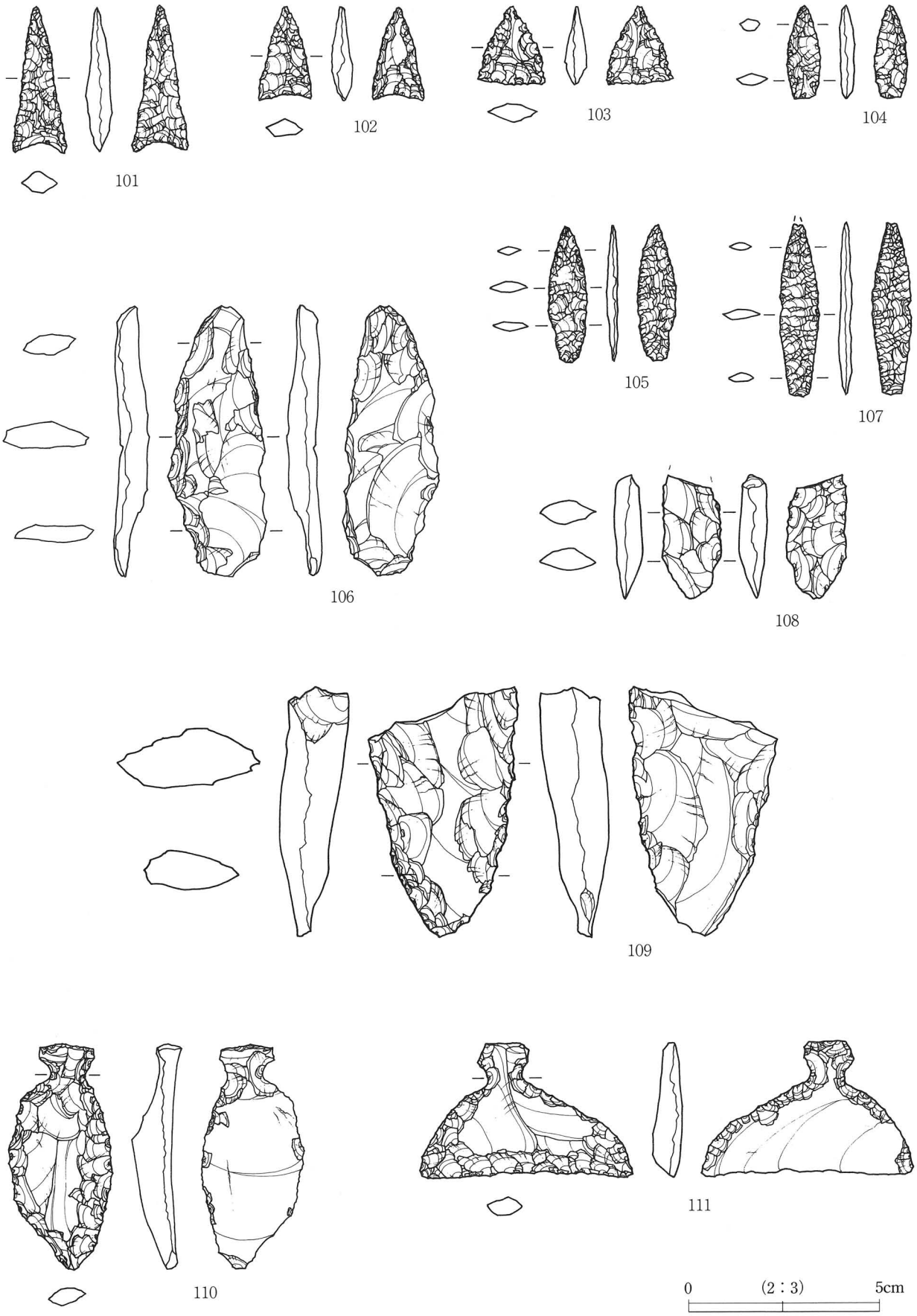
礫石器は特殊磨石（123～127）と磨石Ｄ類（128～132）が出土した。124は３号竪穴住居跡カマド芯材として転用されていた。磨面は正面１面のみである。125は正面上下両端から器体整形と思われる調整を施す。磨面は両側面に有する。128は遺物集中６出土で破片である。132は遺物集中部７出土で、裏面に黒色付着物が見られる。

（３）土　師　器（第32図、写真図版18）

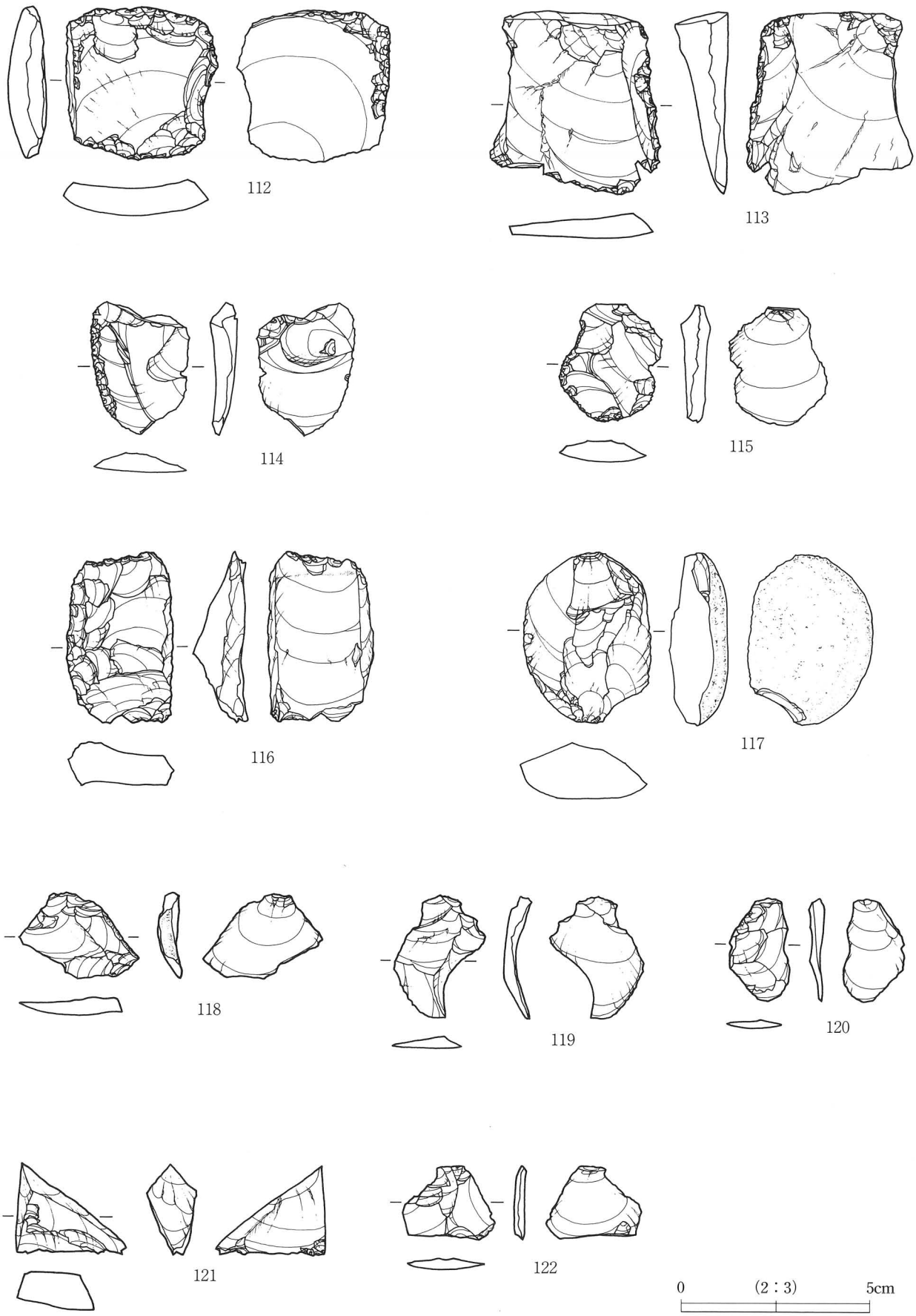
82点出土し、２号竪穴住居跡で５個体、３号竪穴住居跡で４個体の計９個体の小形甕に集約される。２号竪穴住居跡出土資料はナデ調整を基本とし、201には底部へラナデ調整、202・203・205の底部には木葉痕が見られる。201～203は球胴に近い形態である。３号竪穴住居跡出土資料にはケズリ調整が見られる。207は口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、胴下部ケズリ調整が見られる。

（４）その他の遺物

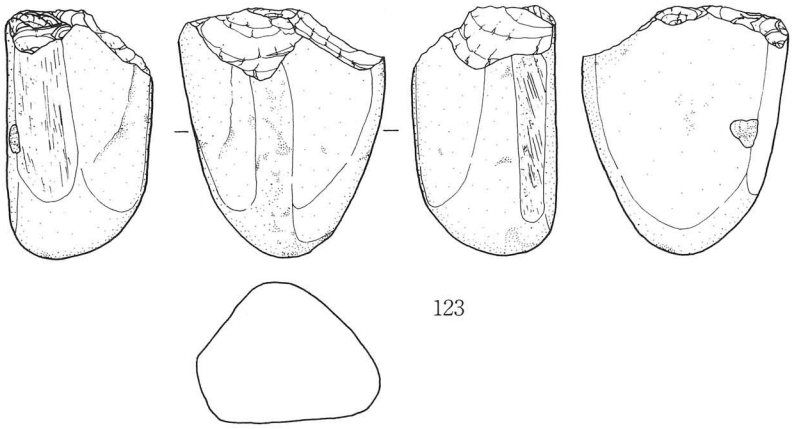
２号竪穴住居跡から炭化物、炭化種実（Ⅴ章１節参照）、３号竪穴住居跡からは水晶製の砕片、炭化物、骨片が出土している。

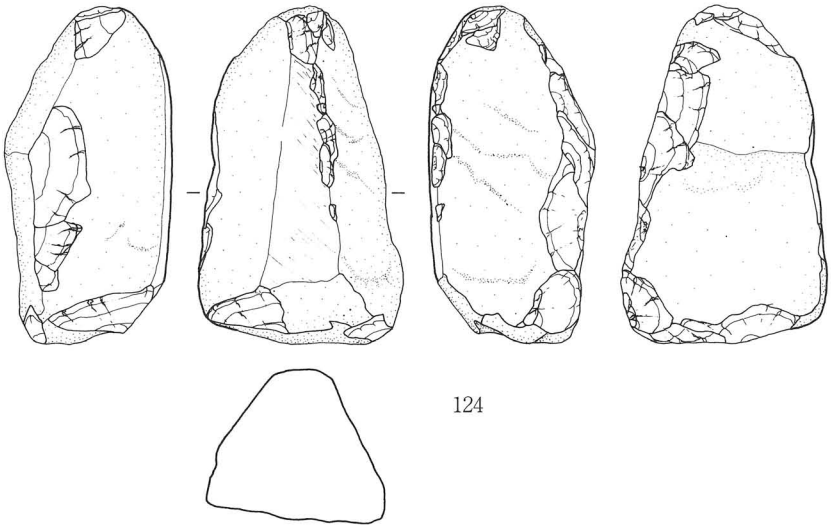


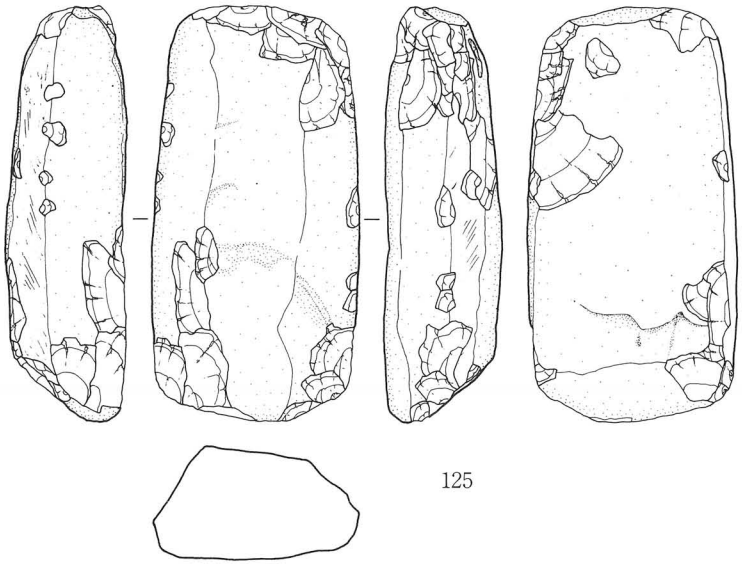
第28図　石器１

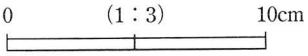


第29図　石器 2

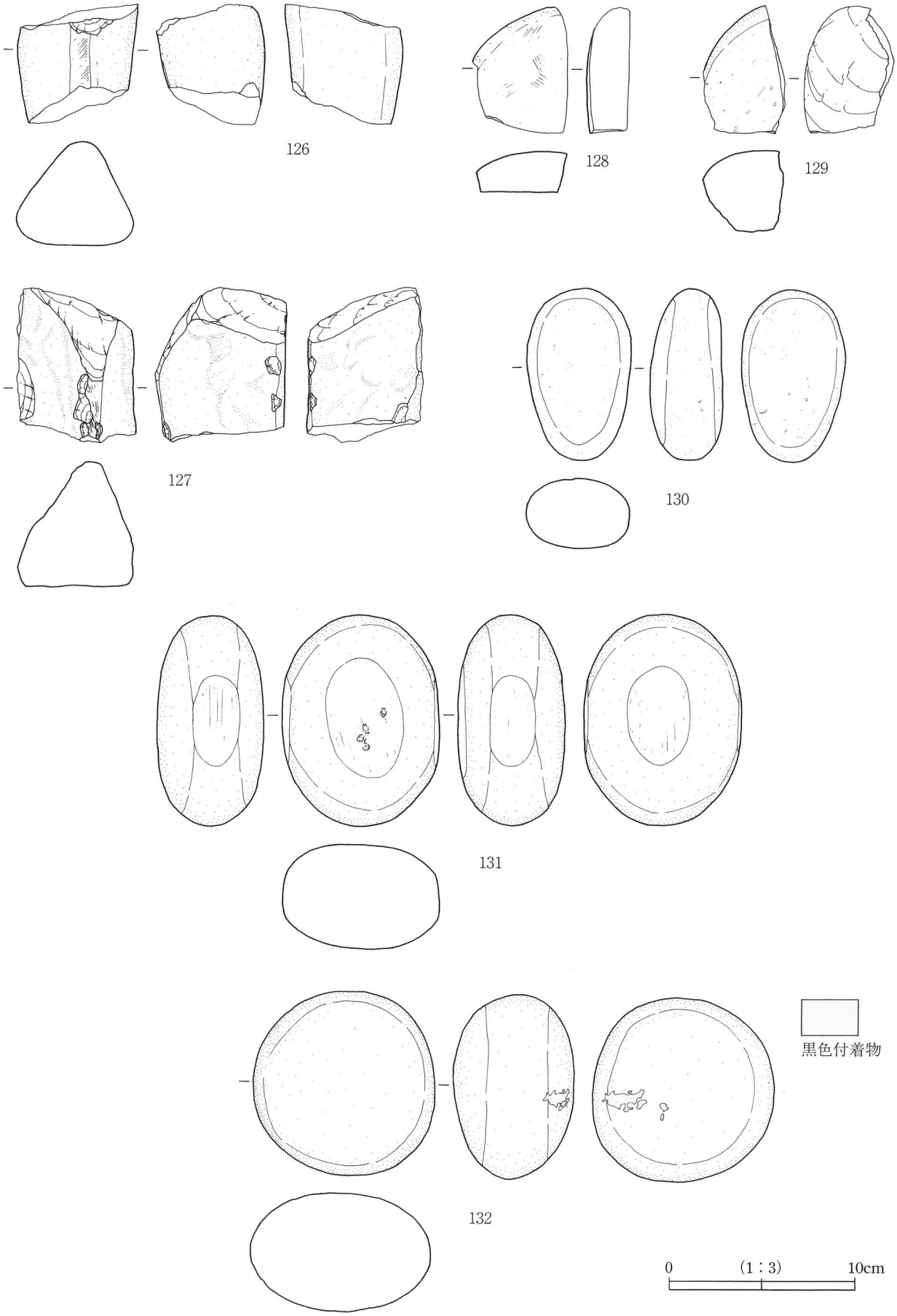




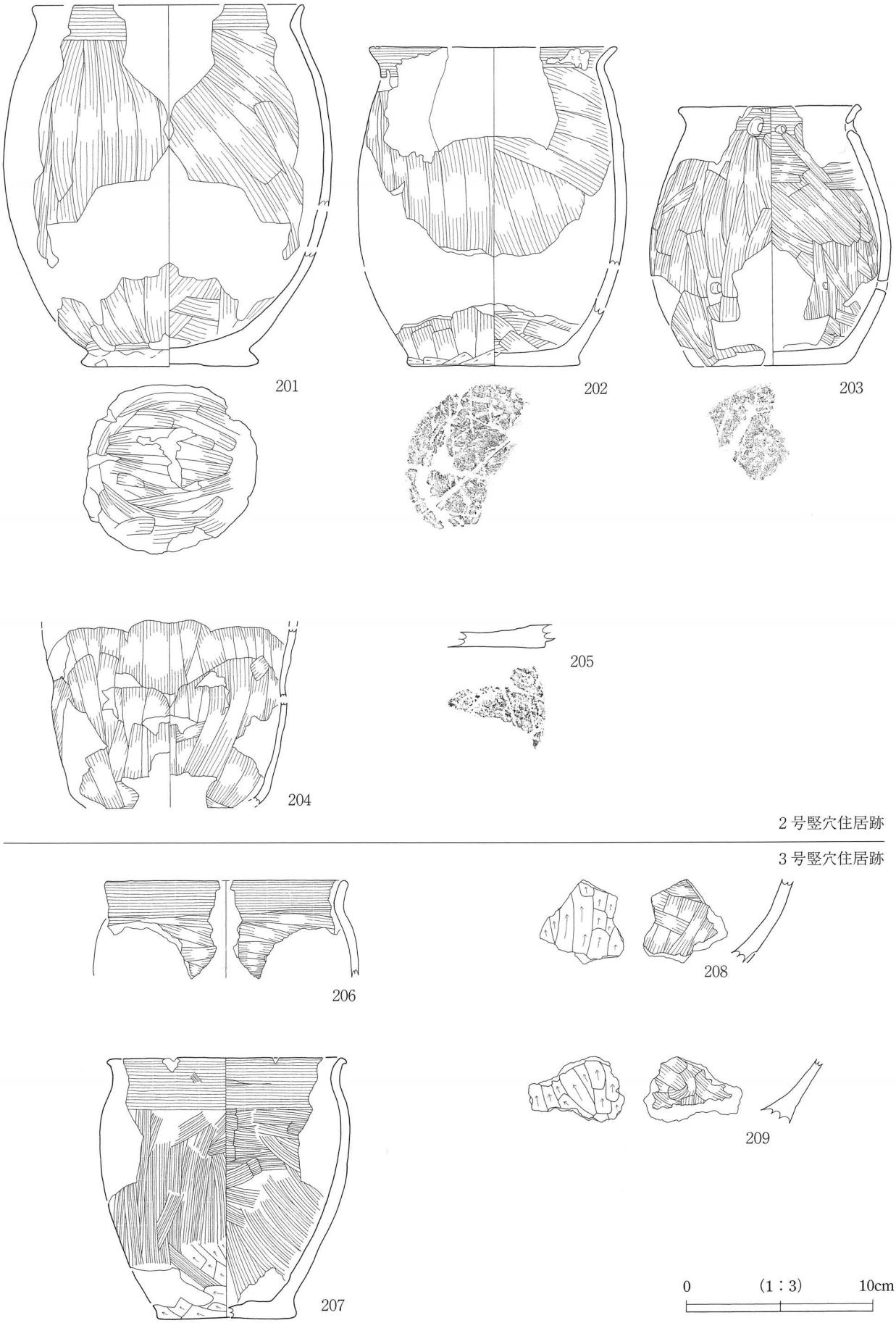




第30図　石器 3



第31図　石器 4



第32図　土師器

第11表　縄文土器観察表①

掲載		類型	層位:遺構	グリッド	座標			文様・調整	胎土			備考
					X	Y	Z		砂粒	小礫	繊維	
1	1	Ⅰ	Ⅵ層:集中1	ⅣB4b	−3872.848	84025.118	324.410	押型文	微量			
2	2	Ⅰ	Ⅵ層:集中1	ⅣB3b	−3871.481	84025.161	324.467	押型文	微量			
3	3	Ⅱa	Ⅵ層	VE1e	−3863.487	84079.248	323.590	口唇部: 指頭状圧痕、 口縁部: 撚糸圧痕、 内外面付加条 LR(0段多条) ＋LR	微量	少	微量	
4	4	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣE2a	−3867.814	84080.828	323.508	口唇部: 指頭状圧痕、 口縁部: 撚糸圧痕、 内外面付加条 LR(0段多条) ＋LR	微量	少	微量	
5	5	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣE2a	−3865.184	84080.630	323.457	口唇部: 指頭状圧痕、 口縁部: 撚糸圧痕、 内外面付加条 LR(0段多条) ＋LR	微量	少量	微量	
6	6	Ⅱa	試掘トレ					内外面付加条 LR(0段多条) ＋LR	微量	少量	微量	
7	7	Ⅱa	Ⅵ層:集中4	ⅣD3e	−3871.983	84079.763	322.633	内外面付加条 LR(0段多条) ＋LR	微量	少量	微量	
	7	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣD2e	−3865.291	84078.237	322.793					
	7	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣD2e	−3864.206	84079.177	322.675					
8	8	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣE2a	−3865.173	84080.406	322.686	内外面付加条 LR(0段多条) ＋LR	微量	少量	微量	
	8	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣD2e	−3865.334	84079.469	323.575					
9	9	Ⅱa	Ⅵ層:集中4	ⅣE5a	−3879.025	84080.691	322.224	口唇部: 指頭状圧痕、 口縁部: 撚糸圧痕、 内外面付加条 LR(0段多条) ＋LR	微量	少量	微量	推定器高: 43.0cm 推定口径: 33.8cm 推定容量: 20.03ℓ
	9	Ⅱa	Ⅵ層:集中4	ⅣE5a	−3879.723	84082.379	323.058					
	9	Ⅱa	Ⅵ層:集中4	ⅣE4a	−3875.559	84080.466	323.485					
	9	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣE1a	−3865.438	84080.319	323.560					
	9	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣD2e	−3864.207	84077.585	323.760					
	9	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣD2e	−3864.672	84078.389	323.726					
	9	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣD1e	−3863.942	84078.600	323.761					
	9	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣD2e	−3864.314	84078.788	323.629					
	9	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣD2e	−3864.976	84078.084	323.560					
	9	Ⅱa	Ⅵ層	ⅣE5e	−3863.973	84080.728	323.595					
	9	Ⅱa	試掘トレ									
10	10	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣD2e	−3864.026	84077.510	323.734	内外面付加条 LR(0段多条) ＋LR	微量	少量	微量	
11	11	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣD1e	−3863.485	84078.407	323.754	内外面付加条 LR(0段多条) ＋LR	微量	少量	微量	
12	12	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣD1e	−3863.303	84079.586	322.755	内外面付加条 LR(0段多条) ＋LR	微量	少量	微量	
13	13	Ⅱa	Ⅵ層:集中6	ⅣD1e	−3863.816	84078.214	323.734	内外面付加条 LR(0段多条) ＋LR	微量	少量	微量	
14	14	Ⅱa	Ⅵ層	VD2b	−3894.486	84073.436	322.384	内外面RL	微量		微量	
15	15	Ⅱa	Ⅵ層:集中4	VE1a	−3880.703	84082.641	322.032	内外面RL	微量		微量	
	15	Ⅱa	Ⅵ層:集中4	VE1a	−3880.550	84082.797	323.028					
16	16	Ⅱb	Ⅳ層	ⅢE5b	−3855.891	84087.587	323.603	RL	微量	微量	少量	
17	17	Ⅱb	Ⅳ層:集中5	ⅣE4b	−3873.421	84085.195	322.988	RL	微量	微量	少量	器面磨耗
18	18	Ⅱb	Ⅵ層:集中5	ⅣE4b	−3873.453	84085.748	323.085	RL	微量	微量	少量	
19	19	Ⅱb	Ⅵ層:集中5	ⅣE4b	−3874.703	84086.563	323.095	RL	微量	少量	少量	
20	20	Ⅱb	Ⅵ層:集中6	ⅣD2e	−3866.058	84076.212	322.820	非結束羽状 縄文LR	微量		少量	
21	21	Ⅱb	Ⅵ層	ⅣE3b	−3870.087	84086.372	323.162	LR	微量	微量	少量	
22	22	Ⅱb	Ⅵ層	VD2d	−3887.917	84075.164	321.758	LR	微量	少量	少量	
23	23	Ⅱb	Ⅵ層	VD2d	−3887.486	84075.200	322.858	LR	微量	少量	少量	
24	24	Ⅱb	Ⅳ層	VD2d	−3887.896	84075.616	322.848	LR	微量	少量	少量	
25	25	Ⅱb	Ⅵ層	ⅣE5a	−3879.806	84081.359	322.171	LR	微量	少量	少量	

第12表　縄文土器観察表②

掲載		類型	層位:遺構	グリッド	座標			文様・調整	胎土			備考
					X	Y	Z		砂粒	小礫	繊維	
26	26	Ⅱb	Ⅵ層:集中6	ⅣD3d	−3868.729	84076.493	322.829	LR	微量	少量	少量	
27	27	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5b	−3878.090	84044.171	324.328	口縁部: 結節回転文 胴部:LR LR(0段多条)	微量		少量	推定口径: 31.4㎝
	27	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3877.753	84043.268	324.235					
	27	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3877.810	84043.396	324.238					
	27	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3877.862	84043.160	324.242					
	27	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3877.922	84042.954	324.255					
	27	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3878.047	84043.101	323.597					
	27	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3877.832	84043.224	323.683					
	27	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3878.072	84043.346	323.664					
	27	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3878.480	84043.856	323.590					
	27	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3878.424	84043.909	323.586					
	27	Ⅲ	Ⅵ層	ⅣF5e	−3878.193	84116.014	323.598					
	27	Ⅲ	Ⅵ層	ⅣF5e	−3878.365	84116.090	323.650					
28	28	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5b	−3877.033	84044.156	323.805	LR(0段多条)	微量	少量	少量	
	28	Ⅲ	Ⅵ層:集中3	ⅣC5e	−3878.592	84058.835	323.805					
29	29	Ⅲ	Ⅳ層:集中2	ⅣC5a	−3877.055	84042.478	323.858	LR(0段多条)	微量	少量	少量	
	29	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3877.004	84043.947	323.805					
	29	Ⅲ	Ⅳ層:集中3	ⅣC4c	−3875.698	84049.282	324.065					
30	30	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3877.607	84043.360	324.271	LR(0段多条)	微量	少量	少量	
	30	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3878.231	84042.962	323.682					
31	31	Ⅲ	Ⅵ層	ⅣB4e	−3872.870	84031.408	323.142	LR(0段多条)	微量	少量	少量	尖底
	31	Ⅲ	Ⅵ層	ⅣB4e	−3872.221	84031.536	323.158					
32	32	Ⅲ	Ⅵ層:集中3	VD1a	−3881.089	84060.018	323.508	LR(0段多条)	微量		少量	
33	33	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3878.325	84042.952	323.668	LR(0段多条)	微量		少量	
34	34	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3876.418	84040.262	322.867	LR(0段多条)	微量		少量	
35	35	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣB5e	−3876.302	84039.269	322.971	LR(0段多条)	微量		少量	
36	36	Ⅲ	表採					LR(0段多条)	微量		少量	
37	37	Ⅲ	Ⅵ層	ⅢE5a	−3838.547	84082.287	325.482	LR(0段多条)	微量		少量	
38	38	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣB5e	−3877.941	84039.903	323.750	LR(0段多条)	微量		少量	
39	39	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5b	−3876.314	84044.109	324.444	口縁部: 結節回転文 胴部: LR(0段多条)	微量		少量	
	39	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5b	−3877.652	84044.053	324.330					
	39	Ⅲ	Ⅳ層:集中3	VC1d	−3880.307	84053.519	323.742					
40	40	Ⅲ	Ⅵ層	ⅣB4e	−3873.723	84031.064	323.021	LR(0段多条)	微量		少量	尖底
41	41	Ⅲ	Ⅱ層					LR(0段多条)	微量		少量	
42	42	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5b	−3878.953	84044.837	324.277	LR(0段多条)	微量		少量	
	42	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3878.524	84040.396	323.715					
43	43	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3876.613	84043.925	324.356	LR(0段多条)	微量		少量	
44	44	Ⅲ	Ⅳ層:集中2	ⅣC5c	−3877.630	84044.745	323.912	押引沈線			微量	
45	45	Ⅲ		ⅣE2a	−3864.460	84081.747	322.650	結節回転文	微量		少量	
46	46	Ⅲ	Ⅵ層	ⅢE3b	−3852.757	84085.937	323.857	結節回転文	微量		少量	
47	47	Ⅲ	Ⅵ層:集中3	VD1a	−3881.382	84060.232	323.470	結節回転文	少量	少量	少量	
48	48	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3877.577	84043.779	324.265	結節回転文	微量		少量	
49	49	Ⅲ	Ⅵ層	ⅢE1a	−3859.680	84087.831	323.567	結節回転文	微量		少量	
50	50	Ⅲ	Ⅳ層:集中3	ⅣC5c	−3879.297	84048.352	323.841	LR	微量		少量	
51	51	Ⅲ	Ⅵ層	ⅣD5b	−3893.080	84082.597	322.428	LR?	微量		少量	器面磨耗
52	52	Ⅲ	Ⅵ層:集中2	ⅣC5a	−3877.804	84042.075	323.568	LR	微量			穿孔あり
53	53	Ⅲ	Ⅵ層:集中3	ⅣC5e	−3879.210	84059.390	323.512	LR(0段多条)	微量			
54	54	Ⅳ	表採					口縁部沈線 ミガキ	微量			
55	55	Ⅳ	Ⅲ層	ⅢE5b	−3857.312	84087.206	323.651	ミガキ	微量			
	55	Ⅳ	Ⅲ層	ⅢD4e	−3855.528	84079.352	324.045					
56	56	Ⅳ	Ⅲ層	ⅣE4a	−3872.714	84081.913	323.567	RLR	微量			
57	57	Ⅳ	Ⅱ層					LR	微量			
58	58	Ⅳ	Ⅲ層	ⅢD5b	−3878.680	84065.166	323.742	LR	微量			
59	59	Ⅳ	Ⅱ層					LR	少量			
60	60	Ⅳ	Ⅲ層	ⅢE5b	−3857.820	84087.463	323.934	RL	少量			
61	61	Ⅳ	Ⅱ層					RL	少量			
62	62	Ⅳ	Ⅲ層	ⅡD5e	−3838.167	84078.836	325.528	LR	少量			
	62	Ⅳ	Ⅲ層	ⅡD5e	−3839.242	84078.691	325.438					
63	63	Ⅳ	Ⅵ層	ⅢE4c	−3852.400	84088.227	324.103	LR	少量			
64	64	Ⅳ	Ⅱ層					LR	少量			
65	65	Ⅳ	Ⅲ層	VD1d	−3882.020	84075.005	323.239	LR	少量			
66	66	Ⅳ	Ⅵ層	ⅡD4e	−3834.505	84077.954	325.519	LR	少量			
67	67	Ⅳ	Ⅲ層	ⅣD5a	−3882.281	84060.806	323.607	RL	少量			底部
68	68	Ⅳ	Ⅱ層						少量			底部

第13表　石器観察表

掲載	器種	層位:遺構	グリッド	座標			長	幅	厚	重量	石材	先端角
				X	Y	Z	(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
101	石鏃	Ⅵ層	ⅡD3e	−3830.649	84077.566	326.240	3.89	1.45	0.68	2.39	Sh10	32°
102	石鏃	Ⅲ層:集中3	ⅣC5d	−3879.943	84053.183	323.839	2.49	1.39	0.51	1.36	Sh6	48°
103	石鏃	Ⅵ層	ⅢD5e	−3856.572	84079.207	322.823	2.08	1.73	0.55	1.40	Ch2	
104	石鏃	Ⅵ層:集中2	ⅣC5b	−3878.560	84045.471	323.635	2.48	0.87	0.38	0.89	Sh15	
105	石鏃	Ⅵ層:集中3	ⅣC5d	−3877.662	84054.570	323.910	3.58	0.99	0.31	1.01	Sh12	
106	尖頭器	Ⅵ層	ⅣE3a	−3870.255	84080.711	323.431	7.21	2.48	0.91	15.01	Ch3	51°
107	尖頭器	Ⅵ層:集中1	ⅣB4b	−3872.148	84025.623	323.838	4.58	1.00	0.37	1.42	Sh14	28°
108	尖頭器	Ⅵ層:集中3	ⅣC5e	−3877.514	84056.421	323.894	3.31	1.56	0.70	3.94	BSh1	
109	尖頭器	Ⅵ層:集中7	ⅢD1e	−3840.539	84077.998	324.691	6.62	3.91	1.77	38.94	BSh3	
110	石匙	Ⅵ層	ⅢE3b	−3849.243	84084.789	324.195	6.03	2.73	1.25	13.73	Sh11	
111	石匙	Ⅳ層:集中2	ⅣC5a	−3876.730	84041.483	323.872	3.59	5.51	0.75	10.52	Sh4	
112	掻器	Ⅳ層	ⅢE2c	−3846.431	84089.659	323.382	4.06	3.95	1.04	19.47	BSh3	
113	掻器	Ⅵ層:集中3	ⅣC5d	−3879.028	84055.877	323.735	4.85	4.22	1.42	23.30	Sh9	
114	削器	Ⅵ層:集中3	VD1a	−3881.382	84060.232	323.470	3.53	2.58	0.69	4.91	Sh16	
115	削器	Ⅵ層	VD1b	−3895.377	84078.292	322.327	3.13	2.67	0.74	4.53	Sh13	
116	両極剥片	Ⅲ層:集中3	ⅣD5a	−3878.116	84060.859	323.898	4.55	2.81	1.38	16.00	BSh1	
117	石核	表採					4.57	3.34	1.54	27.24	Sh17	
118	剥片	Ⅵ層:集中3	ⅣC5e	−3879.149	84057.633	323.807	2.29	3.19	0.58	2.86	BSh1	
119	剥片	Ⅵ層:集中3	VC1e	−3880.894	84056.802	323.733	3.23	2.51	0.69	2.20	BSh1	
120	剥片	Ⅵ層:集中3	ⅣC5e	−3877.951	84056.303	323.865	2.72	1.71	0.36	1.16	BSh1	
121	剥片	Ⅵ層	ⅣD1d	−3863.065	84074.525	322.851	2.41	2.88	1.15	5.06	BSh3	
122	剥片	Ⅵ層:集中3	ⅣC5e	−3879.640	84056.674	323.785	1.97	2.46	0.31	1.34	BSh1	
123	特殊磨石	Ⅵ層	ⅢE3a	−3851.445	84083.563	324.109	9.92	8.12	5.65	571.36	S.S	
124	特殊磨石	3号住	VC2e	−3884.250	84058.610	323.193	13.40	8.02	6.58	758.62	S.S	
125	特殊磨石	Ⅵ層:集中3	VC5e	−3876.816	84056.226	323.858	16.45	8.12	4.55	889.54	S.S	
126	特殊磨石	Ⅵ層	ⅥD3b	−3909.664	84065.395	320.699	6.61	6.38	5.82	286.59	Dio	
127	特殊磨石	Ⅵ層:集中4	VE1a	−3881.434	84081.282	323.039	8.43	6.35	7.12	501.06	Dio	
128	磨石D	Ⅵ層:集中6	ⅣE2a	−3866.072	84082.251	322.566	6.91	5.05	2.27	118.13	S.S	
129	磨石D	Ⅵ層	ⅡD4e	−3835.207	84076.644	325.245	7.00	4.45	4.71	176.41	S.S	
130	磨石D	Ⅳ層	ⅢE5e	−3857.472	84081.933	323.740	9.38	5.60	3.94	277.48	An	
131	磨石D	Ⅳ層:集中3	ⅣC4c	−3875.463	84049.979	324.094	11.42	8.55	5.71	842.08	An	
132	磨石D	Ⅵ層:集中7	ⅡD5e	−3838.014	84078.593	325.043	10.01	9.85	6.47	897.61	S.S	

頁岩：Sh、黒色頁岩：BSh、メノウ：Ag、安山岩：An、凝灰岩：Tuff、閃緑岩：Dio、
砂岩：S.S、礫岩：Cong、チャート：Ch、ホルンフェルス：Ho

第14表　土師器観察表

掲載	器種	層位:遺構	グリッド	調整		口径	底径	器高	容量	備　考
				外面	内面	(cm)	(cm)	(cm)	(ℓ)	
201	甕	2号竪穴住居跡2層	VC9c	ナデ	ナデ	14.7	9.8	19.9	2.96	底面ヘラナデ
202	甕	2号竪穴住居跡2層	ⅣB10h	ナデ・ケズリ	ナデ	13.4	9.4	17.5	1.75	底面木葉痕
203	甕	2号竪穴住居跡2層	ⅣB10j	ナデ	ナデ	9.7	8.5	14.1	0.95	底面木葉痕、穿孔2ヵ所
204	甕	2号竪穴住居跡2層	ⅣC8d	ナデ	ナデ					
205	甕	2号竪穴住居跡2層	ⅣC9a							底面木葉痕
206	甕	3号竪穴住居跡6層	ⅣB10i	ナデ	ナデ	13.1				
207	甕	3号竪穴住居跡6層	VB1h	ナデ　ハケメ　ケズリ	ナデ　ハケメ	12.9	7.6	14.2	1.11	
208	甕	3号竪穴住居跡6層	VB5g	ケズリ	ナデ					
209	甕	3号竪穴住居跡6層	VB5e	ケズリ	ナデ					

Ⅴ　分析・鑑定

1　千足南遺跡２号竪穴住居跡より出土した炭化種実

吉川純子（古代の森研究舎）

（1）試料と方法

千足南遺跡は下閉伊郡田野畑村山間部の標高約320mの緩斜面に位置する古代の集落跡である。本遺跡の２号竪穴住居の竈内土壌を水洗選別したところ、若干の炭化種実を出土したため、これらの同定分析をおこなった。

（2）結果と考察

出土した炭化種実を第15表に示す。アワの焼け膨れた種子をもっとも多く出土し、内頴がついた頴果も出土している。そのほか穀類ではキビ、ヒエを、食用ではシソ属を出土した。スギ、木本の芽は燃料材として持ち込まれ、燃焼した残存と考えられる。また、エノコログサ属、カヤツリグサ科、サデクサ、シロザ近似種は食料と共に混入種子として持ち込まれたか、燃料材に付着してきたと考えられる。

本遺跡で出土した穀類はアワが多く、ついでヒエ、キビを出土しており、イネやムギ類を出土していない。イネやムギの利用がなかったとは言えないが、おもにアワなどの雑穀を使用していたと思われる。東北地方の太平洋側という夏に冷涼になりやすい気候的特徴に加えて、山間部であり水利用が困難と言う理由から、これらの雑穀を頻繁に利用していたとも考えられる。

（3）出土分類群の形態記載

スギ（Cryptomerya japonica Thunb.）小葉は針状で断面は菱形、基部は太く先端が細く鋭く尖る。

アワ（Setaria italica Beauv.）種子は１㎜前後の球形で、基部腹面に種子長半分よりやや大きい丸い胚がある。

エノコログサ属（Setaria）種子は１㎜弱の楕円形でアワに似るが、全体に縦に長く基部が下方に突出している。

キビ（Panicum miliaceum L.）種子は約２㎜で丸く幅の広い種子長の半分を超えない大きさの胚がある。

ヒエ（Echinochloa utilis L.）種子は1.5㎜ほどで、やや角ばった球形、大きく下半部の幅が広い胚がある。

第15表　千足南遺跡２号竪穴住居跡より出土した炭化種実

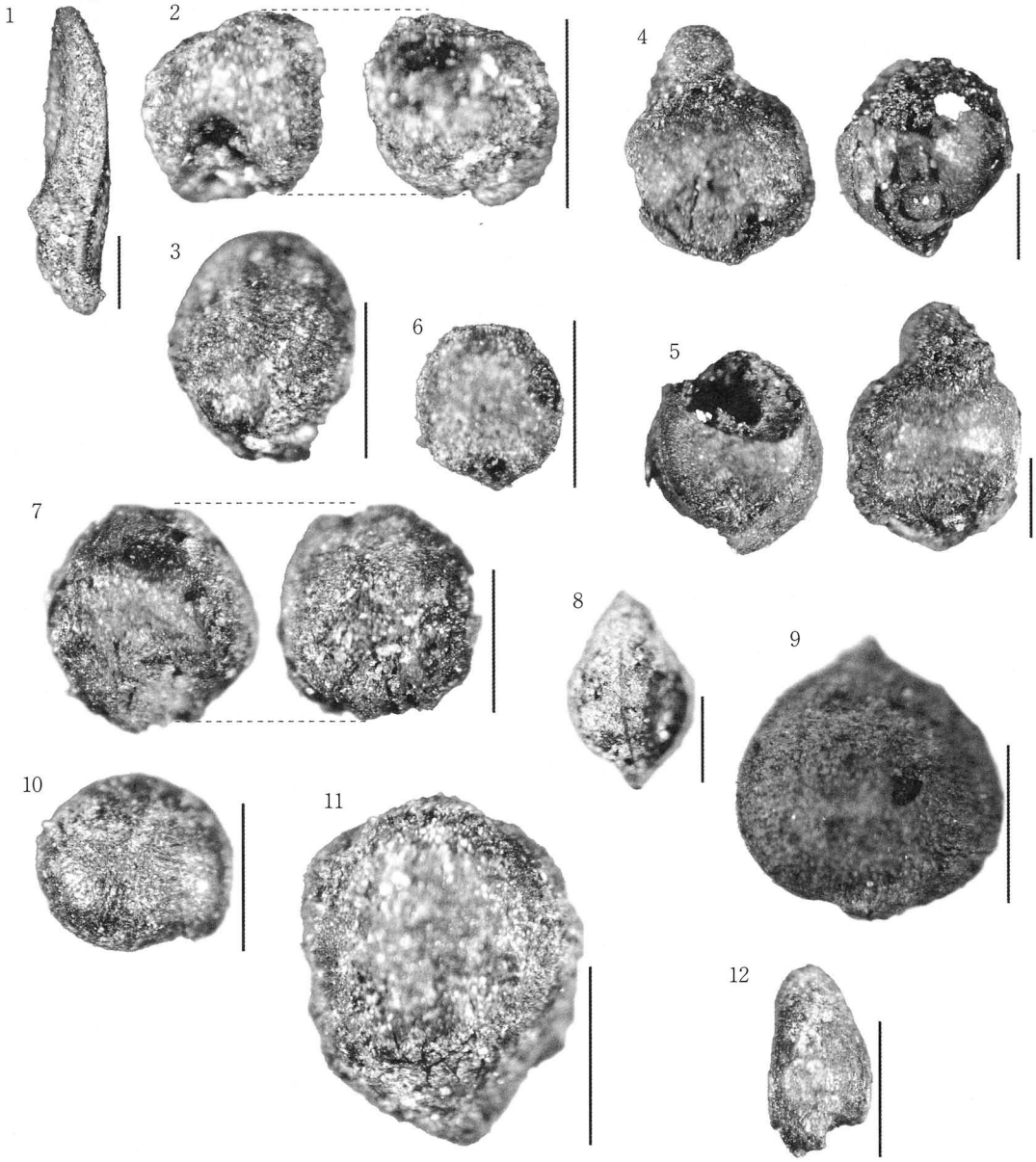
分類群	出土部位	個数
スギ	葉	1
アワ	頴果	3
	種子	149
キビ	種子	5
ヒエ	種子	11
エノコログサ属	種子	8
カヤツリグサ属	果実	1
サデクサ	果実	1
シロザ近似種	種子	1
シソ属	果実	1
木本	芽	1

カヤツリグサ科（Cyperaceae）果実は三面形で表面の細胞が四角形で規則的に並ぶ。

サデクサ（Polygonum maackianum Regel）果実は扇形の２面形で果皮が厚く、表面の細胞は多角形である。

シロザ近似種（Chenopodium cf. album L.）種子は扁平な円形でやや光沢があり、細かいしわがあり、一端にへこんだへそから中心に向って不明瞭な浅い溝がはいる。

シソ属（Perilla）果実は約２㎜の球形で下端にやや突出したへそがある。表面は浅いえぐったような大きな網目になるが、出土した果実はやや焼けが激しく一部しか観察できない。



スケールは１㎜

１：スギ、葉　　２：アワ、種子(左腹面、右背面)　　３：アワ、頴果　　４：キビ、種子背面
５：キビ、種子腹面　　６：エノコログサ属、種子　　７：ヒエ、種子(左腹面、右背面)
８：カヤツリグサ属、果実　　９：サデクサ、果実　　10：シロザ近似種、種子
11：シソ属、果実　　12：木本、芽

第33図　千足南遺跡２号竪穴住居跡より出土した炭化種実

2　年代測定結果報告

ＩＡＡ：加速器分析研究所

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。
2）ＢＰ年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
3）付記した誤差は、次のように算出しています。
　複数回（通常は４回）の測定値についてχ２検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が１つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。
4）δ13Ｃの値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、ＡＭＳ測定の場合に同時に測定されるδ13Ｃの値を用いることもあります。
　δ13Ｃ補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものです。

$$\delta 14C = [(14AS - 14AR) / 14AR] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta 13C = [(13AS - 13APDB) / 13APDB] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、　14AS：試料炭素の14Ｃ濃度：(14Ｃ/12Ｃ)Ｓまたは(14Ｃ/13Ｃ)Ｓ
　　14AR：標準現代炭素の14Ｃ濃度：(14Ｃ/12Ｃ)Ｒまたは(14Ｃ/13Ｃ)Ｒ

δ13Ｃは、質量分析計を用いて試料炭素の13Ｃ濃度（13AS＝13Ｃ/12Ｃ）を測定し、ＰＤＢ（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、ＩＡＡでは加速器により測定中に同時に13Ｃ/12Ｃも測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出したδ13Ｃを用いることもあります。この場合には表中に〔加速器〕と注記します。

また、Δ14Ｃは、試料炭素がδ13Ｃ＝−25.0（‰）であるとしたときの14Ｃ濃度（14AN）に換算した上で計算した値です。（１）式の14Ｃ濃度を、δ13Ｃの測定値をもとに次式のように換算します。

$$14AN = 14AS \times (0.975 / (1 + \delta 13C / 1000))^2 \quad (14AS\text{として}14C/12C\text{を使用するとき})$$

または

$$= 14AS \times (0.975 / (1 + \delta 13C / 1000)) \quad (14AS\text{として}14C/13C\text{を使用するとき})$$

$$\Delta 14C = [(14AN - 14AR) / 14AR] \times 1000 \ (‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしないδ14Ｃに相当するＢＰ年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

14Ｃ濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、ｐＭＣ（percent Modern Carbon）がよく使われており、Δ14Ｃとの関係は次のようになります。

$$\Delta 14C = (pMC/100 - 1) \times 1000 \ (‰)$$

$$pMC = \Delta 14C/10 + 100 \ (\%)$$

国際的な取り決めにより、このΔ14ＣあるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算されます。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta 14C/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (pMC/100)$$

第16表　年代測定結果

ＩＡＡ

IAA Code No.	試　　料	ＢＰ年代および炭素の同位体比
IAAA-50962	試料採取場所：岩手県下閉伊郡田野畑村字千足 試料形態：　炭化物 千足南　試料１ 試料名(番号)：(２号竪穴住居跡カマド内出土)	Libby Age (yr BP)　：1,160 ± 40 δ 13C (‰)、(加速器)　＝−31.37 ± 0.90 Δ 14C (‰)　＝−134.0 ± 4.0 pMC (%)　＝ 86.60 ± 0.40
#1012-1	(参考)　δ13Cの補正無し	δ 14C (‰)　＝−145.3 ± 3.6 pMC (%)　＝ 85.47 ± 0.36 Age (yr BP)　：1,260 ± 30
IAAA-50963	試料採取場所：岩手県下閉伊郡田野畑村字千足 試料形態：　炭化物 千足南　試料２ 試料名(番号)：(２号竪穴住居跡出土)	Libby Age (yr BP)　：1,160 ± 40 δ 13C (‰)、(加速器)　＝−27.55 ± 0.76 Δ 14C (‰)　＝−134.8 ± 4.2 pMC (%)　＝ 86.52 ± 0.42
#1012-2	(参考)　δ13Cの補正無し	δ 14C (‰)　＝−139.4 ± 3.9 pMC (%)　＝ 86.06 ± 0.39 Age (yr BP)　：1,210 ± 40
IAAA-50964	試料採取場所：岩手県下閉伊郡田野畑村字千足 試料形態：　炭化物 千足南　試料３ 試料名(番号)：(３号竪穴住居跡カマド内出土)	Libby Age (yr BP)　：1,170 ± 40 δ 13C (‰)、(加速器)　＝−27.47 ± 0.71 Δ 14C (‰)　＝−135.8 ± 3.8 pMC (%)　＝ 86.42 ± 0.38
#1012-3	(参考)　δ13Cの補正無し	δ 14C (‰)　＝−140.2 ± 3.6 pMC (%)　＝ 85.98 ± 0.36 Age (yr BP)　：1,210 ± 30
IAAA-50965	試料採取場所：岩手県下閉伊郡田野畑村字千足 試料形態：　骨 千足南　試料４ 試料名(番号)：(３号竪穴住居跡床面出土)	Libby Age (yr BP)　：　280 ± 30 δ 13C (‰)、(加速器)　＝−22.45 ± 0.71 Δ 14C (‰)　＝ −34.8 ± 3.9 pMC (%)　＝−96.52 ± 0.39
#1012-4	(参考)　δ13Cの補正無し	δ 14C (‰)　＝ −29.8 ± 3.7 pMC (%)　＝ 97.02 ± 0.37 Age (yr BP)　：　240 ± 30

参考：IAAA-50965の骨に関しましては、規定どおりのコラーゲン抽出方法で得られた物質を測定した結果になります。

3　千足南遺跡出土の火山灰について

弘前大学・理工学部・地球環境学科
柴　正敏

千足南遺跡より採集された、火山灰サンプル（７試料）について、以下の観察・分析を行った。これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表１に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる（町田・新井、2003）。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザー（以下ＥＰＭＡ）が用いられるようになってきた。本報告では、１試料（試料№６）の火山ガラスについてＥＰＭＡ分析を行った（表２）。使用したＥＰＭＡは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製ＪＸＡ－8800ＲＬ、使用条件は加速電圧15ｋＶ，試料電流３×10－９アンペアである。補正計算はＺＡＦ法に従った。

偏光顕微鏡観察によれば、これら７試料は２つのタイプに分けられる（表１）：

（１）斜長石、単斜輝石、斜方輝石、石英、黒雲母、ホルンブレンド、鉄鉱からなり、火山ガラスの形態は「バブルウォール型」と「軽石型」からなり、褐色ガラスを含まない。岩片（径1.0～2.0㎜）や軽石粒子（径～1.0㎜）を含む。これらは、試料１，２，３，４及び５の５試料。珪長質の火砕岩起源と考えられる。

（２）斜長石、単斜輝石、斜方輝石、石英、黒雲母、ホルンブレンド、鉄鉱からなり、火山ガラスの形態は「バブルウォール型」と「軽石型」からなり、褐色ガラスを少量含む。岩片（径1.0～2.0㎜）や軽石粒子（径～1.0㎜）を含む。これらは、試料６及び７の２試料。珪長質の火砕岩起源と考えられる。試料６の褐色ガラスについてＥＰＭＡ分析を行った（表２）。分析ポイント数は少ないが、既存の十和田ａのガラス組成データ（青木・新井、2000；柴ほか、2001）と類似する。

第17表　千足南遺跡出土火山灰

試料No	出土地点	層位	ガラス及び鉱物	ガラスの帰属	特記事項
1	２号住居跡埋土上部		ガラス（bw、pm）、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石、黒雲母、鉄鉱	基盤	
2	基本土層	第Ⅴ層	ガラス（pm）、褐色ガラス（少量）、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石、ホルンブレンド、黒雲母、鉄鉱	基盤、（To-a）	軽石の発泡度は普通。
3	東壁セク	Ⅱ層上部	ガラス（bw、pm）、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石、黒雲母、鉄鉱	基盤	岩片（径1.0～1.5㎜）を含む。
4	東壁セク	Ⅲｂ層	ガラス（bw、pm）、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石、黒雲母、鉄鉱	基盤	岩片（径1.0～2.0㎜）を含む。
5	東壁セク	Ⅳ層	ガラス（pm）、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石、黒雲母、鉄鉱	基盤	ガラスはごく僅か。
6*	東壁セク	Ⅴ層上部	ガラス（pm）、褐色ガラス（少量）、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石、ホルンブレンド、黒雲母、鉄鉱	基盤、（To-a）	岩片（径1.0～1.5㎜）を含む。
7	東壁セク	Ⅴ層下部	ガラス（bw、pm）、褐色ガラス（少量）、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石、黒雲母、鉄鉱	基盤、（To-a）	

pm：軽石型、bw：バブルウォール型、To-a：十和田ａテフラ、＊ＥＰＭＡ分析を行った試料。

（引用文献）

青木かおり・新井房夫(2000)、三陸沖海底コアＫＨ94-３、ＬＭ-８の後期更新世テフラ層序。
第四紀研究、第39巻、107-120。

町田　洋・新井房夫(2003)、新編火山灰アトラス　－日本列島とその周辺－。東京大学出版会、pp.336。

柴　正敏・中道哲郎・佐々木　実(2001)、十和田火山、降下軽石の化学組成変化　－宇樽部の一露頭を例として－。
弘前大学理工学部研究報告、第４巻、第１号、11-17。

第18表　千足南遺跡火山ガラスのEPMAデータ

十和田ａテフラ		SiO2	TiO2	Al2O3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	n	Total	EPMA
試料番号６	最小	77.25	0.13	12.36	1.34	0.03	0.31	1.83	3.96	1.44			
（東壁セク	最大	78.21	0.43	12.66	1.82	0.13	0.42	1.99	4.46	1.49			
Ｖ層上部）	平均	77.67	0.27	12.52	1.55	0.09	0.38	1.90	4.15	1.47	4	89.08	WDS
	標準偏差	0.50	0.12	0.14	0.21	0.04	0.05	0.06	0.23	0.02			
青木・新井 (2000)		77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.90	1.37	19	98.41	WDS

測定値は無水で100％になるように再計算した。FeO*全鉄をFeOとして計算した。ｎは分析の点数を表す。
ＷＤＳは、波長分散型ＥＰＭＡを表す。

４　分析結果の所見

奈良～平安時代の所産と考えられる２号竪穴住居跡ではカマド燃焼部範囲を中心に炭化物が拡散していた。これらはカマド使用に伴う燃料材や食物の残渣と考えられた。そこで、２号竪穴住居跡カマド１内土壌を採取し、古代の森研究舎に炭化種実同定分析を依頼した。結果はアワ・ヒエをはじめとする雑穀類が主体を占める構成であり、沿岸北部の山間部という立地条件を反映していると考えられる。

年代測定分析は古代の竪穴住居跡出土炭化物３点と骨片１点を加速器研究所に分析委託した。炭化物のＡＭＳ年代は1160～1170±40ｙｒBPを示し、暦年較正プログラムOxCal v3.10によれば８世紀後半～10世紀末までのやや幅の広い数値が得られおり、住居内出土遺物の年代観と誤差はない。一方、試料４の骨片については15～17世紀の年代を示し、大きく誤差が生じた。

火山灰分析は２号竪穴住居跡で検出した灰白色粒子とＶ層の同定を主たる目的として依頼した。２号竪穴住居跡の灰白色粒子は粘土化しており、火山灰の可能性が低いとされた。検出位置からカマド構築材の一部であったと考えられる。Ｖ層は田野畑村内の山間部では比較的良好な堆積を確認できる黄褐色火山灰である。沼袋遺跡では千足南遺跡とほぼ同程度の層厚で堆積が認められ、十和田中掫火山灰（To-cu：縄文時代前期）と同定されている。また、海岸段丘面に立地する和野ソマナイ遺跡でも陥し穴の埋土でTo-cuを検出している。今回のＥＰＭＡ分析では十和田ａ火山灰（To-cu）の可能性が示された。しかし、Ｖ層は出土遺物の年代観からTo-cuの可能性が高く、少なくとも古代の火山灰の可能性は低い。分析者の柴氏によれば、To-aとTo-cuの各分析元素の酸化濃度は類似する点も多く、分析結果から十和田系火山灰であることは間違いないが、酸化濃度を上げて再測定を要するとのことであった。今回の分析ではTo-aと確証の得られる試料はなく、To-cuについても不明となった。

（米田）

Ⅵ まとめ

1 遺　　構

調査遺構は、竪穴住居跡３棟、土坑４基、焼土遺構３基である。所属時期は縄文時代早期～前期と奈良～平安時代に大別される。

縄文時代については、土坑２基と焼土遺構３基を確認した。また、２ｍの範囲内に５点以上の遺物がある場所を遺物集中部とし７ヵ所認定した。遺物集中部は人類の活動による廃棄・遺棄行為か、あるいは自然の営力による堆積・集散で形成されたと見られる。

古代では奈良～平安時代の竪穴住居跡３棟と土坑１基を検出した。３棟とも１辺３ｍ未満、床面積９㎡未満の小規模な住居跡である。

（1）竪穴住居跡

a）千足南遺跡の竪穴住居跡

３棟のうち、１・２号竪穴住居跡のカマド主軸方向が北、３号竪穴住居跡では東である。一般的な傾向として北カマドは奈良期に多く、１・２号竪穴住居跡が当てはまる。また、２号竪穴住居跡出土の土師器甕はヘラナデ調整を基本とし、器形も球胴形に近いため奈良時代の土器の特徴が色濃く見られる。３号竪穴住居跡は遺物から時期を決定する根拠に乏しいものの、３号竪穴住居出土の207土師器甕は胴中央部に最大径を持つ２号竪穴住居跡出土資料と比べると、胴部上半に最大径を持ち、明らかに器形差が見られる。東カマドの存在からも平安期に下る可能性が高い。

１号竪穴住居跡は残存状態が悪く、出土遺物はない。２号竪穴住居跡は遺物の散乱状況やカマドの崩落状況、カマド燃焼部と住居中央の焼土遺構を中心とした炭化物の拡散状況などから、カマド崩落後に炭化物・遺物が北側から南方向に拡散したと考えられる。２号住居跡で特徴的だったのは礫の出土量であり、床面上から出土していたものは少なく、大型のものは住居埋土中位～下位にかけて出土していた。この現象の成因には可能性として廃絶後の捨て場としての利用、屋根材の重石としての大形礫の利用、流水や冬季の霜に伴う床面出土礫あるいはカマド芯材としての礫の上方への移動などが上げられる。柱穴は１個のみ検出できたが、柱痕跡は径30㎝と太い。３号竪穴住居跡は調査区外に未検出部分を残す。遺物出土数は少なく、カマド周辺に散在していた。

b）居住空間の比較

村内で古代の竪穴住居跡の報告例は和野Ⅰ遺跡９棟、真木沢遺跡１棟、子木地の台遺跡２棟確認されており、本遺跡の３棟を合わせると計15棟になる。和野Ⅰ遺跡では住居に伴う遺物が確認されていないため集落の存続時期は不明確だが、住居形態から奈良～平安期と考えられている。真木沢遺跡例は近現代の遺道路状遺構に削平されているため、全体形状は不明だが土師器甕片が出土している。子木地の台遺跡では３棟報告されているが、写真等で見る限り、Ｂ区２号住居とされた範囲はＢ区１号住居の貼床部範囲であり、子木地の台遺跡の調査住居跡は２棟と考えられる。この２棟とも北カマドを有する住居跡で、出土した鉄製馬具（鋏具）の年代から奈良～平安期と考えられる。

和野Ⅰ遺跡の竪穴住居跡は１辺2.8～3.9ｍの正方形プランの竪穴住居跡で構成され、床面積の最大は２号竪穴住居跡の14.3㎡である。また、子木地の台遺跡では１辺４ｍ程度、床面積はＡ区１号竪穴住居跡の15.17㎡が最大である。現在までのところ村内の古代竪穴住居跡は１辺４ｍ未満、床面積16㎡未

満で占められており小規模である。

住居内の柱穴が検出された例は和野Ⅰ遺跡で4棟と千足南遺跡1棟であるが、和野Ⅰではいずれも住居壁近くで検出されており、掘り方が25cm程度である。一方、千足南2号竪穴住居跡の柱穴は壁際ではなく、掘り方の径54cm、柱痕跡の径30cmとやや大きめである。上部構造に関する具体的な資料が出土していないため判然としないが、屋根材を支える手法に村内でもバラエティの認められる可能性が高い。

（2）土　　坑

4基を検出し、内訳は縄文時代2基、古代1基、時期不明1基である。縄文時代の土坑は円形、古代の土坑は不整形である。それらの性格は不明であるが、古代に所属する1号土坑は2号竪穴住居跡に隣接する。住居周辺に土坑を配置する例は真木沢遺跡に認められ、竪穴住居跡周辺に古代の土坑9基が確認されており、そのうち4基が断面フラスコ形を呈する。土坑内から植物遺存体は検出されていないが、これらは貯蔵穴ではないかとの指摘がなされており、住居外に貯蔵施設を設ける例として注目される。

（3）焼　土　遺　構

3基を検出し、すべて縄文時代早期～前期前半と考えられる。Ⅲ群土器を主体とする遺物集中部1・2の中間で検出した。

（4）遺 物 集 中 部

旧石器時代研究の石器集中部や礫群の認定基準を用いて、一般的な掘り込みのある遺構とは異なる操作概念上の遺構を設定した。結果、Ⅵ層に垂直分布ピークをもつ7ヵ所の遺物集中部を設定した。集中部の形成要因は道具の製作や居住活動の結果としての遺棄・廃棄痕跡のほか、自然の営力によって窪地に二次的に堆積した結果などが考えられ、短期間で形成されたものもあれば、長期にわたるものもある。今回設定した7ヵ所の遺物集中部は遺物集中部1を除けば、土器の年代から比較的短期間での形成が考えられる。また、本遺跡の遺物集中部は緩斜面上に位置し、遺物の移動・拡散は急斜面上などに比して少ないであろう。

遺物集中部出土の石器は小形石器が主体を占め、長期の居住活動の痕跡となる大形石器が見られない。したがって本遺跡は縄文時代早期～前期にかけてキャンプサイト的な場として利用されたと考えられる。遺物集中2と3、4と6は土器の接合関係が認められる。遺物集中2が土器主体なのに対し遺物集中3は石器主体で尖頭器製作が行われており、場の機能差が想定されるだろう。

2　遺　　物

遺物は小コンテナ（30×40×10cm）5箱、礫は中コンテナ（30×40×15cm）3箱分出土した。内訳は縄文土器・土師器が小コンテナ4箱（344点）、石器が小コンテナ1箱（77点）、礫が中コンテナ3箱分（89点）である。その他、竪穴住居跡から炭化種実、骨片、水晶製砕片が出土している。2・3号竪穴住居跡出土炭化物は放射性炭素年代測定を実施し（Ⅴ章2節参照）、2号竪穴住居跡のカマド内土壌から検出した炭化種実については種実同定を行っている（Ⅴ章1節参照）。

縄文土器は早期前葉～前期前半・晩期の資料で構成される。早期前葉～前期前半の土器はⅥ層に

ピークを持つ。調査区東側ではⅡａ群土器（早期後半）の出土数が多く、西側ではⅢ群土器（前期前半）がまとまっている。Ⅳ群土器（晩期）は表土直下またはⅢ層内から出土しており、粗製土器が主体である。Ⅰ群（早期前葉）は日計式押型文と考えられ、最近では久慈市中田遺跡で報告例がある。なお、縄文土器№52はⅠ群土器に伴う可能性をご指摘いただいている。Ⅱａ群は八戸市赤御堂遺跡を標式とする赤御堂式相当である。赤御堂式は繊維を含まない尖底土器で土器の内外面に縄文を施すことを特徴とするが、繊維を若干含むものを赤御堂式新段階に位置づけられており（八戸市教委1981）、本遺跡のⅡａ群も繊維を若干含むことからこの段階の所産と考えられる。Ⅱａ群はこれまで村内での報告例はないが、岩手県沿岸地域では宮古市千鶏遺跡・小堀内Ⅰ遺跡、大槌町崎山弁天遺跡、大船渡市関谷洞穴に類例がある。内陸地域では二戸市飛鳥台地遺跡、雫石町仏沢Ⅲ遺跡、住田町蛇王洞遺跡などで報告例がある。Ⅱａ群の縄文施文の主体は０段多条ＬＲで、本遺跡でもその傾向は変わりないが附加条を用いる点で異なる。附加条は後出の土器群に特徴的な施文方法であるが、今回の調査成果として早期後半でも使用が確認されたことになる。早稲田５類相当としたⅡｂ群は県内での報告が少ない。Ⅲ群は前期前半を一括したが、尖底土器を主体とする早稲田６類相当を主体とする。繊維が多量に含まれ、口縁に結節回転文や押引沈線文の施文を特徴とする。県内では二戸市飛鳥台地Ⅰ遺跡・馬立Ⅰ遺跡に良好な資料があるものの、早稲田６類報告例は少ない。

石器は大半がⅥ層で出土し、早期～前期に位置づけられる。尖頭器４点、石鏃５点、石匙２点、掻器２点、削器２点、楔形石器１点、石核２点、剥片37点、砕片９点、特殊磨石４点、磨石８点が出土している。剥片石器は頁岩製が主体で、礫石器には砂岩、安山岩、閃緑岩が利用されている。遺物集中部３は石器製作跡で、黒色頁岩１を母岩とする小形の尖頭器、剥片、砕片が出土している。石器組成上では小形石器を主体とし、居住活動の安定性を示す重量のある石皿などの石器が見られないことから、本遺跡での活動が一時的な滞在に限られる可能性があるだろう。

土師器は竪穴住居跡から出土し、２号竪穴住居跡では甕５個体、３号竪穴住居跡では甕４個体が出土している。村内での出土例は子木地の台遺跡と真木沢遺跡で破片資料の報告例があるものの村内での古代土器の様相は判然としない。本遺跡でも大まかに２号竪穴住居跡出土資料が奈良期、３号竪穴住居跡出土資料が平安期に所属する可能性を指摘するにとどめる。

引用・参考文献

田野畑村教育委員会　1985『田野畑村史』

田野畑村教育委員会　1994『子木地の台遺跡』第２集

田野畑村教育委員会　1998『真木沢Ⅰ遺跡・切牛Ⅱ遺跡』第３集

田野畑村教育委員会　2001『田野畑村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』第６集

田野畑村教育委員会　2002『田野畑村内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』第８集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1988『飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』第120集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1998『浜岩泉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』第276集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』第452集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004『和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書』第466集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006『中田遺跡発掘調査報告書』第478集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006『沼袋遺跡発掘調査報告書』第483集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006『平成17年度発掘調査報告書』第490集

八戸市教育委員会　1981『長七谷遺跡発掘調査報告書　長七谷地２・７・８号遺跡』第８集

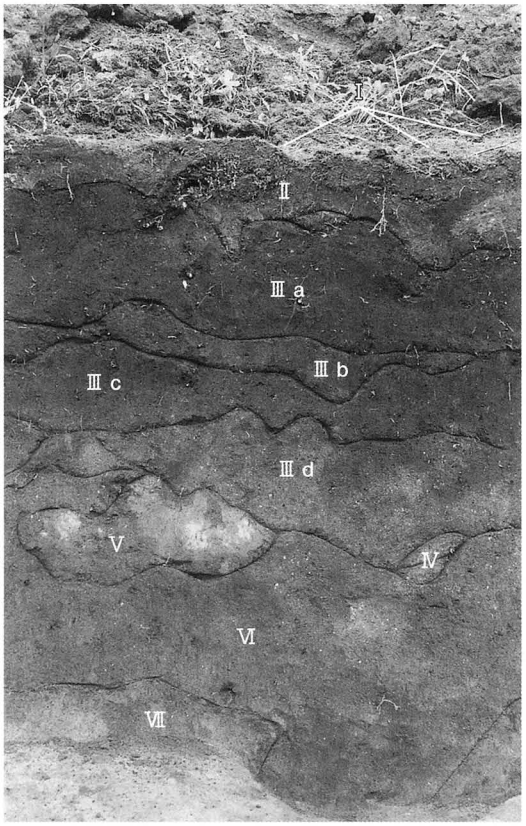
縄文文化検討会　1989『東北・北海道における縄文早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』

写　真　図　版

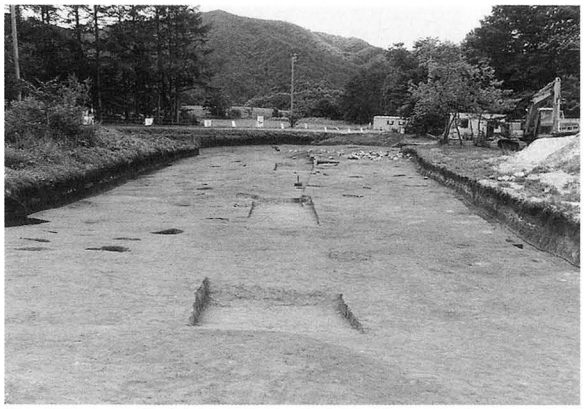
千足南遺跡遠景

千足南遺跡調査区

写真図版１　千足南遺跡



基本土層



調査区南側完掘

調査区西側完掘

1号竪穴住居跡完掘

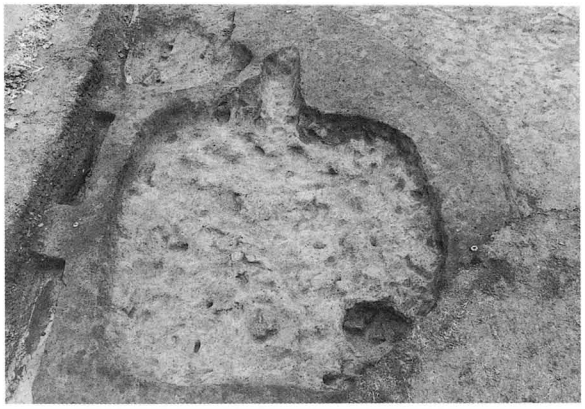
1号竪穴住居跡カマド完掘

1号竪穴住居跡カマド断面（C－C′）

1号竪穴住居跡カマド断面（D－D′）

写真図版2　基本土層、調査区完掘、1号竪穴住居跡

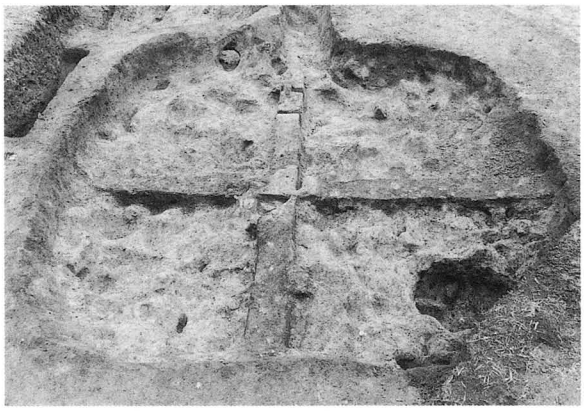
2号竪穴住居跡完掘



2号竪穴住居跡掘り方

2号竪穴住居跡断面（A－A´）

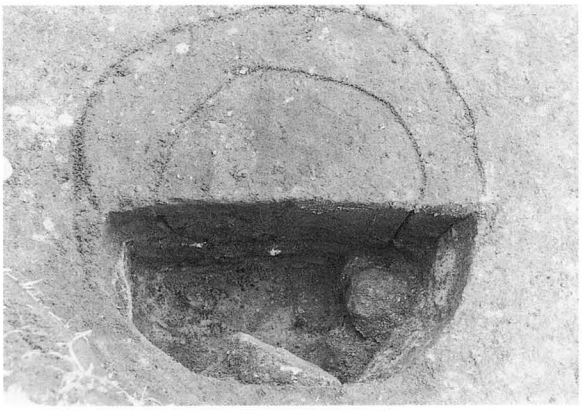
2号竪穴住居跡断面（B－B´）



2号竪穴住居跡貼床部断面（A－A´）

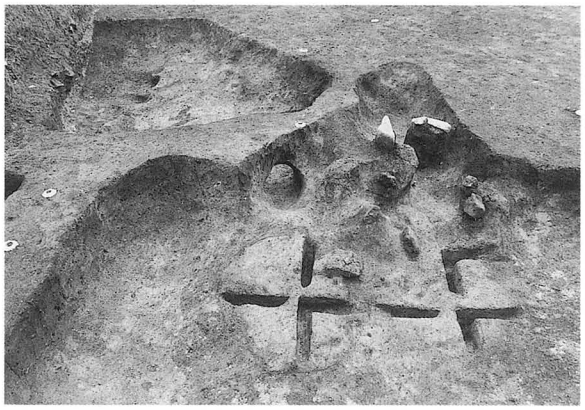
2号竪穴住居跡貼床部断面（B－B´）

2号竪穴住居跡北東部検出



2号竪穴住居跡柱穴1断面

写真図版3　2号竪穴住居跡①



2号竪穴住居跡カマド完掘

2号竪穴住居跡カマド2煙道部断面

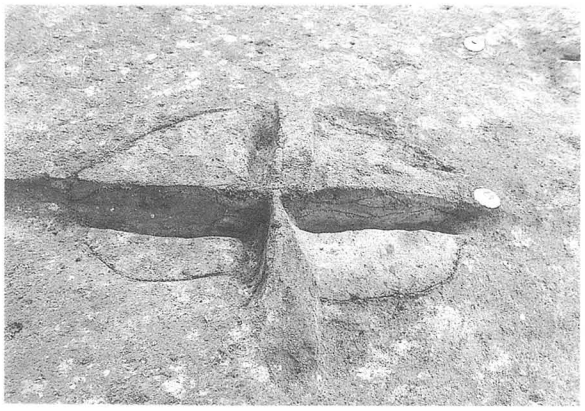
2号竪穴住居跡カマド断面（G－G´）①

2号竪穴住居跡カマド断面（G－G´）②

2号竪穴住居跡カマド断面（D－D´）

2号竪穴住居跡カマド断面（E－E´）

2号竪穴住居跡カマド焼土範囲断面

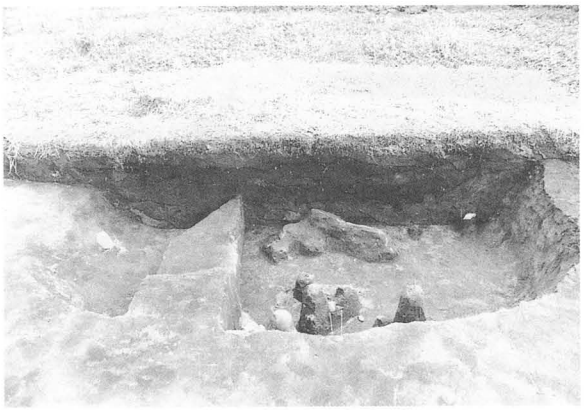


2号竪穴住居跡焼土2断面

写真図版4　2号竪穴住居跡②

3号竪穴住居跡完掘

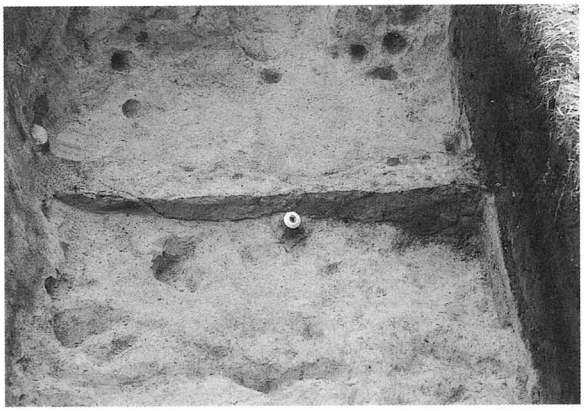
3号竪穴住居跡掘り方



3号竪穴住居跡断面（A－A´）

3号竪穴住居跡断面（B－B´）

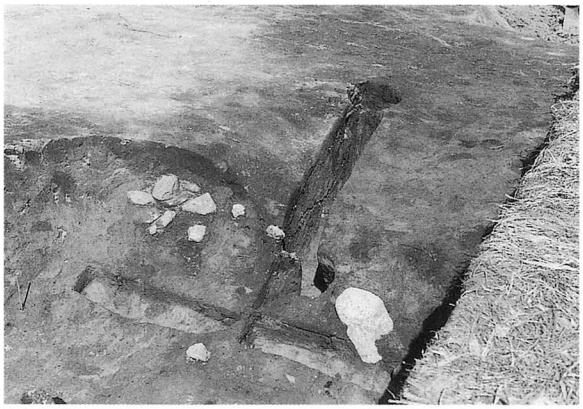
3号竪穴住居跡貼床部断面（A－A´）



3号竪穴住居跡貼床部断面（B－B´）

写真図版5　3号竪穴住居跡①

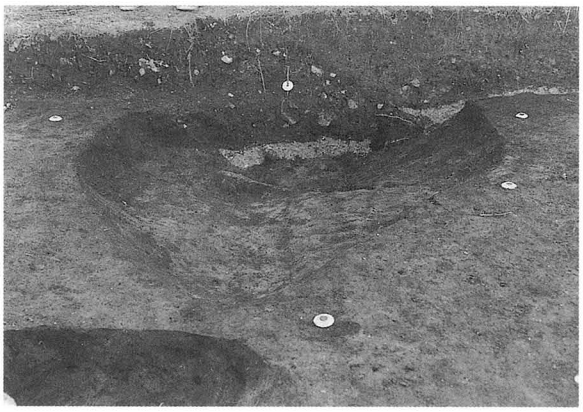
3号竪穴住居跡カマド完堀



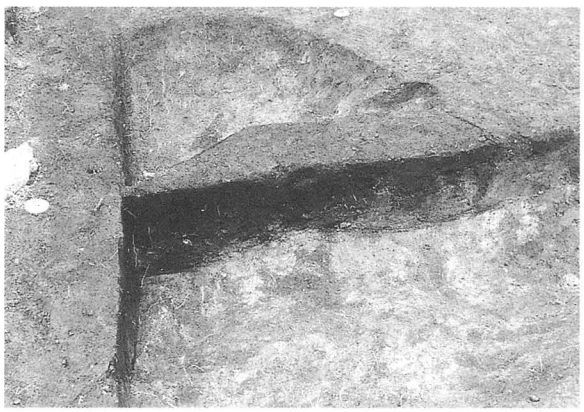
3号竪穴住居跡カマド断面（D－D′）

3号竪穴住居跡カマド断面（C－C′）

3号竪穴住居跡カマド焼土範囲断面（E－E′）

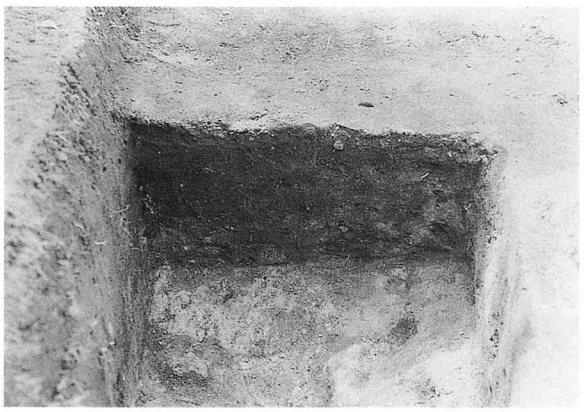


1号土坑完掘



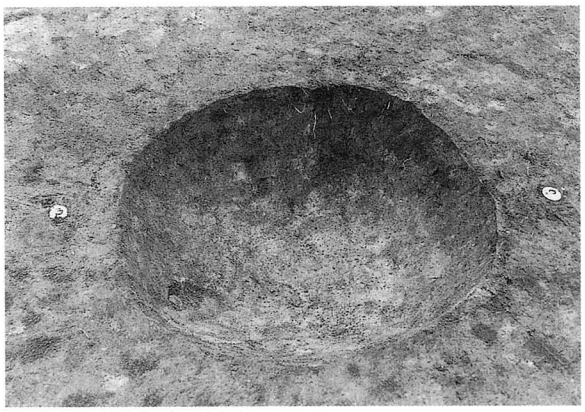
1号土坑断面

2号土坑完掘

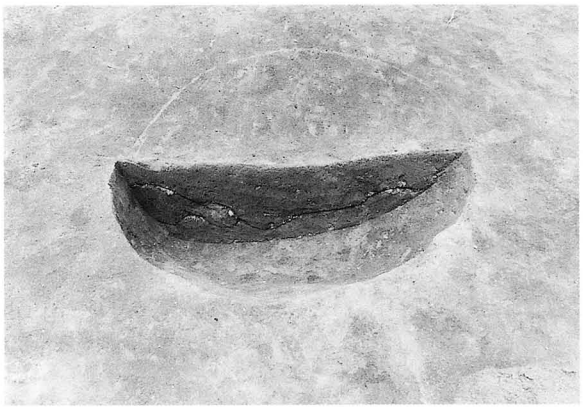


2号土坑完掘

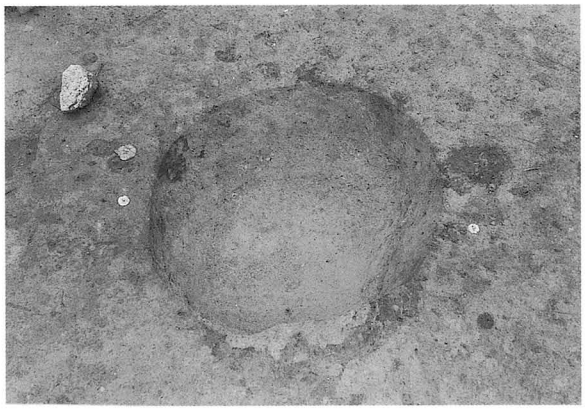
写真図版6　3号竪穴住居跡②、1・2号土坑



3号土坑完掘



3号土坑断面



4号土坑完掘

4号土坑完掘

1号焼土遺構検出

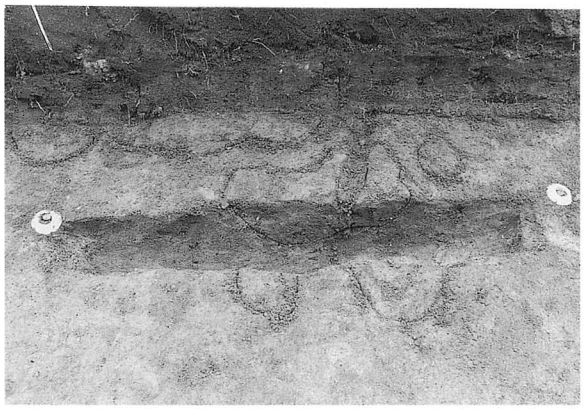
1号焼土遺構断面

2号焼土遺構検出

2号焼土遺構検出

写真図版7　3・4号土坑、1・2号焼土遺構

3号焼土遺構検出



3号焼土遺構断面

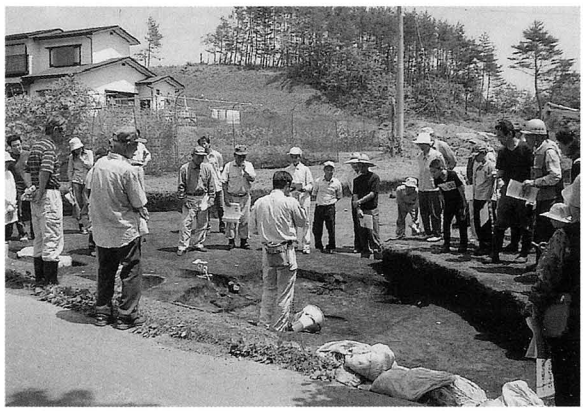
ⅣＤグリッド調査区壁

ⅢＤグリッド調査区壁

No.22 尖頭器出土状況

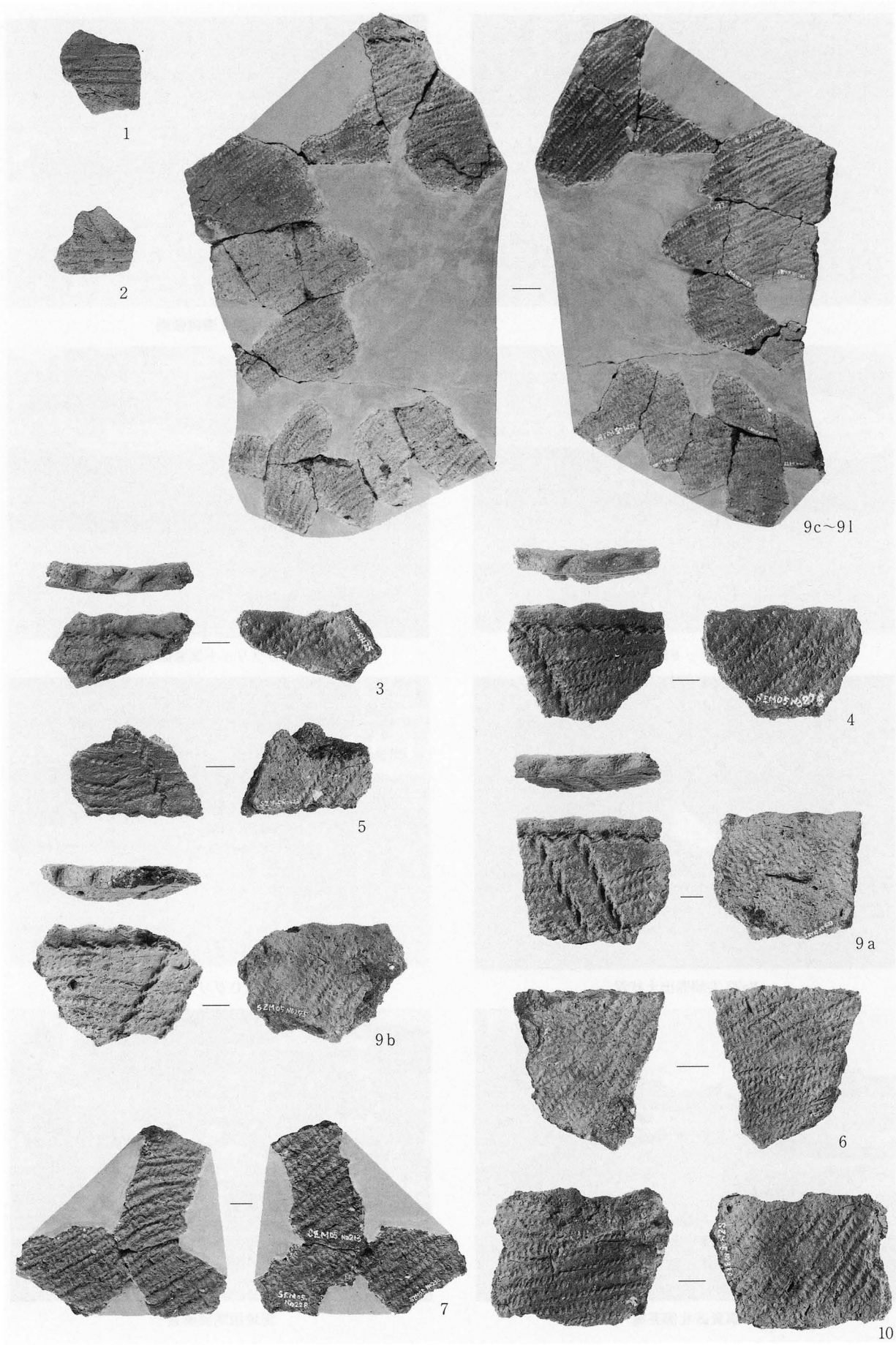
ⅤＤ・ⅥＤグリッド完掘

調査区北側完掘

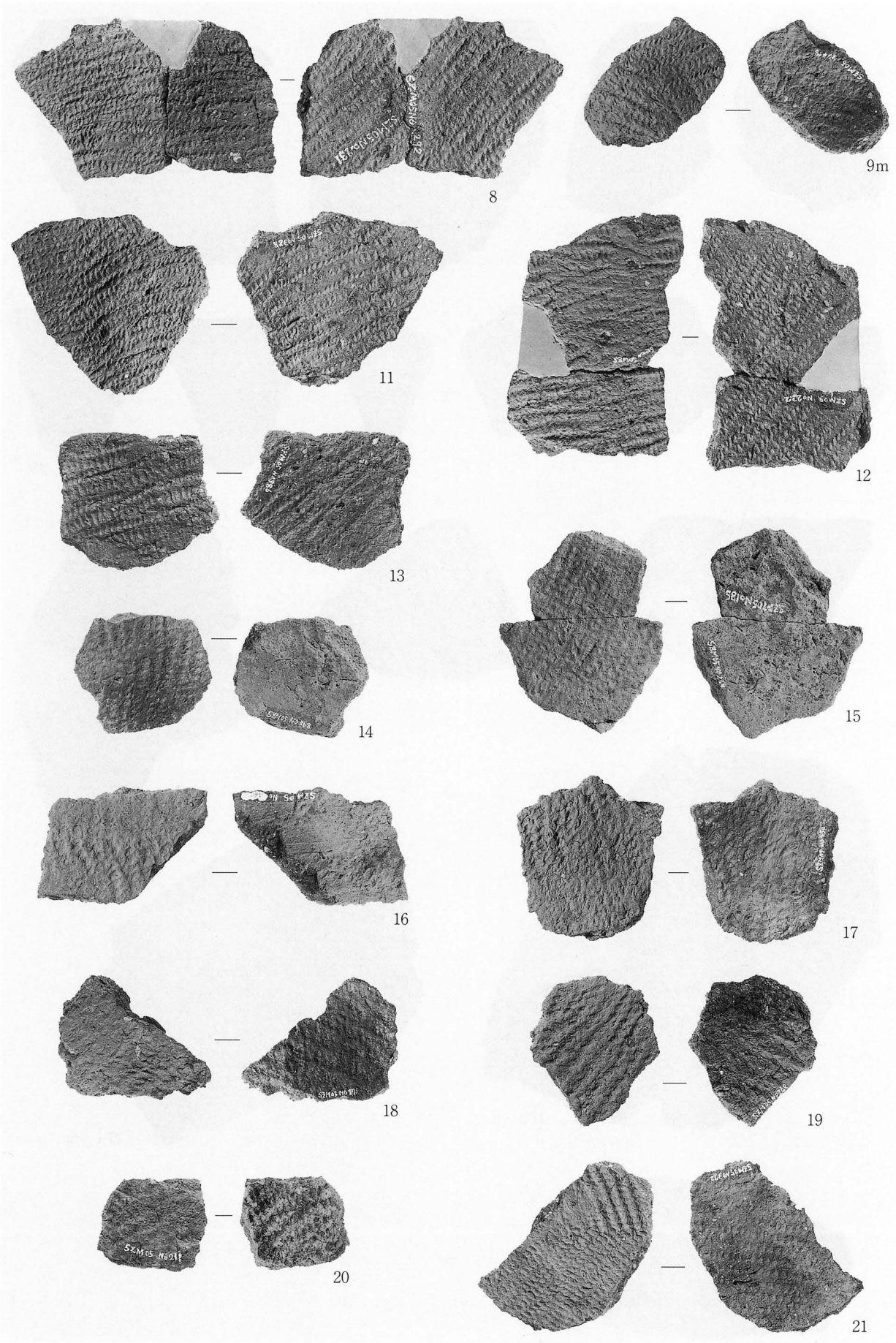


現地説明会風景

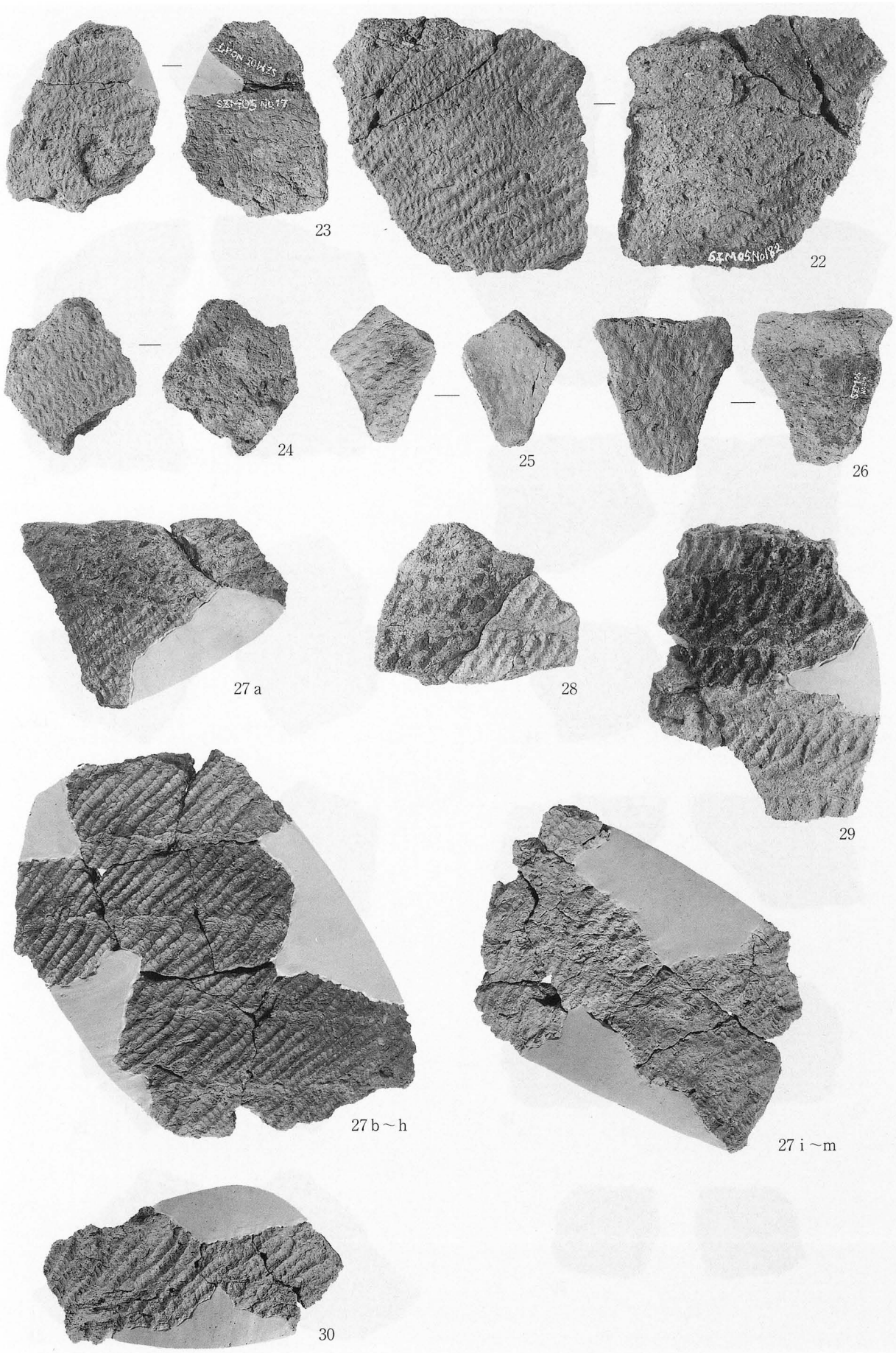
写真図版８　３号焼土遺構、調査区完掘、現地説明会



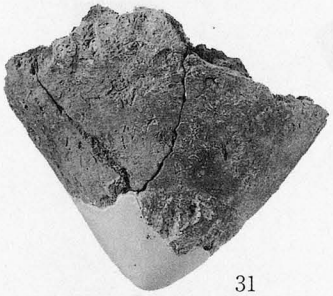
写真図版９　縄文土器①



写真図版10　縄文土器②



写真図版11　縄文土器③


31

32

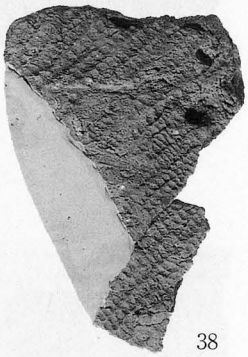
33

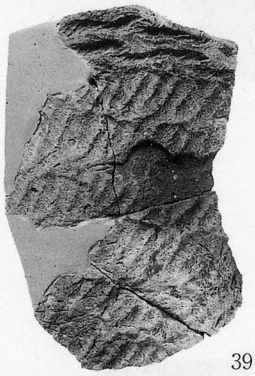
34

35

36

37


38


39

40

41

42

43

44

45

46

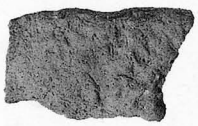
47

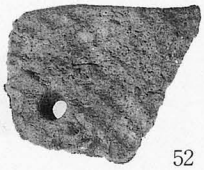
48

49

50

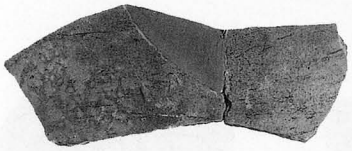
写真図版12　縄文土器④


51


52

53

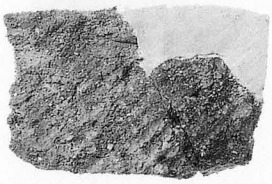
54

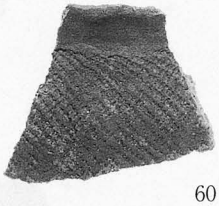

55

56

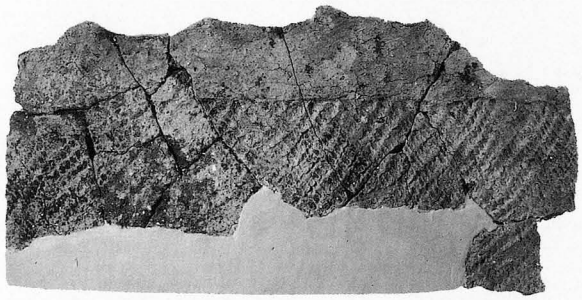
57

58


59


60

61


62

63

64

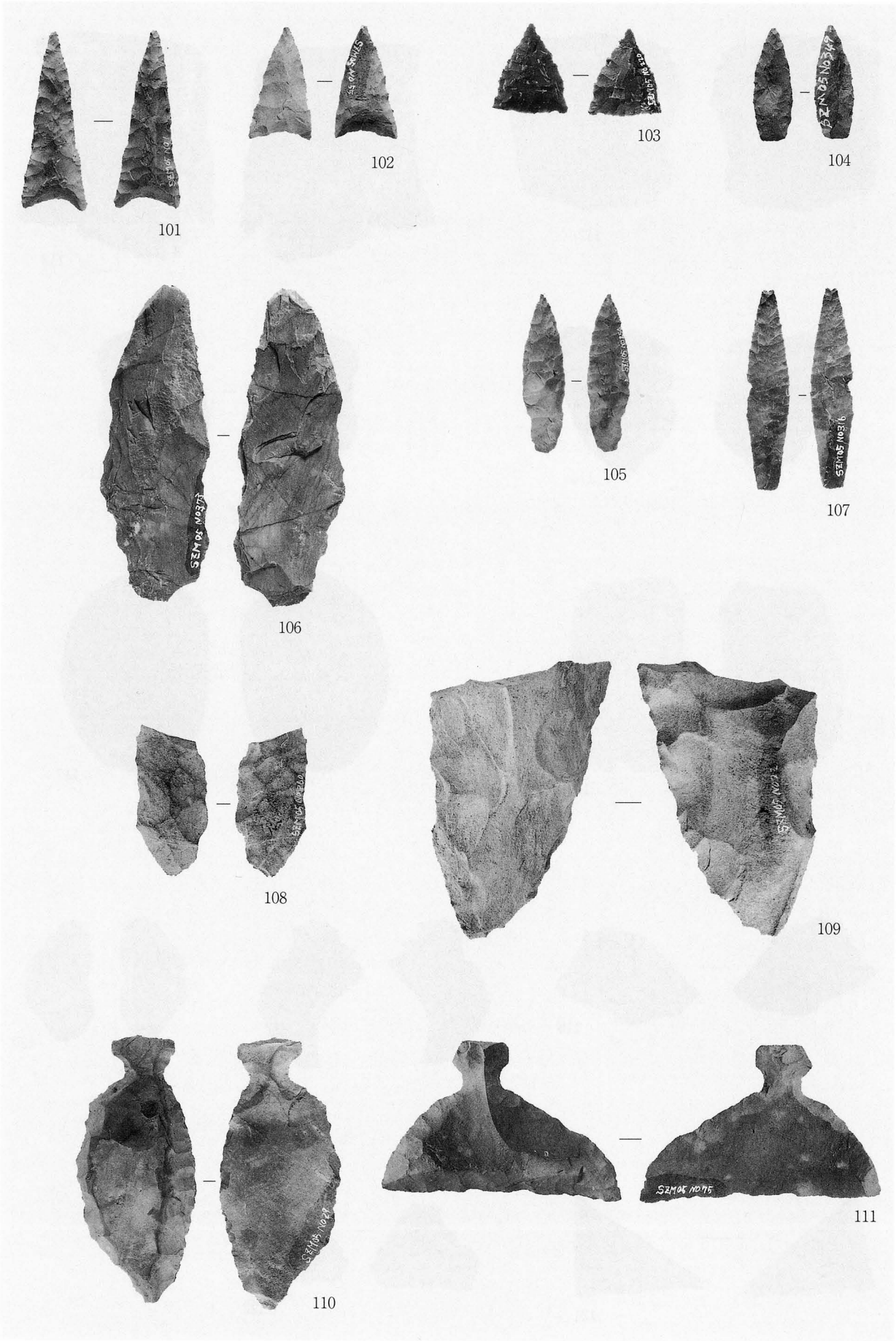
65

66

67

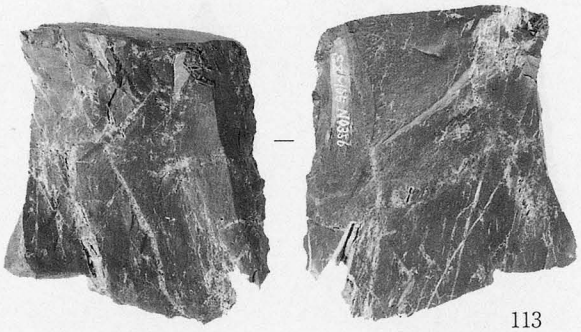
68

写真図版13　縄文土器⑤

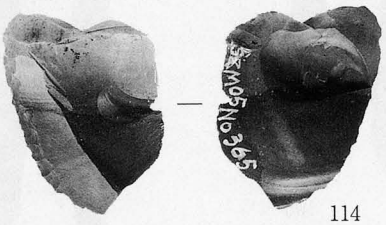


写真図版14　石器①

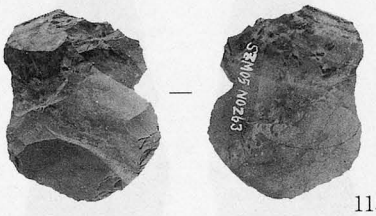
112



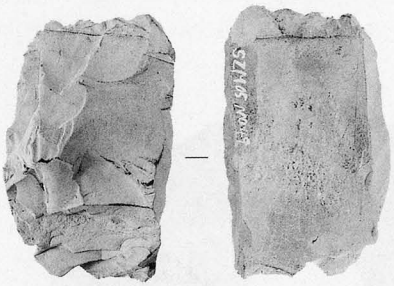
113



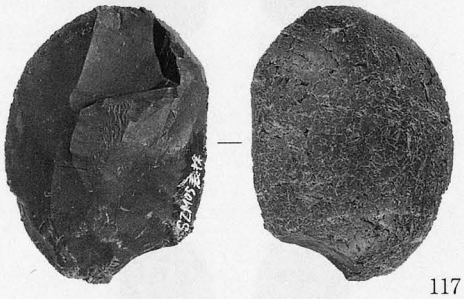
114



115

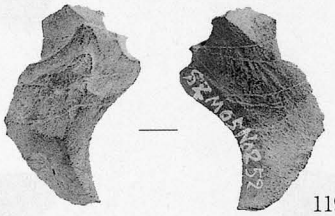


116

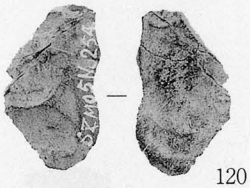


117

118



119



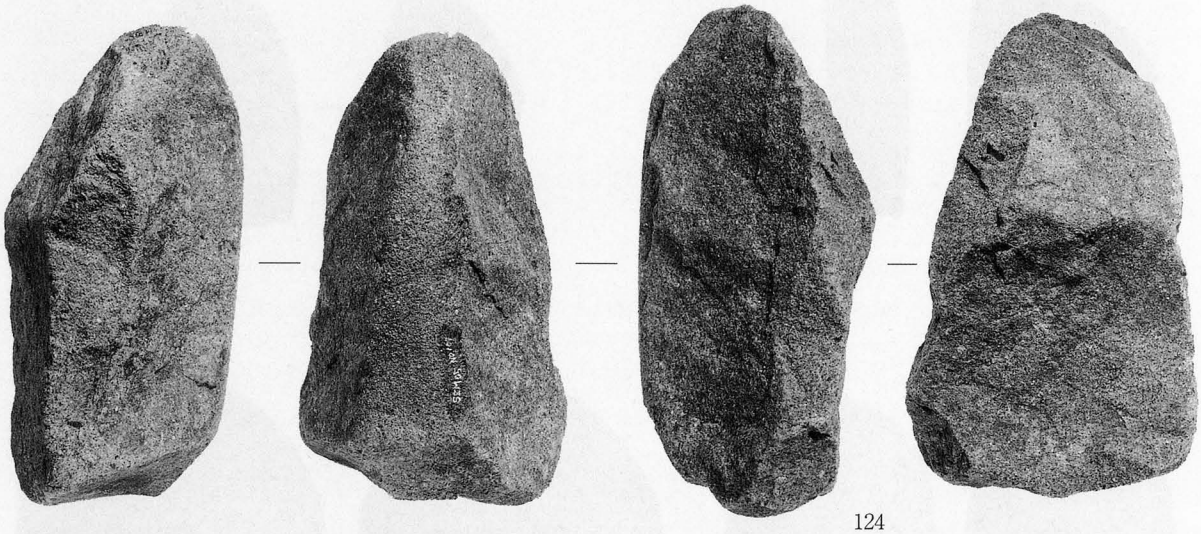
120

121

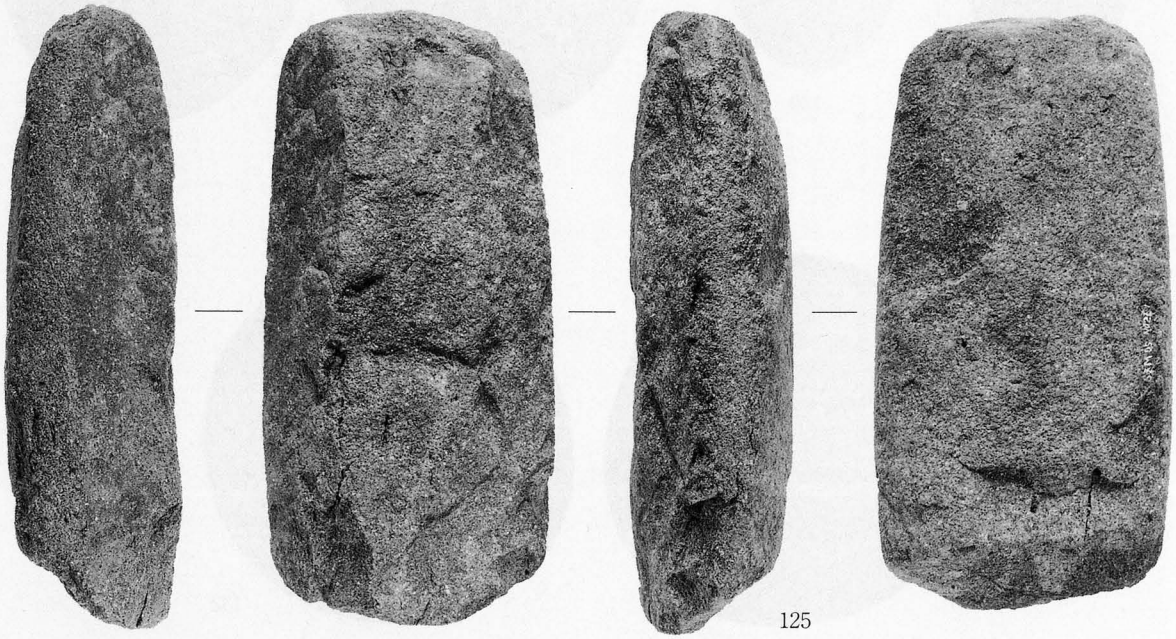
122

写真図版15　石器②

123

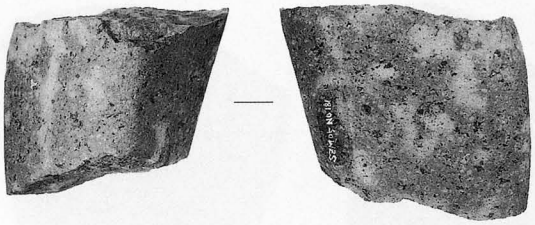


124

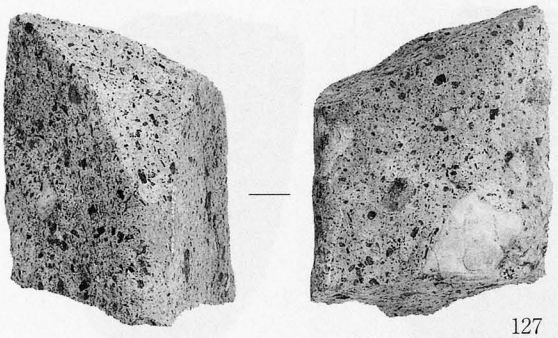


125

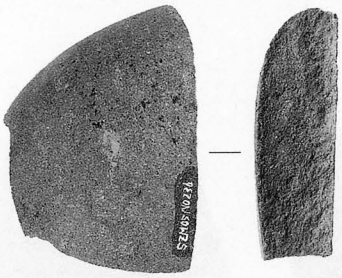
写真図版16　石器③



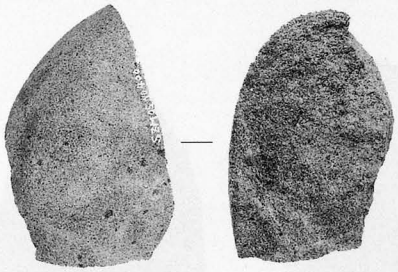
126



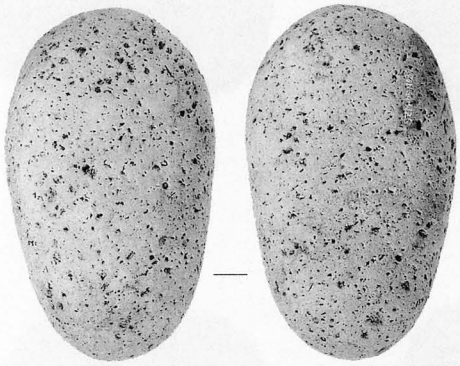
127



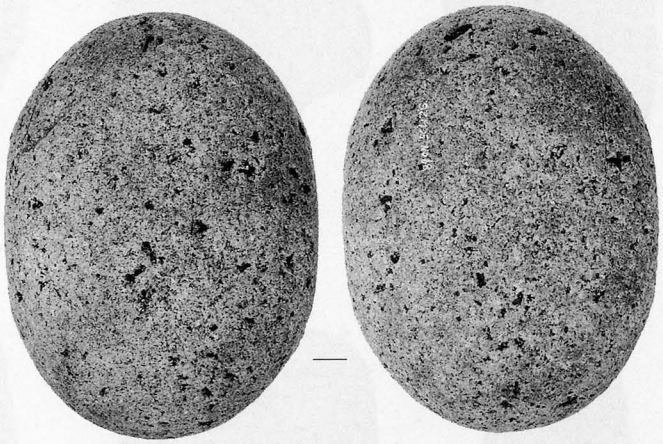
128



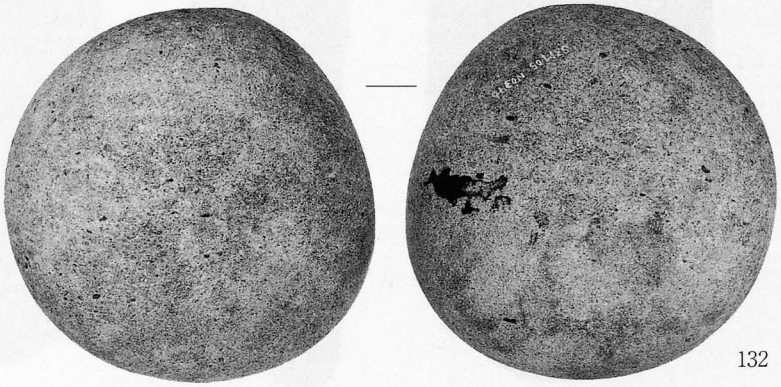
129



130

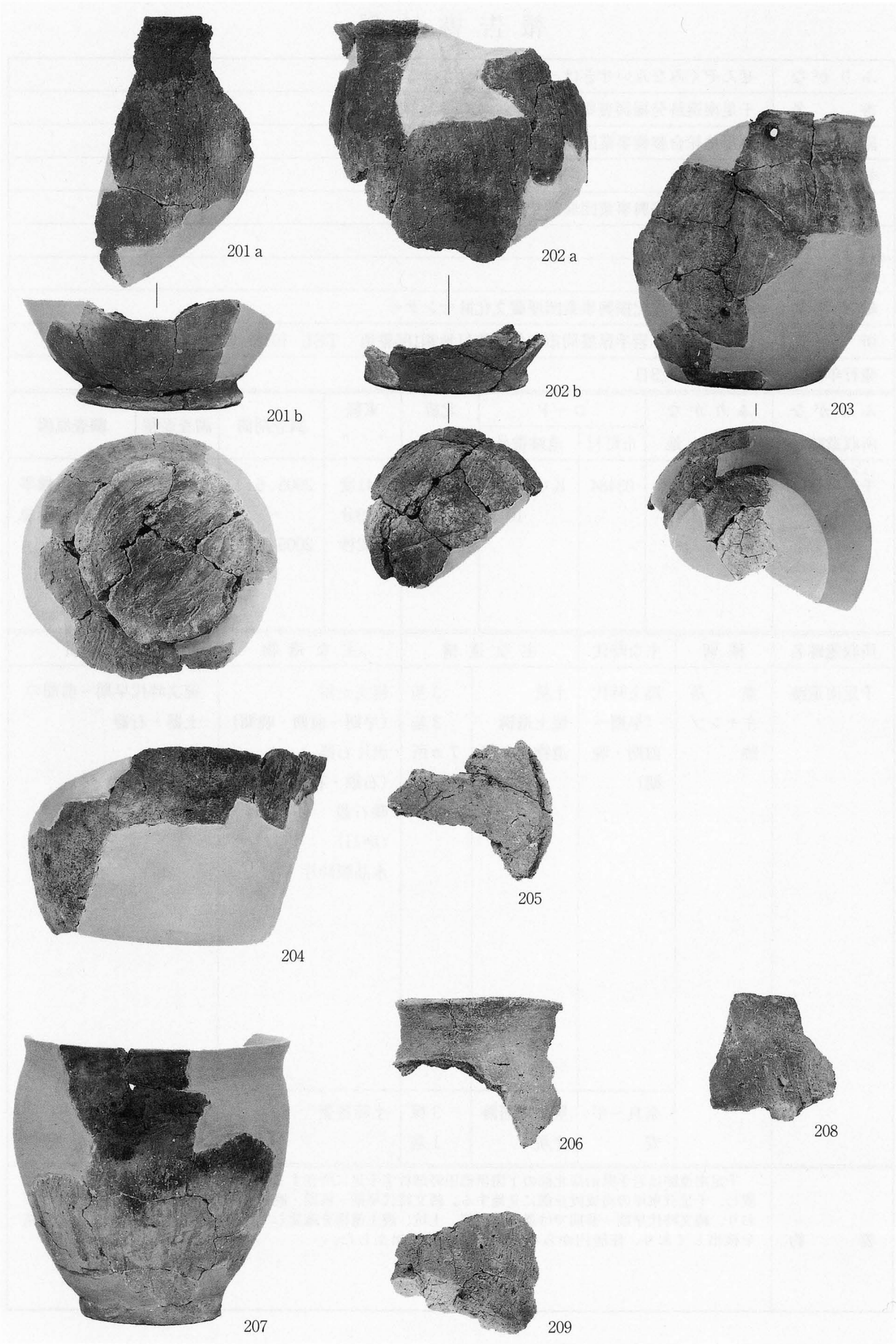


131



132

写真図版17　石器④



写真図版18　土師器

報告書抄録

ふりがな	せんぞくみなみいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	千足南遺跡発掘調査報告書
副書名	農用地総合整備事業関連調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第496集
編著者名	米田　寛
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地　TEL (019) 638－9001
発行年月日	2007年2月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
せんぞくみなみいせき 千足南遺跡	いわてけんしもへい 岩手県下閉伊 ぐんたのはたむらあざ 郡田野畑村字 せんぞく 千足59－16	03484	KG11－ 1013	39度 57分 39秒	141度 49分 02秒	2005.6.1 ～ 2005.7.29	2,297㎡	農用地整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
千足南遺跡	集落 キャンプ跡	縄文時代 (早期～前期・晩期)	土坑 焼土遺構 遺物集中部	3基 3基 7ヵ所	縄文土器 (早期～前期・晩期) 剥片石器 (石鏃・石匙ほか) 礫石器 (磨石) 水晶製砕片	縄文時代早期～前期の土器・石器
		奈良～平安	竪穴住居跡 土坑	3棟 1基	土師器甕	

要約	千足南遺跡は岩手県沿岸北部の下閉伊郡田野畑村字千足に所在する。海岸線から約10㎞離れた山地に位置し、千足沢東岸の河成段丘面に立地する。縄文時代早期～前期・晩期と古代の遺構・遺物が見つかっており、縄文時代早期～前期では遺物集中部、土坑、焼土遺構を確認している。古代では竪穴住居跡と土坑を検出しており、住居内から小形の土師器甕が出土した。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第496集

千足南遺跡発掘調査報告書

農用地総合整備事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成19年２月23日
発　行　平成19年２月23日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001
FAX（019）638－8563

印　刷　株式会社長内印刷
〒020-0122　岩手県盛岡市みたけ三丁目３－28
電話（019）643－5343

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2007